



Business Intelligence プラットフォームユーザガイド

■ SAP BusinessObjects Business Intelligence Platform 4.0 Support Package 5

2012-12-05

著作権

© 2012 SAP AG. All rights reserved. SAP、R/3、SAP NetWeaver、Duet、PartnerEdge、ByDesign、SAP BusinessObjects Explorer、StreamWork、SAP HANA、および本文書に記載されたその他の SAP 製品、サービス、ならびにそれぞれのロゴは、ドイツおよびその他の国々における SAP AG の商標または登録商標です。Business Objects および Business Objects ロゴ、BusinessObjects、Crystal Reports、Crystal Decisions、Web Intelligence、Xcelsius、および本書で引用されているその他の Business Objects 製品およびサービス、ならびにそれぞれのロゴも含めて、Business Objects Software Ltd. の商標または登録商標です。Business Objects は SAP の子会社です。Sybase および Adaptive Server、iAnywhere、Sybase 365、SQL Anywhere、および本書で引用されている Sybase 製品およびサービス、ならびにそれぞれのロゴも含めて、Sybase, Inc. の商標または登録商標です。Sybase は SAP の子会社です。Crossgate、m@gic EDDY、B2B 360°、B2B 360° Services は、ドイツおよびその他の国々における Crossgate AG の登録商標です。Crossgate は SAP の子会社です。本書に記載されたその他すべての製品およびサービス名は、それぞれの企業の商標です。本書に記載されたデータは情報提供のみを目的として提供されています。製品仕様は、国ごとに変わる場合があります。これらの文書の内容は、予告なしに変更されることがあります。これらの文書は SAP AG およびその関連会社（「SAP グループ」）が情報提供のためにのみ提供するもので、いかなる種類の表明および保証を伴うものではなく、SAP グループは文書に関する誤記・脱落等の過失に対する責任を負うものではありません。SAP グループの製品およびサービスに対する唯一の保証は、当該製品およびサービスに伴う明示的保証がある場合に、これに規定されたものに限られます。本書のいかなる記述も、追加の保証となるものではありません。

2012-12-05

目次

| | | |
|-------|--|----|
| 第 1 章 | ドキュメント履歴..... | 9 |
| 第 2 章 | はじめに..... | 11 |
| 2.1 | このドキュメントについて..... | 11 |
| 2.2 | このドキュメントの対象読者..... | 11 |
| 2.3 | SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームについて | 11 |
| 2.4 | ライセンス..... | 12 |
| 2.5 | 基本概念..... | 12 |
| 2.6 | 主要タスク..... | 13 |
| 第 3 章 | セントラル管理コンソールの使用..... | 15 |
| 3.1 | セントラル管理コンソールについて..... | 15 |
| 3.2 | ブラウザから CMC にログオンする..... | 15 |
| 3.3 | CMC での移動..... | 16 |
| 3.4 | CMC の基本設定を設定する..... | 17 |
| 3.4.1 | CMC 基本設定のオプション..... | 17 |
| 3.4.2 | 優先表示ロケール..... | 18 |
| 第 4 章 | リポジトリへのオブジェクトの追加..... | 19 |
| 4.1 | BI プラットフォームへのオブジェクトの追加..... | 19 |
| 4.1.1 | CMC でオブジェクトを追加する..... | 19 |
| 4.1.2 | CMS へのオブジェクトの直接保存..... | 21 |
| 第 5 章 | オブジェクトの整理..... | 23 |
| 5.1 | フォルダ | 23 |
| 5.1.1 | フォルダの使用..... | 23 |
| 5.1.2 | フォルダのアクセス権の指定..... | 25 |
| 5.1.3 | フォルダレベルでインスタンスを制限する..... | 25 |
| 5.1.4 | 個人用フォルダを表示する..... | 26 |
| 5.2 | カテゴリ..... | 26 |
| 5.2.1 | カテゴリの使用..... | 27 |

| | | |
|--------|---|----|
| 第 6 章 | コンテンツオブジェクトの使用..... | 31 |
| 6.1 | 一般的なオブジェクトの管理..... | 31 |
| 6.1.1 | オブジェクトをコピーする..... | 31 |
| 6.1.2 | オブジェクトを移動する..... | 32 |
| 6.1.3 | オブジェクトショートカットを作成する..... | 32 |
| 6.1.4 | オブジェクトを削除する..... | 32 |
| 6.1.5 | 1 つまたは複数のオブジェクトを検索する..... | 33 |
| 6.1.6 | 新しいハイパーリンクを作成する..... | 34 |
| 6.1.7 | オブジェクトまたはインスタンスを出力先に送信する..... | 34 |
| 6.1.8 | オブジェクトのプロパティを変更する..... | 37 |
| 6.1.9 | 関係..... | 37 |
| 6.2 | レポートオブジェクトの管理..... | 38 |
| 6.2.1 | レポートオブジェクトとレポートインスタンスの概要..... | 39 |
| 6.2.2 | レポートの最新表示オプションの設定..... | 40 |
| 6.2.3 | レポートの表示オプションの設定..... | 41 |
| 6.2.4 | デフォルトサーバの指定..... | 42 |
| 6.2.5 | データベースの設定を変更する..... | 43 |
| 6.2.6 | Crystal レポートのデフォルトプロンプト値を変更する..... | 45 |
| 6.2.7 | Web Intelligence ドキュメントのプロンプトを更新する..... | 45 |
| 6.2.8 | フィルタを使用する..... | 46 |
| 6.2.9 | プリンタとページレイアウトオプションの設定..... | 47 |
| 6.2.10 | 処理拡張機能..... | 49 |
| 6.2.11 | ハイパーリンクを使用したレポートでの作業..... | 51 |
| 6.2.12 | Crystal レポートのサムネイル画像を表示する..... | 54 |
| 6.2.13 | Crystal レポートにアラートを表示する..... | 54 |
| 6.2.14 | Web Intelligence ドキュメントのユニバースを表示する..... | 54 |
| 6.3 | 統合環境でのレポートの操作..... | 55 |
| 6.3.1 | NetWeaver BW から BusinessObjects Enterprise へのレポートの追加..... | 55 |
| 6.3.2 | SAP NetWeaver BW の本稼働システムへの開発コンテンツの移行..... | 56 |
| 6.3.3 | レポートの表示..... | 56 |
| 6.3.4 | SAP NetWeaver BW クエリから生成されたレポートのパーソナライゼーション..... | 58 |
| 6.4 | プログラムオブジェクトの管理..... | 61 |
| 6.4.1 | プログラムオブジェクトとインスタンスの概要..... | 61 |
| 6.4.2 | プログラムの処理オプションの設定..... | 63 |
| 6.4.3 | 実行可能プログラムの設定..... | 64 |
| 6.4.4 | Java プログラムの設定..... | 66 |
| 6.4.5 | プログラムオブジェクトのユーザアカウントを指定する..... | 68 |
| 6.5 | オブジェクトパッケージ管理..... | 68 |
| 6.5.1 | オブジェクトパッケージ、コンポーネント、インスタンスについて..... | 68 |
| 6.5.2 | 新しいオブジェクトパッケージを作成する..... | 69 |

| | | |
|--------------|---------------------------------------|------------|
| 6.5.3 | オブジェクトパッケージへのオブジェクトの追加..... | 69 |
| 6.5.4 | オブジェクトパッケージとオブジェクトの設定..... | 70 |
| 6.5.5 | 認証およびオブジェクトパッケージ..... | 71 |
| 第 7 章 | オブジェクトのスケジュール..... | 73 |
| 7.1 | スケジュール..... | 73 |
| 7.1.1 | スケジュールオプションの設定..... | 73 |
| 7.1.2 | オブジェクトを直ちに実行する..... | 100 |
| 7.1.3 | オブジェクトパッケージによるオブジェクトのスケジュール..... | 100 |
| 7.2 | インスタンスの管理..... | 101 |
| 7.2.1 | インスタンス情報の表示..... | 102 |
| 7.2.2 | インスタンスの一時停止および再開..... | 106 |
| 7.2.3 | インスタンスを削除する..... | 106 |
| 7.2.4 | インスタンスに制限を設定する..... | 107 |
| 7.3 | カレンダー..... | 108 |
| 7.3.1 | カレンダーを作成する..... | 108 |
| 7.3.2 | カレンダーに日付を追加する..... | 109 |
| 7.3.3 | カレンダーを削除する..... | 113 |
| 7.3.4 | カレンダーへのアクセス権の指定..... | 114 |
| 7.4 | イベント..... | 114 |
| 7.4.1 | ファイルベースのイベント..... | 115 |
| 7.4.2 | スケジュールベースのイベント..... | 116 |
| 7.4.3 | カスタムイベント..... | 118 |
| 7.4.4 | イベントのアクセス権の指定..... | 119 |
| 第 8 章 | アラート..... | 121 |
| 8.1 | アラート..... | 121 |
| 8.1.1 | アラートオブジェクトソース..... | 121 |
| 8.1.2 | アラートワークフロー..... | 122 |
| 8.1.3 | アラートと Crystal レポートアラート通知の相違点..... | 123 |
| 8.1.4 | アラートに必要な権限..... | 123 |
| 8.1.5 | 購読の不整合の解決..... | 126 |
| 8.2 | アラートの使用..... | 126 |
| 8.2.1 | セントラル管理コンソールにおけるアラートソースオブジェクトの検索..... | 126 |
| 8.2.2 | イベントのアラートを有効化する..... | 127 |
| 8.2.3 | アラートを購読する..... | 127 |
| 8.2.4 | アラートを購読解除する..... | 128 |
| 8.2.5 | 他のユーザをアラートの購読者として指定する..... | 129 |
| 8.2.6 | ほかのユーザのアラートの購読を解除する..... | 130 |
| 8.2.7 | ユーザをアラートから除外する..... | 130 |
| 8.2.8 | アラートソースのアラート設定を管理する..... | 130 |

| | | |
|---------------|--|------------|
| 8.2.9 | アラート管理の推奨事項..... | 131 |
| 第 9 章 | プロフィールの管理..... | 133 |
| 9.1 | プロフィールの仕組み..... | 133 |
| 9.1.1 | プロフィールと公開のワークフロー..... | 133 |
| 9.1.2 | プロフィールを作成する..... | 134 |
| 9.2 | プロフィールターゲットおよびプロフィール値..... | 134 |
| 9.2.1 | グローバルプロフィールターゲットを指定する..... | 135 |
| 9.2.2 | プロフィール値の指定..... | 136 |
| 9.3 | プロフィール間の競合の解消..... | 138 |
| 9.3.1 | プロフィール値の競合..... | 139 |
| 9.4 | プロフィールのアクセス権の指定..... | 140 |
| 第 10 章 | 公開..... | 141 |
| 10.1 | 公開について..... | 141 |
| 10.2 | パブリケーションとは..... | 141 |
| 10.3 | パブリケーションの概念..... | 141 |
| 10.3.1 | レポートバースト..... | 142 |
| 10.3.2 | 配信ルール..... | 143 |
| 10.3.3 | 動的受信者..... | 145 |
| 10.3.4 | 出力先..... | 146 |
| 10.3.5 | パブリケーションソースドキュメント名のパーソナライズされたプレースホルダ..... | 149 |
| 10.3.6 | 電子メールフィールドのパーソナライズされたプレースホルダ..... | 151 |
| 10.3.7 | 形式..... | 151 |
| 10.3.8 | パーソナライゼーション..... | 153 |
| 10.3.9 | パブリケーション拡張..... | 154 |
| 10.3.10 | 購読..... | 155 |
| 10.3.11 | Crystal レポート向け PFD のマージ..... | 155 |
| 10.4 | 公開に必要な権限..... | 156 |
| 10.4.1 | 公開者と受信者: 表示する内容とアクセス権..... | 158 |
| 第 11 章 | パブリケーションの使用..... | 159 |
| 11.1 | パブリケーションのデザイン..... | 159 |
| 11.1.1 | SAP BusinessObjects Live Office で使用するためのパブリケーションのデザイン..... | 159 |
| 11.1.2 | SAP 受信者用パブリケーションの設計..... | 159 |
| 11.1.3 | CMC で新しいパブリケーションを作成する..... | 160 |
| 11.1.4 | BI 起動パッドで新しいパブリケーションを作成する..... | 160 |
| 11.1.5 | 既存のパブリケーションを開く..... | 160 |
| 11.1.6 | 新規パブリケーションに一般プロパティを入力する..... | 161 |
| 11.1.7 | ソースドキュメントを選択する..... | 161 |

| | | |
|---------|--|-----|
| 11.1.8 | Enterprise 受信者を選択する..... | 162 |
| 11.1.9 | 動的受信者を指定する..... | 163 |
| 11.1.10 | パブリケーションの出力先を指定する..... | 164 |
| 11.1.11 | パブリケーションソースドキュメント名のパーソナライズされたプレースホルダ..... | 165 |
| 11.1.12 | 電子メールフィールドのパーソナライズされたプレースホルダ..... | 166 |
| 11.1.13 | 動的コンテンツソースドキュメントを電子メールに埋め込む..... | 166 |
| 11.1.14 | スケジュール情報を指定する..... | 168 |
| 11.1.15 | Crystal レポートパブリケーションの設計タスク..... | 168 |
| 11.1.16 | Web Intelligence ドキュメントパブリケーションの設計タスク..... | 175 |
| 11.1.17 | 追加のパブリケーション機能の使用..... | 176 |
| 11.2 | パブリケーションのデザイン後のタスク..... | 185 |
| 11.2.1 | パブリケーションの最終処理..... | 185 |
| 11.2.2 | パブリケーションをテストする..... | 185 |
| 11.2.3 | パブリケーションを購読または購読解除する..... | 186 |
| 11.2.4 | パブリケーションの実行をスケジュールする..... | 186 |
| 11.2.5 | パブリケーション結果の表示..... | 187 |
| 11.2.6 | パブリケーションインスタンスを再配布する..... | 190 |
| 11.2.7 | 失敗したパブリケーションを再試行する..... | 191 |
| 11.3 | パブリケーションパフォーマンスの向上..... | 191 |
| 11.3.1 | ソースドキュメントの追加に関する推奨事項..... | 193 |
| 11.3.2 | 動的受信者ソースの使用に関する推奨事項..... | 194 |
| 11.3.3 | 電子メールのパブリケーションインスタンスの送受信に関する推奨事項..... | 195 |
| 付録 A | より詳しい情報..... | 197 |
| | 索引..... | 199 |

ドキュメント履歴

以下の表は、最も重要なドキュメント変更の概要です。

| バージョン | 日付 | 説明 |
|--|-------------|--|
| SAP BusinessObjects 4.0 | 2011 年 11 月 | このドキュメントの初版です。 |
| SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.0 サポートパッケージ 5 | 2012 年 11 月 | SAP BusinessObjects Business Intelligence ソフトウェアへの Windows ショートカットメニューが変更されました。新しいショートカットメニューは、[スタート] > [すべてのプログラム] > [SAP Business Intelligence] にあります。 |

はじめに

2.1 このドキュメントについて

このドキュメントでは、BI プラットフォームでのオブジェクトの操作と管理に関する情報、および、特にこれらのタスクをセントラル管理コンソール (CMC) を使って実行する方法について説明しています。手順は、一般的なタスクを対象に説明します。概念情報と技術に関する詳細情報は、すべての詳細トピックで提供します。

デプロイメントの計画、サーバの管理、権限の設定、認証の設定、ユーザおよびグループの管理など、システム管理タスクの詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』を参照してください。BI プラットフォームのインストールの詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームインストールガイド』を参照してください。いずれのガイドも、(<http://help.sap.com>) で入手できます。

2.2 このドキュメントの対象読者

このドキュメントは、リポジトリ内でコンテンツを管理し、更新されたコンテンツを受信者に配布するコンテンツ管理者およびパワーユーザを対象としています。

2.3 SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームについて

BI プラットフォームは、信頼性に優れた柔軟でスケーラブルなレポート配布ソリューションです。イントラネットやエクストラネット、インターネット、企業ポータルなどのあらゆる Web アプリケーションを介して、エンドユーザへのパワフルな対話型レポートの配布を実現します。BI プラットフォームは、週次販売レポートの配布、顧客用に特化したサービスの提供、または企業ポータルへの重要情報の統合などのどの目的で使用しても、組織内だけでなくその範囲を越えて利益をもたらします。レポーティング、データ分析、および情報配信のための統合スイートであるプラットフォームは、エンドユーザの生産性を向上し、管理の労力を減少させるソリューションを提供します。

2.4 ライセンス

BI プラットフォームでは、以下のタイプのユーザライセンスをサポートしています。

- ・ BI ビューア
- ・ BI アナリスト
- ・ 同時接続ユーザ
- ・ 指定ユーザ

ライセンスタイプによって、特定のタスクとアプリケーションに対するアクセスが許可または制限されます。お持ちのライセンスによって、特定のアプリケーションへのアクセス、新しいコンテンツの作成、リポジトリへのドキュメントの追加ができないことがあります。お持ちのライセンスについては、システム管理者に問い合わせてください。ライセンスの詳細については、SAP ヘルプポータルにある、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』(<http://help.sap.com>) を参照してください。

2.5 基本概念

始める前に、BI 起動パッドの基本概念を一読してください。実行するタスクによって、これらの概念が該当しないことがあります。

オブジェクト

オブジェクトは、BI プラットフォームまたはその他のソフトウェアで作成され、BI プラットフォームリポジトリに保存され管理されるドキュメントまたはファイルです。

カテゴリ

カテゴリは、フォルダの代替となる組織的な構成です。オブジェクトの分類に使用します。

スケジュール

スケジュールは、指定した時間に自動的にオブジェクトを実行するプロセスです。スケジュールによって、オブジェクト内の動的コンテンツまたはデータの最新表示、インスタンスの作成、インスタンスのユーザへの配布、ローカルへの保存が実行されます。

イベント

イベントは、BI プラットフォームシステム内のオカレンスを表すオブジェクトです。イベントは、次のようなさまざまな目的に使用できます。

- ・ スケジュールされたジョブの実行後にアクションをトリガする、スケジュール依存関係として動作する。
- ・ アラート通知をトリガする。
- ・ BI プラットフォームのパフォーマンスを監視する。

カレンダー

カレンダーは、スケジュールされたジョブの実行日をカスタマイズしたリストです。

インスタンス

インスタンスは、オブジェクトを実行した時刻以降のデータを含むオブジェクトのスナップショットです。

公開

公開は、パーソナライズした動的コンテンツを大量消費するために一般に公開するプロセスです。

プロフィール

プロフィールは、ユーザおよびグループをパーソナライズした値に関連付けるオブジェクトです。プロフィールは、パーソナライズしたコンテンツを作成し、受信者に配布するために、公開に使用します。

アラート

アラートは、BI プラットフォームでイベントが発生するとユーザおよび管理者に通知するプロセスです。

2.6 主要タスク

この節では、BI プラットフォームで実行できる主なタスクを示し、これらのタスクの情報を含むトピックを説明しています。

リポジトリへオブジェクトを追加するには

「BI プラットフォームへのオブジェクトの追加」を参照してください。

リポジトリに追加されたオブジェクトを変更および管理するには

「コンテンツオブジェクトの使用」の章を参照してください。

オブジェクトを整理するには

「オブジェクトの整理」の章を参照してください。

コンテンツをユーザに配布するには

コンテンツは、スケジュール、公開、およびアラートを使用してユーザに配信できます。

- ・ スケジュールを使用すれば、動的コンテンツドキュメントのデータを最新表示し、最新表示されたデータを一定間隔でユーザに配信できます。「スケジュール」を参照してください。
- ・ 公開を使用すれば動的コンテンツドキュメントのコンテンツを特定のユーザおよびグループ用にパーソナライズおよび最新表示できます。「公開について」を参照してください。
- ・ アラートでは、BI プラットフォームでイベントが発生したときに購読者にアラート通知が送信されます。「アラート」の章を参照してください。

関連項目

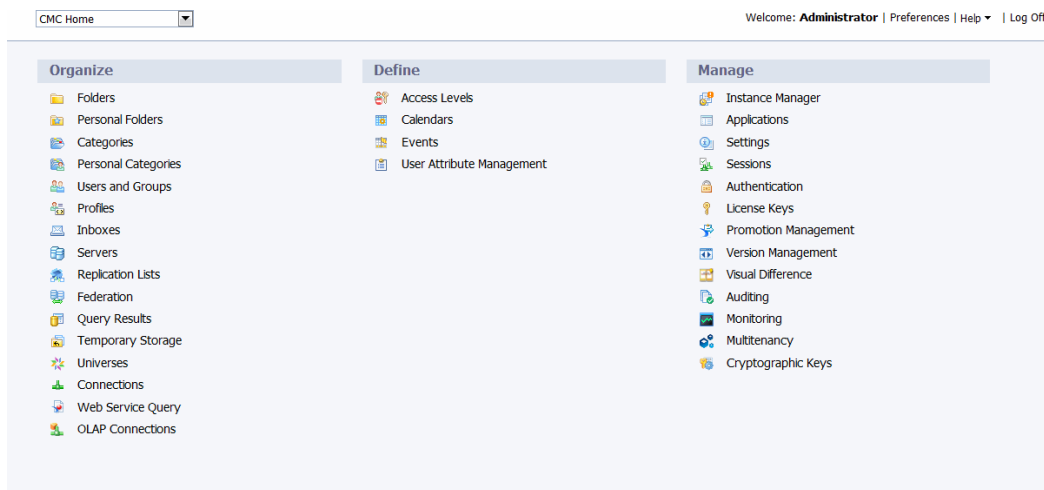
- ・ 19 ページの[BI プラットフォームへのオブジェクトの追加](#)
- ・ 31 ページの[一般的なオブジェクトの管理](#)

- ・ 73 ページの[スケジュール](#)」
- ・ 121 ページの[アラート](#)」

セントラル管理コンソールの使用

3.1 セントラル管理コンソールについて

セントラル管理コンソール (CMC) は Web ベースのツールで、ユーザ管理、コンテンツ管理、サーバ管理など日常的なほとんどすべての管理タスクを実行するのに使用できます。



BI プラットフォームの有効なアカウント情報を持っているユーザであれば、だれでも CMC にログオンして設定を選択できます。Administrators グループに属していないユーザは、必要なアクセス権を持っていないと管理タスクを実行できません。

3.2 ブラウザから CMC にログオンする

CMC には、ブラウザに URL を入力するか、Windows の [スタート] メニューからアクセスできます。

CMC を使い終わったら、ログオフしてセッションを終了します。[ログオフ] リンクは、CMC の右上隅にあります。

- 1 適切な URL を入力するか、Windows の [スタート] メニューから CMC を起動します。

デフォルトの URL は `http://webserver:8080/BOE/CMC/` です。webserver には Web サーバマシンの名前を指定します。デプロイメントでカスタムの URL が設定されている場合は、その URL を入力します。必要に応じて、デフォルトのポート番号を、インストール時に指定した番号に変更します。

Windows では、[スタート] > [プログラム] > [SAP Business Intelligence] > [SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4] > [セントラル管理コンソール] を選択します。CMC が Web アプリケーションコンテナサーバ (WACS) にホストされている場合は、[スタート] > [プログラム] > [SAP Business Intelligence] > [SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4] > [SAP BusinessObjects BI プラットフォーム WACS セントラル管理コンソール] を選択します。

- 2 [システム] ボックスに Central Management Server (CMS) の名前を入力します。
- 3 ユーザ名とパスワードを入力します。

LDAP 認証を使用している場合は、Administrators グループにマップされたアカウントを使用してログオンできます。

注

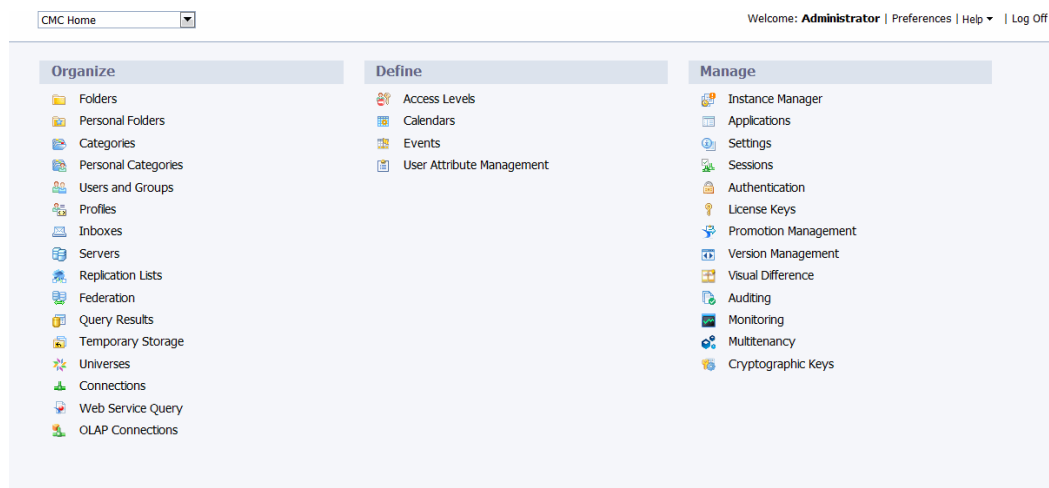
組織から管理者が初めて CMC にアクセスする場合は、[ユーザ名] として「Administrator」と入力し、インストール中に作成したデフォルトのパスワードを指定します。

- 4 [認証の種類] の一覧で、[Enterprise] を選択します。

Windows AD、LDAP、およびその他の認証方法も一覧に表示されます。ただし、これらのタイプの認証を使用するには、その前にサードパーティのユーザアカウントとグループを BI プラットフォームにマップする必要があります。

- 5 [ログオン] をクリックします。

CMC のホーム ページが表示されます。



3.3 CMC での移動

[ホーム] ページから CMC を移動する方法は数多くあります。

- ・ 左側のアイコンをクリックします。
- ・ [整理]、[定義]、および [管理] 見出しの下リンクをクリックします。
- ・ セントラル管理コンソールの下にあるリスト内のオプションを選択します。

注

選択した移動先に多くの子オブジェクトがある場合、ツリービューにすべての子オブジェクトが表示されない可能性があります。このような場合は、ページ区切りのオブジェクトリストを使用して、子オブジェクトに移動できます。

3.4 CMC の基本設定を設定する

CMC の [基本設定] エリアでは、BI プラットフォームの管理ビューをカスタマイズできます。

- 1 CMC で、右上隅の [基本設定] をクリックします。
- 2 必要に応じて基本設定を設定します。

CMC の基本設定は、BI 起動パッド内の基本設定と同じように動作します。ただし、CMC の基本設定は CMC および BI 起動パッドの両方に影響を及ぼします。基本設定の詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence 起動パッドユーザガイド』を参照してください。

- 3 [保存して閉じる] をクリックします。

関連項目

- ・ 17 ページの [CMC 基本設定のオプション](#)

3.4.1 CMC 基本設定のオプション

| CMC 基本設定のオプション | 説明 |
|---------------------------|---|
| [製品ロケール] リスト | BI プラットフォームのデフォルトの言語オプションを設定します。詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームインストールガイド』を参照してください。 |
| [優先表示ロケール] リスト | CMC の日付、時刻、および数値のデフォルトの書式設定オプションを設定します。 |
| [1 ページあたりの最大オブジェクト数] ボックス | <p>CMC のページまたはタブに表示されるオブジェクトの数を制限します。</p> <p>注 この値では、表示されるオブジェクトの数には制限はなく、1 ページあたりに表示されるオブジェクトの数を制限するだけです。</p> |

| CMC 基本設定のオプション | 説明 |
|--------------------|---|
| [タイムゾーン] リスト | <p>BI プラットフォームをリモートで管理する場合は、このリストを使用してタイムゾーンを指定します。BI プラットフォームは、スケジュールパターンおよびイベントを適切に同期します。</p> <p>たとえば、東部標準時 (米国とカナダ) を選択して、サンフランシスコにあるサーバ上で毎日午前 5:00 にレポートを実行するようにスケジュールすると、サーバによって、レポートが太平洋標準時の午前 2:00 に実行されます。</p> |
| [未保存データをプロンプト] リスト | <p>[キャンセル] または [閉じる] をクリックして、作業を保存せずにダイアログボックスを閉じるときに、確認を要求するかどうかを制御します。次のいずれかのオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ オン: プロンプトが有効になります。 ・ オフ: プロンプトが無効になります。 ・ デフォルト: プロンプトは、C:\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\Tomcat6\webapps\BOE\WEB-INF\config\custom フォルダ内にある CmcApp.properties ファイルに設定されている値によって決まります。 |

3.4.2 優先表示ロケール

優先表示ロケール (PVL) では、日付、時間、および数値の書式を設定します。また、多言語オブジェクトの場合は PVL でオブジェクトの名前および説明を表示する言語も指定します。オブジェクトに翻訳された名前および説明が複数ある場合、表示言語は以下のようにして決定されます。

- 1 ユーザの PVL に対応する名前および説明が表示されます。

BI プラットフォームではデフォルトのフォールバックロケールが使用されることもありますが、これは通常、ユーザの PVL のバリエーションとなります。たとえば、PVL がフランス語 (カナダ) である場合に、オブジェクトにフランス語 (カナダ) に翻訳された名前および説明がないと、フランス語 (フランス) が使用されます。

- 2 PVL が設定されていない場合、製品のロケールと同じ言語で名前および説明が表示されます。
- 3 上記のいずれにも該当しない場合は、オブジェクトのソース言語で名前および説明が表示されます。

リポジトリへのオブジェクトの追加

4.1 BI プラットフォームへのオブジェクトの追加

この節では、オブジェクトを BI 環境に追加し、認証されたユーザが利用できるようにする作業について説明します。BI プラットフォームには、次のようなさまざまな種類のオブジェクトを追加できます。

- ・ レポート (SAP Crystal Reports から)
- ・ ドキュメント (SAP BusinessObjects Web Intelligence から)
- ・ Flash オブジェクト
- ・ プログラム
- ・ Microsoft Excel、Word、PowerPoint ファイル
- ・ PDF ファイル
- ・ テキストファイル
- ・ リッチテキスト形式ファイル

BI プラットフォームにオブジェクトを追加するには、CMC で行う方法、または CMS にオブジェクトを直接保存する方法があります。

注

ユーザライセンスによっては、オブジェクトを追加するアクセス権限がない場合もあります。お持ちのライセンスの種類については、システム管理者に問い合わせてください。ライセンスの詳細については、SAP ヘルプポータルにある、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』(<http://help.sap.com>)を参照してください。

ヒント

BI 起動パッドでは、新しいオブジェクトを作成したり、BI プラットフォームに直接オブジェクトを追加したりすることができます。SAP ヘルプポータル (<http://help.sap.com>) にある『SAP BusinessObjects Business Intelligence 起動パッドユーザガイド』を確認してください。

4.1.1 CMC でオブジェクトを追加する

BI プラットフォームに対して管理者権限を持っている場合は、CMC からオブジェクトをインターネットに追加することができます。CMC を使用して単一のオブジェクトを追加するか、管理タスクをリモートで実行します。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアを表示します。
- 2 オブジェクトを追加するフォルダを見つけて選択します。

- 3 [管理] > [追加] を選択し、[プログラムファイル] を選択してプログラムオブジェクトを追加するか、[ローカルドキュメント] を選択してその他の種類のオブジェクトを追加します。
- 4 表示されるダイアログ ボックスで、オブジェクトのプロパティを指定します。
表示されるプロパティのフィールドは、選択するオブジェクトの種類 (プログラムファイルまたはローカルドキュメント) に応じて変わります。プロパティのフィールドは CMC でのオブジェクトプロパティテーブルにまとめられます。
- 5 オブジェクトを 1 つのカテゴリに割り当てるには、リストでカテゴリを選択します。
- 6 [OK] をクリックします。
CMC が最新表示され、追加したオブジェクトを含むフォルダのコンテンツが表示されます。

CMC にオブジェクトが追加された後に、必要に応じて、タイトル、説明、データベースログオン情報、スケジュール情報、ユーザのアクセス権などそのオブジェクトに関するプロパティを変更できます。

4.1.1.1 CMC オブジェクトプロパティのオプション

| オブジェクトの種類 | プロパティ | 説明 |
|------------------------------|----------------|---|
| Crystal レポートおよびその他の種類のオブジェクト | ファイル名 | 追加するオブジェクトの名前を入力し、[参照] をクリックしてオブジェクトを検索します。 |
| | タイトル | オブジェクトの名前を入力します。 |
| | 説明 | オブジェクトの説明を入力します。 |
| | キーワード | オブジェクトのキーワードを入力します。 |
| Crsytal レポートのみ | 保存済みデータを保持 | このオプションは、レポートの保存済みデータを保持する場合に選択します。 |
| | レポートからの説明を使用する | レポートの概要情報を保持する場合は、このオプションを選択します。 |

| オブジェクトの種類 | プロパティ | 説明 |
|---------------|-------------------|---|
| プログラムファイルのみ | 既存のプログラムオブジェクトの参照 | 追加するプログラムオブジェクトの名前を入力し、[参照] をクリックしてオブジェクトを検索します。 |
| | プログラムタイプ | オプションを選択し、追加しているプログラムのタイプを定義します。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 実行ファイル(バイナリ、バッチ、シェルスクリプト) ・ Java ・ スクリプト(VBScript、JavaScript) |
| その他の種類のオブジェクト | MIME | 必要に応じて、オブジェクトに対して MIME 拡張子を指定します。 |

4.1.2 CMS へのオブジェクトの直接保存

SAP Crystal Reports for Enterprise、SAP BusinessObjects Web Intelligence などの BI プラットフォームデザイナコンポーネントがインストールされている場合は、デザイナから [名前を付けて保存] コマンドを使用して BI プラットフォームにオブジェクトを直接追加することができます。

たとえば、SAP Crystal Reports でレポートを設計した後、[ファイル] > [名前を付けて保存] を選択し、[Enterprise] を選択します。メッセージが表示されたら CMS にログオンして、レポートを保存するフォルダを指定し、[保存] をクリックします。レポートが、Crystal Reports から CMS 内のフォルダに保存されます。

注

SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP ワークスペースを BI プラットフォームに追加することはできませんが、それを定期的なスケジュールで実行することはできません。

オブジェクトの整理

5.1 フォルダ

フォルダとは、他のオブジェクトをグループ化し整理するために使用するオブジェクトです。たとえば、フォルダを使用して、コンテンツを論理グループに分類します。フォルダレベルでセキュリティを設定できるため、フォルダは情報へのアクセス制御のためのツールとしても使用できます。

組織内にすでに存在する構造（部署、地域、またはデータベーステーブル構造など）にフォルダを設定することをお勧めします。その後で、カテゴリを使用して、組織の別のシステムを設定します。

BI プラットフォーム内の各オブジェクトは、フォルダ内に置く必要があります。デフォルトでは、フォルダに追加した新しいオブジェクトは、そのフォルダに指定されているオブジェクトアクセス権を継承します。

5.1.1 フォルダの使用

5.1.1.1 新しいフォルダを作成する

最上位フォルダを作成する前に、すべてのフォルダを表示していることを確認してください。

サブフォルダを作成するには、まず、新しいフォルダを作成するターゲットフォルダを選択します。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアを表示します。
- 2 フォルダを作成する場所に移動します。
- 3 [管理] > [新規] > [フォルダ] を選択します。
- 4 [フォルダの新規作成] ダイアログボックスで、新しいフォルダ名を入力します。
- 5 [OK]をクリックします。

新しいフォルダがフォルダとオブジェクトの一覧に表示されます。

次に、オブジェクトをフォルダに追加したり、フォルダのプロパティを編集したりできます。

ヒント

フォルダを作成した後、フォルダの名前、説明、キーワードを変更するには、フォルダを選択し、[管理] > [プロパティ] を選択します。

関連項目

- ・ 19 ページの[CMC でオブジェクトを追加する](#)
- ・ 37 ページの[オブジェクトのプロパティを変更する](#)

5.1.1.2 フォルダを削除する

フォルダを削除すると、そのフォルダ内のすべてのサブフォルダ、レポート、その他のオブジェクトが BI プラットフォームから削除されます。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアを表示します。
- 2 削除するフォルダを選択します。

ヒント

複数のフォルダを選択するには、Ctrl キーまたは Shift キーを押したままで選択するフォルダをクリックします。このようにすると、複数のフォルダを同時に削除できます。

- 3 [管理] > [削除] を選択します。
- 4 [OK] をクリックして削除を確認します。

5.1.1.3 フォルダのコピー/移動

フォルダをコピーまたは移動すると、そのフォルダ内のオブジェクトもコピーまたは移動されます。BI プラットフォームでは、オブジェクト権限は、フォルダをコピーするか移動するかによって異なる方法で扱われます。

- ・ フォルダをコピーした場合、新しくコピーされたフォルダは、元のフォルダのオブジェクトアクセス権を保持しません。代わりに、コピーされたフォルダは、新しい親フォルダのオブジェクトアクセス権を引き継ぎます。たとえば、個人用の [営業] フォルダを [パブリック] フォルダにコピーすると、[パブリック] フォルダへのアクセス権を持つすべてのユーザが、新しい [営業] フォルダのコンテンツへアクセスできるようになります。
- ・ フォルダを移動した場合、そのフォルダに設定されているオブジェクトアクセス権はすべて保持されます。たとえば、個人用の [営業] フォルダを、全ユーザがアクセスできるフォルダに移動しても、ほとんどのユーザは [営業] フォルダにアクセスできません。

5.1.1.3.1 フォルダをコピー/移動する

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアを表示します。
- 2 コピーまたは移動するフォルダを選択します。

フォルダが最上位のフォルダでない場合は、その親フォルダを探して、親フォルダを選択します。

ヒント

複数のフォルダを選択するには、Ctrl キーまたは Shift キーを押したままで選択するフォルダをクリックします。このようにすると、複数のフォルダを同時に移動できます。

- 3 [整理] > [コピー先]または[整理] > [移動先] を選択します。
 - 4 コピー先フォルダを選択します。
 - 5 [コピー] または、[移動] をクリックします。
- 選択したフォルダは、新しい場所へコピーまたは移動されます。

5.1.2 フォルダのアクセス権の指定

新しく作成したフォルダのオブジェクトアクセス権を変更することができます。デフォルトでは、フォルダに追加した新しいオブジェクトは、そのフォルダのオブジェクトアクセス権を継承します。アクセス権の詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) で入手できる『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』のアクセス権の設定に関する説明を参照してください。

5.1.3 フォルダレベルでインスタンスを制限する

制限を設定することで、BI プラットフォームのレポートインスタンスを自動的に削除できます。フォルダに対して設定した制限は、そのフォルダ内のすべてのオブジェクトに影響します。フォルダレベルでは、次の制限を設定できます。

- ・ オブジェクト、ユーザ、またはユーザグループごとのインスタンス数
 - ・ ユーザまたはグループのインスタンスが保持される日数
- 1 フォルダを選択し、[アクション] > [制限]を選択します。
 - 2 オブジェクトあたりのインスタンス数を制限するには、[オブジェクトのインスタンスがN個より多い場合は、超過インスタンスを削除する] チェックボックスをオンにし、システムに保持するインスタンスの最大数をボックスに入力します。
デフォルト値は 100 です。
 - 3 [超過インスタンスを削除するユーザ/グループ] で次の手順を実行します。
 - a ユーザまたはグループあたりのインスタンス数を制限するには、[追加] をクリックします。
 - b ユーザまたはグループを選択し、[>] をクリックして、[選択されたユーザ/グループ] の一覧にユーザまたはグループを追加します。
 - c [OK] をクリックします。
 - d 選択したユーザまたはグループごとに、[ユーザごとのオブジェクトあたりの最大インスタンス数] ボックスに、システム上に残すインスタンスの最大数を入力します。

デフォルト値は 100 です。

- 4 [N 日後にインスタンスを削除するユーザ/グループ] で次の手順を実行します。
 - a ユーザまたはグループあたりのインスタンスの有効期間を制限するには、[追加] をクリックします。
 - b ユーザまたはグループを選択し、[>] をクリックして [選択されたユーザ/グループ] の一覧にユーザまたはグループを追加します。
 - c [OK] をクリックします。
 - d 選択したユーザまたはグループごとに、[インスタンスの最大保存期間] ボックスに、インスタンスの最大有効日数を入力します。
デフォルト値は 100 です。

関連項目

- ・ 107 ページの [インスタンスに制限を設定する](#)

5.1.4 個人用フォルダを表示する

BI プラットフォームでは、各ユーザのフォルダがシステム上に作成され、個人用フォルダとして CMC で整理されます。デフォルトでは、Administrator アカウント用と guest アカウント用の個人用フォルダがあります。CMC にログインして個人用フォルダのリストを表示すると、自分が [表示] アクセス権以上を持っているフォルダのみが表示されます。

注

BI 起動パッドでは、そのフォルダは [お気に入り] フォルダと呼ばれます。

- ・ ホームページのリスト内にある [個人用フォルダ] を選択します。

サブフォルダの一覧が表示されます。各サブフォルダはシステム上のユーザアカウントに対応します。[表示] アクセス権以上を持っているフォルダおよびサブフォルダのみが、リストに表示されます。

5.2 カテゴリ

カテゴリによってオブジェクトを別の方法で整理できるため、ユーザも別の方法でオブジェクトにナビゲートできます。たとえば、コンテンツを部署フォルダに整理し、カテゴリを使用して別のファイリングシステムを作成し、コンテンツを組織内のさまざまなロール (マネージャや VP など) に従って分類します。このように整理されたモデルを使用すると、部署またはジョブロールに基づいてドキュメントのグループにセキュリティを設定できます。

カテゴリには、会社用と個人用の 2 つのタイプがあります。会社用カテゴリは、適切なアクセス権を持った管理者が作成、管理し、それらを表示するアクセス権を持つグループおよびユーザのみが表示できます。個人用カテゴリは、個人ユーザが作成し、そのユーザのみが表示できます。

すべてのオブジェクトはフォルダ内に置く必要がありますが、カテゴリの割り当ては任意なので、次の点に注意することが重要です。

- ・ オブジェクトのようにカテゴリにアクセス権を割り当てることができますが（つまり、グループやユーザに対してカテゴリへのアクセス権を付与できますが）、カテゴリ内のオブジェクトはそのカテゴリのアクセス権を継承しません。
- ・ カテゴリ内のオブジェクトは、それを含むフォルダとの関係を保持します。
- ・ オブジェクトは複数のカテゴリに割り当てることができます。

5.2.1 カテゴリの使用

カテゴリを使用して、別の方法でオブジェクトを整理できます。ドキュメントは複数のカテゴリに関連付けることができ、カテゴリ内にサブカテゴリを作成することも可能です。

BI プラットフォームには 2 つのタイプのカテゴリがあります。

- ・ 会社用カテゴリ: 管理者、またはこれらのカテゴリへのアクセス権が付与されている他のユーザによって作成されます。適切な権限がある場合、会社用カテゴリを作成できます。
- ・ 個人用カテゴリ: ユーザごとに独自の個人情報を整理するために作成できます。

5.2.1.1 新しいカテゴリを作成する

- 1 CMC の[カテゴリ]管理エリアを表示します。
- 2 [管理] > [新規] > [カテゴリ] の順にクリックします。
- 3 カテゴリの名前を入力します。
- 4 [OK]をクリックします。

新しいカテゴリがシステムに追加されました。

[管理] > [プロパティ] をクリックして、このカテゴリの設定を変更します。

5.2.1.2 カテゴリを削除する

カテゴリを削除すると、カテゴリ内のすべてのサブカテゴリも削除されます。フォルダの削除とは異なり、カテゴリ内に含まれているレポートおよびその他のオブジェクトはシステムから削除されません。

- 1 CMC の [カテゴリ] 管理エリアを表示します。
- 2 削除するカテゴリを選択します。

このカテゴリが最上位のカテゴリでない場合は、その親カテゴリを探して選択します。

ヒント

複数のカテゴリを選択するには、Ctrl キーまたは Shift キーを押したまま選択するカテゴリをクリックします。このようにすると、複数のカテゴリを同時に削除できます。

- 3 [管理] > [削除] をクリックします。
- 4 [OK] をクリックして、カテゴリの削除を確認します。

5.2.1.3 カテゴリを移動する

カテゴリを移動しても、そのカテゴリに割り当てられているすべてのオブジェクトはその関連付けを維持します。カテゴリのすべてのオブジェクトアクセス権が保持されます。

たとえば、“南アメリカ売上” カテゴリにはその地域の営業担当員しかアクセスできないとします。一方、すべての営業担当員が必要とする全世界の売上レポートを含む “全世界売上” カテゴリもあります。より直感的な構造を保つには、地域カテゴリを “全世界売上” カテゴリへ移動します。“南アメリカ売上” カテゴリを “全世界売上” カテゴリに移動するとき、それが “全世界売上” カテゴリのサブカテゴリになっても、アクセス権の設定と、それに関連するオブジェクトは保持されます。

- 1 CMC の[カテゴリ]管理エリアを表示します。
- 2 移動するカテゴリを選択します。

移動するカテゴリが最上位のカテゴリでない場合は、その親カテゴリを探します。次に、選択します。

ヒント

複数のカテゴリを選択するには、Ctrl キーまたは Shift キーを押したまま選択するカテゴリをクリックします。このようにすると、複数のカテゴリを同時に移動できます。

- 3 [整理] > [移動先] の順にクリックします。
- 4 移動先のカテゴリを選択します。

ヒント

システムに多数のカテゴリがある場合は、[タイトルの検索] フィールドを使用して検索するか、[戻る]、[次へ]、[+] をクリックしてカテゴリ階層内で目的のフォルダを探します。

- 5 [移動] をクリックします。

選択したカテゴリは新しい場所に移動されます。

5.2.1.4 オブジェクトをカテゴリに追加する

オブジェクトをカテゴリに追加するには、次の手順に従います。

- 1 CMC の[フォルダ]管理エリアを表示します。
- 2 カテゴリに追加するオブジェクトに移動して、それを選択します。

- 3 [管理] > [カテゴリ] をクリックします。
- 4 オブジェクトを追加するカテゴリを選択します。
- 5 [保存して閉じる] をクリックします。

5.2.1.5 カテゴリからオブジェクトを除去または削除する

カテゴリからオブジェクトを除去または削除できます。オブジェクトを除去する場合は、カテゴリからのみ除去されます。オブジェクトを削除する場合は、カテゴリから除去され、同時にシステムからも削除されます。

- 1 CMC の [カテゴリ] または [個人用カテゴリ] 管理エリアを表示します。
- 2 オブジェクトを除去または削除するカテゴリをダブルクリックします。
- 3 除去または削除するオブジェクト (複数可) を選択します。
- 4 カテゴリからオブジェクトを除去するか、オブジェクトを削除します。
 - ・ カテゴリのみからオブジェクトを削除するには、[アクション] > [カテゴリから削除] の順にクリックします。この操作で、BI プラットフォームからオブジェクトが削除されるわけではありません。
 - ・ オブジェクトをカテゴリから除去すると同時に BI プラットフォームから削除する場合は、[管理] > [削除] の順にクリックします。

5.2.1.6 カテゴリのアクセス権の指定

カテゴリのオブジェクトアクセス権を変更することができます。オブジェクトのようにカテゴリにアクセス権を割り当てることができますが (つまり、グループやユーザに対してカテゴリへのアクセス権を付与できますが)、カテゴリ内のオブジェクトはそのカテゴリのアクセス権を継承しません。カテゴリ内のオブジェクトは、オブジェクトが保存されているフォルダからアクセス権を継承します。

アクセス権の詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) で入手できる『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』の「アクセス権の設定」の章を参照してください。

5.2.1.7 個人用カテゴリを表示する

適切なアクセス権が付与されている場合は、ユーザの個人用カテゴリを表示、編集、および削除することができます。

- 1 CMC の [個人用カテゴリ] 管理エリアを表示します。
- 2 表示する個人用カテゴリのユーザアカウントをクリックします。
ユーザの個人用カテゴリのリストが表示されます。

5.2.1.8 カテゴリに複数のオブジェクトを追加する

単一カテゴリに複数のオブジェクトを追加するには、このタスクを実行します。

- 1 [カテゴリ] または [個人用カテゴリ] エリアで、カテゴリに移動します。
- 2 [アクション] > [カテゴリに追加] の順にクリックします。
[カテゴリに追加] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 [使用できるオブジェクト] エリアで、追加するオブジェクトを探し、[>] をクリックして、それらを [選択されたオブジェクト] 一覧に追加します。
- 4 作業が完了したら、[OK] をクリックします。

選択したオブジェクトがカテゴリに表示されます。

コンテンツオブジェクトの使用

6.1 一般的なオブジェクトの管理

BI プラットフォームには多くの種類のオブジェクトがあります。

- ・ SAP Crystal Reports
- ・ Web Intelligence ドキュメント
- ・ プログラム
- ・ Microsoft Excel/Word/PowerPoint ファイル
- ・ PDF
- ・ RTF ファイル
- ・ テキストファイル
- ・ ハイパーリンク
- ・ オブジェクトパッケージ
- ・ アクション

オブジェクトを追加すると、セントラル管理コンソール (CMC) の [フォルダ] 管理エリアで、これらを管理することができます。

6.1.1 オブジェクトをコピーする

- 1 [フォルダ] エリアで、コピーするオブジェクトを探して選択します。
- 2 [整理] > [コピー先] をクリックします。
[コピー] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 [コピー先の選択] エリアで、オブジェクトのコピー先のフォルダを探し、[>] をクリックして [出力先] 一覧に移動します。

注

コピー先フォルダを移動するには、そのフォルダを右側にある詳細ウィンドウで選択する必要があります。

ヒント

複数のフォルダを選択するには、Shift + クリックまたは Ctrl + クリックを使用します。

- 4 完了したら、[コピー] をクリックします。
選択したオブジェクトはコピー先にコピーされます。

6.1.2 オブジェクトを移動する

- 1 [フォルダ]エリアで、移動するオブジェクトを探して選択します。
- 2 [整理] > [移動先]をクリックします。
[移動]ダイアログボックスが表示されます。
- 3 コピー先フォルダを選択します。

注

コピー先フォルダを移動するには、そのフォルダを右側にある詳細ウィンドウで選択する必要があります。

ヒント

複数のフォルダを選択するには、Shift + クリックまたは Ctrl + クリックを使用します。

- 4 [移動]をクリックします。
元のフォルダから移動先のフォルダへオブジェクトが移動します。

6.1.3 オブジェクトショートカットを作成する

ショートカットは、あるユーザに、オブジェクトに対するアクセス権を付与し、そのオブジェクトが含まれるフォルダ全体に対するアクセス権は付与しない場合に役立ちます。ショートカットを作成すると、ショートカットが存在するフォルダにアクセスできるユーザは、そのオブジェクトとレポートインスタンスにアクセスできるようになります。

- 1 [フォルダ]エリアで、ショートカットを作成するオブジェクトを探して選択します。
- 2 [整理] > [ショートカットの作成]をクリックします。
[ショートカットの作成]ダイアログボックスが開きます。
- 3 [コピー先の選択]エリアで、ショートカットの作成先のフォルダを探し、[>]をクリックして[出力先]一覧に移動します。

注

コピー先フォルダを移動するには、そのフォルダを右側にある詳細ウィンドウで選択する必要があります。

- 4 [ショートカットの作成]をクリックします。
オブジェクトへのショートカットが、指定したフォルダに表示されます。

6.1.4 オブジェクトを削除する

この手順では、1 つのオブジェクトまたは複数のオブジェクトを削除する方法について説明します。また、フォルダを削除することもできます。フォルダを削除すると、そのフォルダに格納されているすべてのオブジェクトとインスタンスも削除されます。同様に、オブジェクト自体ではなく、オブジェクトのインスタンスを削除するオプションもあります。

注

オブジェクトを削除すると、既存のインスタンスとスケジュールされたインスタンスがすべて削除されます。

- 1 CMC の[フォルダ]管理エリアを表示します。
- 2 削除するオブジェクトを選択します。
- 3 [管理] > [削除]をクリックします。
- 4 確認のメッセージが表示されたら、[OK]をクリックします。

関連項目

- ・ 101 ページの [インスタンスの管理](#)

6.1.5 1 つまたは複数のオブジェクトを検索する

この検索機能を使用して、オブジェクトのタイトルや説明内の特定のテキストを検索することができます。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアを表示します。
[検索] フィールドは、[フォルダ] 管理エリアの右上隅にあります。検索の種類は、デフォルトで[タイトルの検索]に設定されています。
- 2 検索条件を指定します。
 - a ファイル名以外を指定して検索する場合は、[タイトルの検索]をクリックして、検索の種類を変更します。
次のオプションがあります。
 - ・ すべてのフィールドの検索
このオプションでは、オブジェクトに関連付けられたファイル名、キーワード、および説明が検索されます。
 - ・ タイトルの検索
これはデフォルトオプションで、ファイル名が検索されます。
 - ・ キーワードの検索
このオプションでは、オブジェクトに関連付けられたキーワードが検索されます。
 - ・ 説明の検索
このオプションでは、オブジェクトに関連付けられた説明が検索されます。
 - b [検索]フィールドに、検索するテキストを入力します。
- 3 [検索]をクリックします。

検索が完了すると、検索基準に一致した結果の一覧が表示されます。

6.1.6 新しいハイパーリンクを作成する

- 1 [フォルダ] または [個人用フォルダ] エリアで、新しいハイパーリンクを作成するフォルダに移動します。
- 2 [管理] > [新規] > [ハイパーリンク] の順にクリックします。
[ハイパーリンク] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 ハイパーリンクのタイトル、説明、およびキーワードを入力します。
- 4 ナビゲーションペインで [URL] をクリックします。
- 5 [URL] フィールドに URL を入力します。
- 6 [OK] をクリックします。

6.1.7 オブジェクトまたはインスタンスを出力先に送信する

[整理] > [送信] を使用すると、既存のオブジェクトまたはオブジェクトのインスタンスを別の出力先に送信できます。[送信] コマンドでは、既存のオブジェクトまたはインスタンスのみ処理できます。この機能では、システムでのオブジェクトの実行や新しいインスタンスの作成、レポートインスタンスのデータの最新表示は実行できません。

オブジェクトのコピーかインスタンスのどちらか、またはオブジェクトインスタンスのショートカットを送信できます。出力先 (FTP や BI 受信ボックスなど) も選択できます。すべてのタイプのオブジェクトがすべての出力先に送信できるわけではありません。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアを表示します。
- 2 送信するオブジェクトまたはインスタンスを選択します。
 - ・ オブジェクトを送信する場合は、オブジェクトを選択し、[整理] > [送信] をクリックして出力先を選択します。
 - ・ インスタンスを送信する場合は、オブジェクトを選択し、[アクション] > [履歴] をクリックします。[履歴] ダイアログボックスでインスタンスを選択し、[送信] をクリックして、出力先オプションをクリックします。

ステータスが “成功” または “失敗” のインスタンスのみを選択します。ステータスが “定期” または “待機” のインスタンスはスケジュールされており、まだデータが格納されていません。

| 出力先オプション | 説明 |
|------------|---|
| BI 受信ボックス | オブジェクトをユーザの BI 起動パッド受信ボックスに送信します。 |
| 電子メール | オブジェクトをユーザの電子メールアドレスに送信します。 |
| FTP の場所へ | オブジェクトを FTP サーバの場所に送信します。 |
| ファイルの場所 | オブジェクトをローカルディスクの場所へ送信します。 |
| StreamWork | オブジェクトを SAP StreamWork アクティビティに送信します。 注 管理者が StreamWork 統合設定アプリケーションを設定し、有効な場合は、StreamWork の機能は CMC で使用できます。 |

注

Web Intelligence ドキュメントは、BI 受信ボックスだけに、または BI プラットフォーム内で設定された電子メールの出力先に送信されます。

ヒント

複数のオブジェクトを選択するには、Shift + クリックまたは Ctrl + クリックを使用します。

3 出力先オプションを設定します。

Adaptive Job Server のデフォルト設定を使用するか、独自の設定を使用するか選択できます。独自の設定を使用する場合は、次を指定します。

- ・ オブジェクトを受信するユーザとグループ (BI 受信ボックスまたは電子メールの出力先に送信する場合)。他の受信者に表示したくない受信者には BCC で送信できます。
- ・ オブジェクトのコピーまたはそのオブジェクトにリンクするショートカットを送信するかどうか
- ・ 送信するオブジェクトの名前
- ・ オブジェクトを送信した後にインスタンスをクリーンアップするかどうか
- ・ 出力先の種類に固有の設定(ファイルの場所の場合はディレクトリ、FTP サーバの場合はホスト名と接続ポートなど)

注

StreamWork にオブジェクトを送信すると、Adaptive Job Server のデフォルト設定のみを使用できます。

4 完了したら、[送信] をクリックします。

関連項目

- ・ 35 ページの [オブジェクトタイプ別の利用可能な出力先](#)

6.1.7.1 オブジェクトタイプ別の利用可能な出力先

多くの出力先はほとんどのオブジェクトタイプで使用可能ですが、例外がいくつかあります。受信者がオブジェクトを開くには、システムへのアクセス権を持っていることが必要な場合があります。

注

出力先を使用するには、Adaptive Job Server で出力先を有効にし、設定を完了しておく必要があります。

| オブジェクトの種類 | アンマネージドディスク | FTP | 電子メール(SMTP) | | BI 受信ボックス | | SAP StreamWork |
|--|-------------|-----|-------------|-----|-----------|-----|----------------|
| | | | ファイル | リンク | ファイル | リンク | |
| Crystal レポート | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| オブジェクトパッケージ | - | - | - | - | ○ | ○ | ○ |
| プログラム | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| Web Intelligence ドキュメント | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| SAP BusinessObjects Analysis, edition for OLAP ワークスペース | - | - | - | ○ | ○ | ○ | - |
| Excel ファイル | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| Word ファイル | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| PDF ファイル | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| テキストファイル | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

| オブジェクトの種類 | アンマネージドディスク | FTP | 電子メール(SMTP) | | BI 受信ボックス | | SAP StreamWork |
|------------------|-------------|-----|-------------|-----|-----------|-----|----------------|
| | | | ファイル | リンク | ファイル | リンク | |
| RTF ファイル | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| Power-Point ファイル | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ハイパーリンク | - | - | - | ○ | ○ | ○ | - |

関連項目

- 88 ページの[「Job Server で出力先を有効/無効にする」](#)

6.1.8 オブジェクトのプロパティを変更する

- CMC の [フォルダ] 管理エリアで、オブジェクトを選択します。
- [管理] > [プロパティ] をクリックします。
[プロパティ] ダイアログボックスが表示されます。
- 変更を行います。
オブジェクト名、キーワード、および説明を変更できます。
- 作業が完了したら、[保存して閉じる] をクリックします。

6.1.9 関係

BI プラットフォームでは、オブジェクトはさまざまな方法で互いに関係しています。フォルダはその子フォルダと関係し、接続はそれを使用するユニバースと関係し、レポートやドキュメントはユニバースと関係します。

BI プラットフォームのオブジェクトに相互関係があるために、オブジェクトの変更が困難になることがあります。オブジェクトを変更するとそのオブジェクトへのリンクが切れるためです。関係クエリを実行すると、直接に関係しているオブジェクトを検出できます。

ある会社で、データベースを別の場所にある新しいデータベースと交換しているとします。管理者は、現在の接続に依存しているオブジェクトを検出して、それに応じて編集できるようにする必要があります。そして、どのオブジェクトのコンテンツも損なうことなくデータベース接続を削除できるようにします。管理者はある接続について関係クエリを実行し、その接続を使用するユニバースのリストを入手します。これで、すべてのユニバースを更新できます。

しかし、この会社では、その接続に依存するすべてのオブジェクトを削除することを決定しました。管理者は最初のクエリで入手したリストのすべてのユニバースについて、さらに関係クエリを実行します。そのユニバースを使用するすべてのオブジェクトが返されます。

関係クエリは、CMC の次の領域で実行できます。

- ・ フォルダ
- ・ 個人用フォルダ
- ・ カテゴリ
- ・ 個人用カテゴリ
- ・ ユーザとグループ
- ・ プロファイル
- ・ ユニバース
- ・ アクセスレベル
- ・ サーバ
- ・ レプリケーション一覧

関係クエリを実行すると、[クエリの結果]エリアにそのクエリの結果が表示されます。[クエリの結果]エリアから、その結果オブジェクトに対して基本的なオブジェクト管理タスクを実行できます。

6.1.9.1 オブジェクトの関係をチェックする

- 1 関係クエリを実行するオブジェクトに移動します。
- 2 [管理] > [ツール] > [関係のチェック]をクリックします。

[クエリの結果]エリアに、実行した関係クエリの結果が表示されます。

ヒント

必要な場合は、さらに結果オブジェクトの関係をチェックするために、オブジェクトを選択して[管理] > [ツール] > [関係のチェック]を選択します。

- 3 元のクエリに戻るには、ツリーパネルでそのオブジェクトの名前を選択します。

6.2 レポートオブジェクトの管理

レポートオブジェクトの管理には、処理拡張機能の適用、アラート通知の指定、データベース情報の変更、パラメータの更新、フィルタの使用、ハイパーリンクを使ったレポートの処理などが含まれます。この節では、レポー

トオブジェクトおよびレポートインスタンスについてと、それらをセントラル管理コンソール (CMC) で管理する方法について説明します。

注

この節の説明は、そのほとんどが Web Intelligence ドキュメントオブジェクトにも当てはまります。当てはまらない部分については、すべて明記されています。

6.2.1 レポートオブジェクトとレポートインスタンスの概要

SAP Crystal Reports を使用して作成されたオブジェクトをレポートオブジェクトと呼びます。Web Intelligence ドキュメントオブジェクトは BI プラットフォームを使用して作成されます。どちらのタイプのオブジェクトにも、レポート情報(データベースフィールドなど)が含まれます。どちらのタイプのオブジェクトも、保存されたデータを含んでいます。

レポートオブジェクトまたは Web Intelligence ドキュメントオブジェクトは、全ユーザまたは特定のユーザグループに属するユーザが使用できるように設定できます。

スケジュールされたインスタンス

オブジェクトをスケジュールすると、システムによってオブジェクトのスケジュールされたインスタンスが作成されます。スケジュールされたインスタンスには、オブジェクトとスケジュールの情報が含まれます。このインスタンスには、データはまだ含まれていません。スケジュールされたインスタンスは、個々のオブジェクトの[履歴]ページに表示されます。このインスタンスのステータスは、[定期]または[待機]になります。

CMC、BI 起動パッド、またはカスタム Web アプリケーションからオブジェクトをスケジュールすることができます。

レポートオブジェクトは通常、特徴の異なるインスタンスを複数作成できるように設計されています。たとえば、パラメータを持つレポートオブジェクトを実行する場合、1 つの部署に固有のレポートデータを含むインスタンスをスケジュールし、さらに別の部署に固有の情報を含む別のインスタンスをスケジュールすることができます。インスタンスは、どちらも同一のレポートオブジェクトから生成されます。

オブジェクトインスタンス

指定した時刻になると、オブジェクトが実行されて、オブジェクトインスタンスが作成されます。このインスタンスには、データベースから取得した実際のデータが含まれます。オブジェクトインスタンスはオブジェクトの[履歴]ページに表示され、ステータスは[成功]または[失敗]です。

オブジェクトのデフォルト設定の変更

オブジェクトに対して行ったすべての変更は、そのオブジェクトのデフォルト設定のみに反映されます。これらの変更が、スケジュールされている既存のインスタンスやオブジェクトインスタンスに反映されることはありません。次にこのオブジェクトをスケジュールするときに、CMC または BI 起動パッドなどのアプリケーションのどちらを使用する場合でも、新しいデフォルト設定が表示されます。スケジュールされたインスタンスの作成では、必要に応じてその設定を変更することができます。

注

BI プラットフォームでは、SAP Crystal Reports のバージョン 6 から 2011 で作成したレポートを使用できます。一度 BI プラットフォームに追加したレポートの保存、処理、表示は、バージョン 2011 形式で行われます。ただし、BI プラットフォームで作成したレポートは SAP Crystal Reports for Enterprise 形式のままです。

関連項目

- ・ 73 ページの[スケジュール](#)

6.2.2 レポートの最新表示オプションの設定

注

この機能は、SAP Crystal Reports のみに適用されます。

レポートの最新表示オプションを設定して、BI プラットフォームでレポートオブジェクトを最新表示するときに更新する設定項目を決めておくことができます。

レポートオブジェクトを最新表示する場合、BI プラットフォームでは、CMC に保存されたレポートオブジェクトと Input File Repository Server に保存されたオリジナルの .rpt ファイルが比較されます。BI プラットフォームは、レポートオブジェクト内のレポート要素を削除または追加して CMC 内の変更を上書きし、.rpt ファイルに一致させます。元のレポートとレポートオブジェクトの間でレポート要素が同じ場合は、レポートの最新表示の設定によって、元の .rpt ファイルの値で更新するレポートオブジェクトの設定項目を設定することができます。

たとえば、元の .rpt ファイルでのみプロンプトがある場合は、レポートを最新表示するとプロンプトがレポートオブジェクトに追加されます。これにより、どのような最新表示オプションを選択しても、正しいレポート要素が保持されます。

プロンプトが元の .rpt ファイルとレポートオブジェクトの両方にあり、[現在およびデフォルトのパラメータ値] オプションを選択している場合、BI プラットフォームはレポートオブジェクトのプロンプトのデフォルト値を更新します。BI プラットフォームのパラメータのデフォルト値を変更していた場合は、それらの変更内容は上書きされません。

レポートを最新表示したときに、レポート要素の値に加えた変更を保持するには、該当するレポートの最新表示オプションをオフに設定します。BI プラットフォームでは、[現在およびデフォルトのパラメータ値] をオフにすると、レポートを最新表示したときに、レポートオブジェクト内のプロンプトのデフォルト値または現在の値のいずれかが保存されます。[レポートの最新表示時にオブジェクトリポジトリを使用] オプションをオフにすると、レポートオブジェクト内のリポジトリオブジェクトが、リポジトリの内容で最新表示されることはありません。

6.2.2.1 レポートの最新表示オプションを設定する

- 1 CMC で、[フォルダ] 管理エリアに移動してレポートを選択します。
- 2 [アクション] > [最新表示オプション]をクリックします。
[最新表示オプション]ダイアログボックスが表示されます。
- 3 最新表示するレポート要素を元のレポートファイルから選択します。
- 4 [更新] をクリックします。

ヒント

または、[レポートを最新表示]をクリックすると、指定した内容に従ってレポートを即座に最新表示できます。

6.2.3 レポートの表示オプションの設定

注

この機能は Web Intelligence ドキュメントには適用されません。

BI プラットフォームに装備されているレポート表示オプションを使用して、データ取得回数最適化に伴い最新情報を求めるニーズと、システム全体のパフォーマンスを適正化するニーズとの間のバランスをとることができます。

BI プラットフォームでは、データ共有を可能にして、同じレポートオブジェクトにアクセスする複数のユーザが、レポートを表示したり、最新表示したりするときに同じデータを使用することを許可できます。データ共有を可能にすることで、データベースの呼び出しの数を減らすことができます。これにより、同じレポートにアクセスするユーザに対してレポートインスタンスを作成するのに必要な時間を削減し、ロード時のシステムパフォーマンス全体を大きく向上させます。

データ共有はレポート単位またはサーバ単位のいずれかで設定できます。

- ・ レポート表示に使用するサーバを指定する場合は、サーバ単位に設定して、レポートのグループに対してデータ共有の設定を標準化し、これらの設定を集中管理できます。
- ・ レポート単位の設定では、特定のレポートに対しデータを共有しないように指定することができます。また、レポートごとにデータ共有の間隔を調整し、そうしたレポートを必要としているユーザのニーズに応えることもできます。さらに、レポート単位の設定では、ユーザがレポートを最新表示したときにデータベースにアクセスさせることが適切かどうかをレポートごとに設定することができます。

データの共有は、すべての組織またはレポートにとって、必ずしも理想的であるとは限りません。データ共有の効果をフルに活用するには、ある程度の期間データを再利用させることが必要です。つまり、ユーザによっては、オンデマンドでレポートを表示したり、表示しているレポートインスタンスを最新表示するときに、古いデータを表示させることになります。

BI プラットフォームのデフォルトのレポート表示オプションでも、データの最新性と信頼性は確保できます。デフォルトでは、レポートを BI プラットフォームに追加すると、レポート共有をサーバ単位に設定できるようになります。デフォルトのサーバ設定では、ユーザはレポートを最新表示すると最新情報を受け取ることができ、すべてのユーザに提供する最も古い処理データは、0 分前のものになります。レポート単位の設定を選択した場合、デフォルトの設定で、データの共有やビューアを最新表示してデータベースから最新データを取得することができ、クライアントに提供する最も古い処理データは 5 分前のものになります。

ヒント

クライアント間でのレポートデータの共有を無効にすることと、[クライアントに提供する最も古いオンデマンドの処理データ]を 0 分に設定することとは同じではありません。負荷が高い場合、システムは同じレポートインスタンスに対して同時に複数の要求を受けることがあります。このような場合、データ共有の間隔を 0 に設定して、[クライアント間でレポートデータを共有する] オプションを有効にすると、BI プラットフォームはユーザのリクエスト間でデータを共有します。複数のユーザにデータを共有させないことが重要な場合は（たとえば、レポートがユーザごとにパーソナライズされたユーザ関数ライブラリ (UFL) を使用している場合）、そのレポートのデータ共有を無効にします。

6.2.3.1 レポートの表示オプションを設定する

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、レポートを選択します。
- 2 [管理] > [デフォルト設定] をクリックします。
[デフォルト設定] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 ナビゲーション一覧で [サーバグループの表示] をクリックします。
- 4 [表示データの最新表示] エリアで、[レポート独自の表示設定を使用する] をクリックします。次に、このレポートに設定するオプションを選択します。
- 5 [保存して閉じる] をクリックします。

6.2.4 デフォルトサーバの指定

オブジェクトの実行や、インスタンスのスケジュール設定と処理のために BI プラットフォームが使用するデフォルトのサーバを指定することができます。レポートオブジェクトと Web Intelligence ドキュメントでは、ユーザがレポートや Web Intelligence ドキュメントを表示または変更する際に BI プラットフォームが使用するデフォルトのサーバを指定できます。

サーバを指定する際には、次の 3 つのオプションが使用できます。

- ・ 最初に見つかった利用可能なサーバを使用する

BI プラットフォームは、その時点で利用可能なリソースが最も多いサーバを使用します。

- ・ 選択したグループに所属するサーバを優先して使用する(そのグループのサーバが利用可能でない場合は、他の利用可能なサーバを使用します)。

リストからサーバグループを選択します。このオプションでは、サーバグループ内にあるサーバでオブジェクトを処理するよう試みます。指定したサーバが使用できない場合、オブジェクトは次の利用可能なサーバで処理されます。

- ・ 選択したグループに所属するサーバだけを使用する

このオプションを使用すると、BI プラットフォームは選択したサーバグループ内の指定したサーバのみを使用します。サーバグループのすべてのサーバが使用できない場合、オブジェクトは処理されません。

オブジェクトのタイプに応じて、BI プラットフォームは次のサーバを使用し、オブジェクトを表示する際にオブジェクトを処理します。

- ・ SAP Crystal Reports は、Adaptive Job Server、Crystal Reports 2011 または Crystal Reports Processing Server (レポートが生成されるデザイナーによる)、および Crystal Reports Cache Server で実行されます。
- ・ Web Intelligence ドキュメントは、Web Intelligence Processing Server で実行されます。

特定のサーバまたはサーバグループを選択することにより、特定のオブジェクトを特定の Job Server で処理できるようになり、システムの負荷を分散させることができます。ただし、サーバグループを選択する前に、システム管理者が CMC の [サーバ] 管理エリアで最初にサーバグループを作成する必要があります。

注

- ・ [最初に見つかった利用可能なサーバを使用する] オプションを選択した場合、Central Management Server (CMS) は Job Server を確認して、最も負荷の少ないサーバを見つけます。この処理では、CMS は各 Job Server の最大負荷の割合をチェックします。すべての Job Server が同じ負荷の割合を示した場合、CMS はランダムに Job Server を選択します。
- ・ サーバが受け付けるジョブの最大数を設定することもできます。詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』を参照してください。

6.2.4.1 オブジェクトの処理にデフォルトのサーバを指定する

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、オブジェクトを選択します。
- 2 [管理] > [デフォルト設定] をクリックします。
- 3 [デフォルト設定] ダイアログボックスで、次のいずれかの操作を実行します。
 - ・ レポートオブジェクトをスケジュールする時に使用するデフォルトサーバを指定する場合、[管理] > [デフォルト設定] > [サーバグループのスケジュール] を使用します。
 - ・ オブジェクト表示時にオブジェクトを処理するデフォルトサーバを指定するには、オブジェクトが Crystal レポートの場合は [サーバグループの表示] を選択し、オブジェクトが Web Intelligence ドキュメントの場合は [Web Intelligence 処理設定] を選択します。
- 4 [保存して閉じる] をクリックします。

関連項目

- ・ 42 ページの [デフォルトサーバの指定](#)

6.2.5 データベースの設定を変更する

注

- ・ この機能は Web Intelligence ドキュメントには適用されません。
- ・ データベース設定を変更するレポートオブジェクトを複数選択した場合、同じデータソースに接続しているレポートオブジェクトのみが更新されます。

[管理] > [デフォルト設定] を使用して、データベースの種類とデフォルトのデータベースログオン情報を選択できます。[デフォルト設定] ダイアログボックスでは、レポートオブジェクトとそのインスタンス用のデータソースを表示できます。ユーザがレポートインスタンスを表示するときにログオン名とパスワードの入力を求めるプロンプトを表示するように設定することもできます。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、レポートオブジェクトを選択します。

- 2 [管理] > [デフォルト設定]をクリックします。

[デフォルト設定]ダイアログボックスが表示されます。

- 3 ナビゲーション一覧で[データベース設定]をクリックします。
- 4 [レポートのオリジナルのデータベースログオン情報を使用する]または[ここで指定するカスタムのデータベースログオン情報を使用する]を選択します。

前者のオプションを選択すると、元のレポートデータベースで使用するユーザ名とパスワードを指定できます。

後者のオプションを選択すると、サーバ名(または ODBC データソースの場合の DSN)、データベース名、ユーザ名、定義済みの多数のデータベースドライバか指定したカスタムデータベースドライバのパスワードを指定できます。データベースのデフォルトのテーブルプレフィックスを変更した場合は、カスタムテーブルプレフィックスをここで指定します。

サポートされるデータベースとドライバの詳細については、SAP Service Marketplace でサポートされているプラットフォームドキュメントを参照してください。

- 5 必要なデータベースログオンオプションを選択します。

- ・ ユーザにデータベースログオン入力を要求する

レポートを最新表示する際に、ユーザはパスワードの入力を求められます。

注

このオプションはスケジュールされたインスタンスには影響を与えません。また、BI プラットフォームは、ユーザがレポートを最初に最新表示したときのみ、ユーザに対して指示メッセージを表示します。もう一度レポートを最新表示した場合、メッセージは表示されません。

- ・ SSO コンテキストをデータベースログオンに使用する

システムはデータベースへのログオンに、ユーザのセキュリティコンテキスト、つまりユーザのログオン情報とパスワードを使用します。

注

このオプションを使用するには、エンドツーエンドシングルサインオンまたはデータベースへのシングルサインオンを設定する必要があります。詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Web アプリケーションデプロイメントガイド』を参照してください。

- ・ レポート実行時と同じデータベースログオン情報を使用する

レポートが過去に Job Server で実行されたときに使用されたデータベースログオン情報が使用されます。

- ・ ユーザのデータベース認証をデータベースログオンに使用する

ユーザアカウントに指定されたデータベース認証情報が使用されます。

- 6 [保存して閉じる]をクリックします。

6.2.6 Crystal レポートのデフォルトプロンプト値を変更する

注

この機能は Web Intelligence ドキュメントには適用されません。

あらかじめ設定された値を含む [パラメータ] フィールドを使用すると、ユーザは、必要なデータを表示したり、参照するデータを指定したりできます。レポートにパラメータがある場合、各フィールドにデフォルトの値を設定できます (この値はレポートインスタンスが生成されるときに常に使用されます)。BI 起動パッドなどの BI プラットフォームアプリケーションでは、ユーザはあらかじめ設定されたデフォルト値を使用するか、または別の値を選択して、レポートを使用できます。デフォルト値を指定しなかった場合、ユーザはレポートをスケジュールする際に値の入力を求められます。

- 1 CMCの[フォルダ]管理エリアで、レポートオブジェクトを選択します。
- 2 [管理] > [デフォルト設定]をクリックします。
[デフォルト設定]ダイアログボックスが表示されます。
- 3 ナビゲーション一覧で[プロンプト]をクリックします。

注

[プロンプト] は、レポートオブジェクトにパラメータがある場合のみ使用できます。

- 4 [デフォルト値] 列で、変更するパラメータに関連付けられている値を選択します。
デフォルト値を変更できるオプションが表示されます。パラメータ値のタイプに応じてフィールドに値を入力するか、リストから値を選択します。
- 5 指定のパラメータ用に設定されている現在の値をクリアする場合は、[値のクリア]ボタンをクリックします。
- 6 ユーザが BI 起動パッドなどの BI プラットフォームアプリケーションでレポートインスタンスを表示するときに、ユーザに対して指示メッセージを表示する場合は、[表示時にプロンプトを表示] チェックボックスをオンにします。
- 7 [保存して閉じる] をクリックします。

6.2.7 Web Intelligence ドキュメントのプロンプトを更新する

注

この機能は Crystal レポートには適用されませんこれについては、45 ページの「[Crystal レポートのデフォルトプロンプト値を変更する](#)」を参照してください。

あらかじめ設定された値を含む[プロンプト]フィールドを使用して、ユーザは必要なデータを表示したり、参照するデータを指定したりできます。レポートにパラメータが含まれる場合には、各フィールドにデフォルトのプロンプト値を設定できます (この値はレポートインスタンスの生成時に常に使用されます)。BI 起動パッドなどの BI プラットフォームアプリケーションでは、ユーザはあらかじめ設定されたデフォルト値を使用するか、または別の値を選択して、レポートを使用できます。デフォルト値を指定しなかった場合、ユーザはレポートをスケジュールする際に値を選択する必要があります。

- 1 CMC の[フォルダ]管理エリアで、Web Intelligence ドキュメントを選択します。
- 2 [管理] > [デフォルト設定]をクリックします。
[デフォルト設定]ダイアログボックスが表示されます。
- 3 ナビゲーション一覧で[プロンプト]をクリックします。

注

[プロンプト]は、Web Intelligence ドキュメントオブジェクトにプロンプトが含まれる場合にのみ使用できます。

- 4 [変更]をクリックします。
オプションが表示され、その中のプロンプトと値を選択できます。
- 5 プロンプトを選択して、その値を入力します。

ヒント

使用可能な値が表示されていない場合は[値の最新表示]ボタンをクリックします。

- 6 値を変更するすべてのプロンプトについて、手順 5 と 6 を繰り返します。
- 7 [適用]をクリックします。
- 8 [保存して閉じる]をクリックします。

6.2.8 フィルタを使用する

注

この機能は、Web Intelligence ドキュメント、RPTR 形式の SAP Crystal レポート、または SAP Crystal Reports で作成したレポートには適用されません。

[管理] > [デフォルト設定]を使用して、レポートのデフォルトの選択式を設定できます。選択式は、必要な情報のみが表示されるよう結果を絞り込むという点で、[パラメータ]フィールドに似ています。ただしパラメータとは異なり、エンドユーザがレポートを表示または最新表示したときには、選択式の値の入力は求められません。ユーザが BI 起動パッドなどの Web ベースのクライアントでレポートをスケジュールするときに、レポートに適用する選択式を修正することができます。CMC に式が設定されている場合、Web ベースのクライアントではデフォルトでその式を使用します。選択式の詳細については、『SAP Crystal Reports ユーザガイド』を参照してください。

ユーザが独自の処理拡張機能を作成している場合は、選択式の変更に加えて、レポートに適用する処理拡張機能を選択できます。

処理拡張機能と共にフィルタを使用する場合は、処理拡張機能で処理されたデータのサブセットが返されます。選択式と処理拡張機能は、レポートに適用するフィルタとして機能します。

- 1 CMC の[フォルダ]管理エリアで、レポートオブジェクトを選択します。
- 2 [管理] > [デフォルト設定]をクリックします。
[デフォルト設定]ダイアログボックスが表示されます。
- 3 [フィルタ]をクリックします。
- 4 選択式を更新するか、新しい選択式を追加します。
 - ・ レコードの選択

[レコードの選択]フィールドは、レポートのスケジュールで使用するレコードを絞り込む、レコード選択式の作成や編集に使用します。

- ・ グループの選択

[グループの選択]フィールドは、レポートのスケジュールで使用するグループを絞り込む、グループ選択式の作成や編集に使用します。

- 5 [保存して閉じる]をクリックします。

関連項目

- ・ 133 ページの[プロファイルの仕組み](#)
- ・ 50 ページの[処理拡張機能のレポートへの適用](#)

6.2.9 プリンタとページレイアウトオプションの設定

注

この機能は Web Intelligence ドキュメントには適用されません。

レポートインスタンスは、そのスケジュール時に印刷することもできます。レポートインスタンスは常に、Crystal レポート形式で印刷されます。レポートを印刷するときは、部数とページ範囲を設定できます。

レポートインスタンスを印刷するかどうかを指定することができ、印刷する場合は、使用するプリンタ、部数、およびページ範囲を指定できます。レポートインスタンスを印刷するかどうかに関係なく、ページのサイズと方向を変更するカスタムのレイアウト設定も指定できます。

プリンタの指定

レポートは、実行のたびに Crystal Reports Job Server のデフォルトプリンタまたは別のプリンタで印刷するように選択することができます。BI プラットフォームは、レポートを処理した後に印刷を実行します。

注

Crystal Reports Job Server は、指定したプリンタにアクセスする権限を持つアカウントによって実行される必要があります。詳細については、サーバの管理および設定に関する章を参照してください。

ページレイアウトの指定

レポートインスタンスをいかなる形式で表示、またはスケジュールする場合でも、ページの向き、ページサイズなど、ページレイアウト条件を最初に指定することができます。選択する設定は、レポートインスタンスの表示スタイルに反映されます。

注

ページレイアウトの設定は、プリンタにレポートをスケジュールするときだけでなく、レポート全体の表示スタイルにも反映されます。レポート全体の表示スタイルは、レポートを表示するデバイスのプロパティ(フォントメトリクス、ディスプレイやプリンタのその他レイアウト設定)によって決まります。

6.2.9.1 プリンタを割り当てる

- 1 CMCの [フォルダ] 管理エリアで、レポートオブジェクトを選択します。
- 2 [管理] > [デフォルト設定]をクリックします。
[デフォルト設定]ダイアログボックスが表示されます。
- 3 ナビゲーション一覧で[出力設定]をクリックします。
- 4 [スケジュール時に Crystal レポートを印刷する]を選択します。

レポートは、SAP Crystal Reports の書式で自動的にプリンタに送信されます。この書式が、レポートをスケジュールする際に選択した書式と競合することはありません。

- 5 Job Server のデフォルトプリンタで印刷する場合は、[デフォルトプリンタ]を選択したままにしておきます。それ以外は、[プリンタを指定する]を選択します。
- 6 [プリンタの指定] を選択した場合、プリンタのパスと名前を入力します。

Job Server が Windows で実行されている場合には、[プリンタの指定] フィールドに次のように入力します。

```
¥¥printserver¥¥printername
```

printserver はプリンタサーバの名前で、printername はプリンタの名前です。

Job Server が UNIX で実行されている場合には、[プリンタの指定] フィールドに、通常使用している印刷コマンドを入力します。たとえば、次のように入力します。

```
lp -d printername
```

注

(UNIX で)使用しているプリンタが非表示ではなく表示になっていることを確認してください。

- 7 その他の印刷オプションを設定します。
 - ・ 部数
 - ・ ページ範囲
 - ・ 部単位で印刷オプション
 - ・ ページの拡大縮小
 - ・ ページの中央揃え
 - ・ 横方向のページを 1 ページに合わせる
- 8 [保存して閉じる]をクリックします。

6.2.9.2 レポートの印刷レイアウトオプションを設定する

- 1 CMCの [フォルダ] 管理エリアで、レポートオブジェクトを選択します。
- 2 [管理] > [デフォルト設定]をクリックします。

[デフォルト設定]ダイアログボックスが表示されます。

3 ナビゲーション一覧で[出力設定]をクリックします。

4 デフォルトの印刷モードを選択します。

- ・ 常に PDF に印刷する

このオプションでは、Web ビューアからレポートを印刷するときに PDF 印刷モード設定を使用します。

- ・ Crystal Reports の基本設定に従う

このオプションでは、CMC のユーザ基本設定で定義した Crystal Reports に対する設定が使用されます。

5 [レイアウトの設定] 一覧で、必要なレイアウトの設定を変更します。

オプションは次のとおりです。

- ・ レポートファイルのデフォルト

SAP Crystal Reports のレポートに対して選択した設定にページレイアウトを合わせる場合は、このオプションを選択します。

- ・ 指定のプリンタ設定

指定プリンタの設定にページレイアウトを合わせる場合は、このオプションを選択します。Job Server のデフォルトプリンタやその他のプリンタも選択できます。

このオプションを選択すると、スケジュールしたレポートインスタンスは、[スケジュール時の印刷]エリアで指定したプリンタ以外では印刷できません。つまり、あるプリンタの設定で表示したレポートを別のプリンタで印刷するように設定することはできません。

- ・ カスタム設定

ページレイアウト設定をすべてカスタマイズする場合は、このオプションを選択します。ページの方向とページサイズを選択できるようになります。

6 [保存して閉じる]をクリックします。

関連項目

- ・ 47 ページの[プリンタとページレイアウトオプションの設定](#)

6.2.10 処理拡張機能

BI プラットフォームでは、カスタマイズした処理拡張機能を使用して、レポート環境のセキュリティをさらに強化できます。処理拡張機能は、動的にロードされるコードのライブラリであり、特定の BI プラットフォームの表示またはスケジュールリクエストに対して、システムで処理される前にビジネスロジックを適用します。

注

Windows システムでは、動的にロードされるライブラリをダイナミックリンクライブラリ (ファイル拡張子は .dll) と呼びます。Unix システムでは通常、動的にロードされるライブラリを共有ライブラリ (ファイル拡張子は .so) と呼びます。処理拡張機能に名前を付けるときは、ファイル拡張子も含む必要があります。

処理拡張機能のサポートにより、BI プラットフォーム管理 SDK では、リクエストに対する開発者の介入を可能にするハンドルが事実上公開されています。これにより、開発者は、レポートの処理前に実行される選択式をリクエストに追加できます。

代表的な例として、行レベルセキュリティを適用するレポート処理拡張機能があります。この種類のセキュリティは、1 つまたは複数のデータベーステーブル内の行ごとのデータアクセスを制限します。開発者は、レポートの表示リクエストまたはスケジュールリクエストを (Adaptive Job Server、Crystal Reports Processing Server または Report Application Server によって処理される前に) 受信する、動的にロードされるライブラリを作成します。開発者のコードで処理ジョブを所有しているユーザがまず特定され、サードパーティシステムでユーザのデータアクセス権が検索されます。次に、データベースから返されるデータを制限するために、レコード選択式が生成されて、レポートに追加されます。この処理拡張機能は、カスタマイズした行レベルのセキュリティを BI プラットフォーム環境に組み込む手段として動作します。

ヒント

BI プラットフォームでは、ビジネスビューを使用する際に、行レベルセキュリティを設定し強化することもできます。詳細については、『ビジネスビュー管理者ガイド』を参照してください。

CMC を使用して、BI プラットフォームに処理拡張機能を登録したり、処理拡張機能を特定のオブジェクトに適用することができます。

処理拡張機能を有効にすると、適切な BI プラットフォームサーバコンポーネントが実行時に動的に処理拡張機能をロードするよう設定できます。SDK には、開発者が処理拡張機能の作成に使用できる API が用意されています。この API の完全な情報は文書化されています。詳細については、製品メディアに収録されている開発者ドキュメントを参照してください。

現在のリリースでは、Crystal レポート (.rpt) オブジェクトだけに処理拡張機能を適用できます。

関連項目

- 50 ページの [処理拡張機能のレポートへの適用](#)

6.2.10.1 処理拡張機能のレポートへの適用

注

この機能は、Web Intelligence ドキュメント、または SAP Crystal Reports で作成したレポートには適用されません。

BI プラットフォームでは、カスタマイズされた処理拡張機能を使用できます。処理拡張機能は、動的にロードされるコードのライブラリであり、特定の BI プラットフォームの表示またはスケジュールリクエストに対して、システムで処理される前にビジネスロジックを適用します。この節では、BI プラットフォームに処理拡張機能を登録し、利用可能な処理拡張機能をレポートオブジェクトに適用する方法について説明します。

注

Windows システムでは、動的にロードされるライブラリをダイナミックリンクライブラリ (ファイル拡張子は .dll) と呼びます。Unix システムでは通常、動的にロードされるライブラリを共有ライブラリ (ファイル拡張子は .so) と呼びます。処理拡張機能に名前を付けるときは、ファイル拡張子も含める必要があります。ファイル名にスラッシュ文字 (/) またはバックスラッシュ文字 (\) を含めることはできません。

6.2.10.1.1 レポートの処理拡張機能を選択する

処理拡張機能を選択するには、CMC に処理拡張機能を登録する必要があります。

注

この機能は、Web Intelligence ドキュメント、または SAP Crystal Reports で作成したレポートには適用されません。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアを表示します。
- 2 処理拡張機能を適用するレポートオブジェクトを選択します。
- 3 [管理]メニューの[デフォルト設定]をクリックします。
[デフォルト設定]ダイアログボックスが表示されます。
- 4 ナビゲーション一覧で[拡張機能]をクリックします。
- 5 [利用可能な処理拡張機能] リストから処理拡張機能を選択し、[>] をクリックして、[これらの処理拡張機能を使用する (表示順)] リストに移します。

注

システムに登録されていない処理拡張機能は、このリストに表示されません。

ヒント

レポートオブジェクトには、複数の処理拡張機能を適用することができます。各処理拡張機能についてこの手順を繰り返し、[上へ移動]ボタンと[下へ移動]ボタンを使用して、処理拡張機能が使用される順番を指定します。

- 6 [保存して閉じる]をクリックします。
このレポートオブジェクトに対して処理拡張機能が有効になります。

6.2.11 ハイパーリンクを使用したレポートでの作業

注

この機能は、Web Intelligence ドキュメント、または SAP Crystal Reports for Enterprise で作成したレポートには適用されません。

SAP Crystal Reports では、ハイパーリンクを使用してレポートオブジェクト間を移動することができます。そのレポート内のレポートパーツや別のレポートオブジェクトやその中のレポートパーツ、レポートやレポートパーツの特定のインスタンスなどに移動することができます。このナビゲーションは、BI プラットフォーム以上で搭載されているスクリプトベースの DHTML ビューア (ゼロクライアントのサーバサイドビューア) でのみ使用できます。あるオブジェクトから別のオブジェクトへ直接リンクすることによって、必要なデータコンテキストが自動的に渡され、適切なオブジェクトとデータに移動できます。

SAP Crystal Reports 内のレポート間でハイパーリンクを追加する際には、1 つのファイルから別のファイルへの直接のリンクを作成します。リンクが設定されたレポートファイルを同時に同じオブジェクトパッケージに公開すると、管理レポートオブジェクトを指すようにリンクが変更されます。各リンクは、ファイルパスによってではなく、Enterprise ID によって適切なレポートを指すように変更されます。また、変更されたリンクは、オブジェクトパッケージ内で相対的になります。オブジェクトパッケージをスケジュールし、BI プラットフォームがそのレポートを処理して、各レポートインスタンス内のハイパーリンクを再度変更します。この場合、オブジェクトパッケージ内のレポートオブジェクト間のハイパーリンクは、オブジェクトパッケージの特定インスタンス内のレポートインスタンス間のハイパーリンクに変換されます。

ハイパーリンクを使用したレポートを表示するには、リンク元レポートとリンク先レポートの両方を BI プラットフォームに追加する必要があります。リンク元レポートとは、別のレポート、つまりリンク先レポートへのハイパーリンクのあるレポートのことです。

注

レポートオブジェクト間でハイパーリンクを作成する方法については、『SAP Crystal Reports オンラインヘルプ』を参照してください。

関連項目

- 100 ページの[オブジェクトパッケージによるオブジェクトのスケジュール](#)

6.2.11.1 既存のハイパーリンクを使用したレポートの追加

ハイパーリンクを使用したレポートの作成には、まず、個々のレポートを公開し、次に、それらのレポート間でハイパーリンクを作成する方法が推奨されます。ただし、これは常に可能とは限りません。

ハイパーリンクを使用したレポートをリポジトリに追加するには、SAP Crystal Reports 2011 designer に付属したレポートアップロードウィザードを使用して、リンクしたレポートを同じオブジェクトパッケージに追加する必要があります。このような方法でレポートを公開すると、ハイパーリンクは相対リンクに変換されます。

注

- この機能は Web Intelligence ドキュメントには適用されません。
- ハイパーリンクを使用したレポートを、同時に同じオブジェクトパッケージに公開するのではなく、互いに独立して公開すると、レポート間のハイパーリンクはすべて切断されます。SAP Crystal Reports を使用してリンクを再設定し、レポートを BI プラットフォームに保存し直す必要があります。詳細については、『SAP Crystal Reports オンラインヘルプ』を参照してください。

関連項目

- 53 ページの[リポジトリにレポートを追加してから、それらのハイパーリンクを作成する](#)

6.2.11.2 ハイパーリンクを使用したレポートの表示

注

この機能は、Web Intelligence ドキュメント、または SAP Crystal Reports for Enterprise で作成したレポートには適用されません。

SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォームでハイパーリンクを使用したレポート間のナビゲーションが行えるのは、BI 起動パッド内の DHTML やアドバンスド DHTML など、スクリプトベースのビューアを使用した場合だけです。CMC で好みの表示形式を変更するには、CMC の右上隅にある [基本設定] リンクをクリックして、適切な表示形式を選択します。好みの表示形式を変更する方法については、『BI 起動パッド ユーザガイド』を参照してください。

パラメータ情報は、リンク元レポートとリンク先レポートとの間で引き継がれません。そのため、リンク元レポート内のハイパーリンクをクリックしてリンク先レポートを表示すると、リンク先レポートに必要なパラメータを入力するように求められます。

セキュリティ上の考慮事項

ハイパーリンクを使用したレポートを BI プラットフォームで表示するには、プラットフォームとデータベースレベルの両方で適切なアクセス権が必要です。

BI プラットフォームで、リンク元レポートのハイパーリンクをとおしてリンク先レポートを表示するには、リンク先レポートに対する表示アクセス権が必要です。ハイパーリンクがレポートオブジェクトを指す場合は、データソースに対しデータを最新表示できるように [オンデマンド表示] アクセス権が必要です。

データベースのログオン情報は、ハイパーリンクを使用したレポート間で引き継がれます。リンク元レポートの表示に指定した認証情報がリンク先レポートで有効でない場合は、リンク先レポートのデータベースログオンに有効な一連の認証情報を入力するように求められます。

6.2.11.3 リポジトリにレポートを追加してから、それらのハイパーリンクを作成する

注

この機能は、Web Intelligence ドキュメント、または SAP Crystal Reports for Enterprise で作成したレポートには適用されません。

ハイパーリンクがレポート間で切断されるのを防ぐためには、最初にレポートを追加してから、ハイパーリンクを作成するのが最も適切な方法です。

- 1 SAP Crystal Reports でハイパーリンクを使用せずにレポートを作成します。
 - 2 それらを BI プラットフォームに追加します。
 - 3 SAP Crystal Reports を使用して BI プラットフォームにログオンします。
 - 4 リンク元レポートとリンク先レポートとの間にハイパーリンクを作成します。
- 詳細については、『Crystal Reports オンラインヘルプ』を参照してください。

SAP Crystal Reports では、レポート間に確立するリンクのタイプが相対リンクか絶対リンクのどちらであるか自動的に判断されます。BI プラットフォームでは、相対リンクは同じオブジェクトパッケージ内のレポート間のリンクで、絶対リンクは特定のレポートオブジェクトまたはインスタンスとのリンクです。

6.2.12 Crystal レポートのサムネイル画像を表示する

このタスクは、レポートの最初のページのサムネイル画像を表示する場合に実行します。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、レポートへ移動して選択します。
- 2 [管理] > [デフォルト設定] をクリックします。
- 3 ナビゲーション一覧で [サムネイル] をクリックします。
- 4 [レポートのサムネイルを表示] チェックボックスをオンにします。
- 5 [保存して閉じる] をクリックします。

6.2.13 Crystal レポートにアラートを表示する

BI プラットフォームでは、アラートのトリガとなるレポートインスタンスに関する情報を記録します。

このタスクは、SAP Crystal Reports で作成されたレポートのみに適用されます。

- 1 表示する Crystal レポートが含まれるフォルダまたはカテゴリを検索します。
- 2 オブジェクトを選択し、[その他のアクション] > [アラート] をクリックします。
[アラート] ダイアログボックスには、アラートを生成したインスタンスが表示されます。
- 3 タイトルをダブルクリックしてレポートインスタンスを開きます。

6.2.14 Web Intelligence ドキュメントのユニバースを表示する

ユニバース内のオブジェクトを使用して、Web Intelligence ドキュメントへのクエリを作成します。ユニバースは、データベースで利用できる情報を表します。CMC では、Web Intelligence ドキュメントが使用するユニバースを表示できます。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、Web Intelligence ドキュメントオブジェクトを選択します。
- 2 [管理] > [デフォルト設定] をクリックします。
[デフォルト設定] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 ナビゲーション一覧の [レポートユニバース] をクリックします。

ドキュメントで使用されているユニバースの一覧が表示されます。

6.3 統合環境でのレポートの操作

ここでは、SAP NetWeaver Business Warehouse (SAP NetWeaver BW) および BI プラットフォームでのレポートの操作に関する情報を提供します。

注

この節の情報は、SAP Crystal Reports for Enterprise で作成されたレポートには適用されません。

6.3.1 NetWeaver BW から BusinessObjects Enterprise へのレポートの追加

BI プラットフォームにレポートを追加するには、標準的な 2 つの方法があります。

- ・ SAP NetWeaver BW クエリを使って作成したレポートを、レポート作成直後に BI プラットフォームに追加する。
- ・ SAP NetWeaver BW から BI プラットフォームにレポートをまとめて追加する。

SAP Crystal Reports が自分のマシンにインストールされている場合、SAP NetWeaver BW クエリに基づく独自のレポートを作成することができます。そして、レポートを SAP NetWeaver BW に保存すると同時に、SAP Crystal Reports から BI プラットフォームに追加することができます。この機能を有効にするには、SAP Crystal Reports で [SAP] > [設定] をクリックし、[SAP BusinessObjects Enterprise に自動的に公開する] を選択します。

注

コンテンツ管理ワークベンチを使って多数の Crystal レポートを追加できます。詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』を参照してください。

6.3.1.1 BI プラットフォームへのレポートの追加

BI プラットフォームに Crystal レポートを追加するには、2 つの方法があります。

- ・ BI プラットフォームにまとめて追加する。この方法は、すでに多数のレポートを SAP NetWeaver BW に追加している場合に使用します。
- ・ SAP Crystal Reports 2011 に付属しているレポートアップロードウィザード、または BI プラットフォーム内のセントラル管理コンソールを使用する。

関連項目

- ・ 56 ページの [NetWeaver BW からレポートをまとめて追加](#)

6.3.1.2 NetWeaver BW からレポートをまとめて追加

コンテンツ管理ワークベンチを使って多数の Crystal レポートを追加できます。詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』を参照してください。

6.3.2 SAP NetWeaver BW の本稼働システムへの開発コンテンツの移行

BI プラットフォームが開発 SAP NetWeaver BW 環境にデプロイされている場合は、本稼働 SAP NetWeaver BW 環境での使用向けに設定されている BI プラットフォームにレポートコンテンツをインポートできます。

次は、コンテンツをインポートする際の留意点です。

- ・ SAP NetWeaver BW は Crystal レポート (.rpt ファイル) をネイティブオブジェクトとして扱います。Crystal レポートが SAP NetWeaver BW 開発システムのリポジトリに格納されている場合、その SAP NetWeaver BW コンテンツを転送して、BI プラットフォームにレポートをまとめて追加できます。(SAP NetWeaver BW システム間でのコンテンツの転送についての詳細は、SAP ライブラリを参照してください)。この手順では、SAP NetWeaver BW レポートパブリッシャによって、各レポートのデータベース情報が確実に更新されます。
- ・ SAP NetWeaver BW 開発システムのリポジトリから一部または全部の Crystal レポートを削除している場合は、ライフサイクルマネジメントコンソールを使用して、ある BI プラットフォームインストール環境から別の BI プラットフォームインストール環境へレポートオブジェクトをインポートできます。ライフサイクルマネジメントコンソールを使用するときは、インポートする各レポートファイルに正しいデータベース情報を必ず設定します。
- ・ 移行するレポートファイル数が少ない場合、CMC で各レポートのデータベース情報を簡単に変更できます ([フォルダ] 管理領域で目的のレポートを探し、[アクション] > [データベース設定] をクリックします)。

コンテンツを移行したら、コンテンツ管理ワークベンチを使用してレポートの管理を行います。レポート管理タスクには、BI プラットフォームと SAP NetWeaver BW の間でのレポートに関する情報の同期化 (ステータスの更新)、不要なレポートの削除 (レポートの削除) および前のバージョンの BI プラットフォームから移行されたレポートの更新 (ポスト移行) があります。

6.3.3 レポートの表示

Crystal レポートは、BI プラットフォームと SAP NetWeaver BW の統合方法に応じて、多くのアプリケーションで表示できます。

- ・ SAP 認証情報を使用して BI 起動パッドにログインします。
- ・ SAP Easy Access インタフェース内の Web ブラウザで、レポートを起動します。

6.3.3.1 BI 起動パッドでレポートを表示する

- 1 Web ブラウザで、BI 起動パッドの URL「http://webserver:portnumber/BOE/BI」を入力します。
webserver を Web サーバの名称に、portnumber を BI プラットフォームのポート番号に置き換えます。入力する Web サーバ、ポート番号および URL を管理者に確認する必要がある場合があります。

ヒント

BI プラットフォームをインストールしている場合、[スタート] > [プログラム] > [SAP Business Intelligence] > [SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4] > [SAP BusinessObjects Enterprise Java BI 起動パッド] を選択できます。

[BI 起動パッドへのログオン] ダイアログボックスが表示されます。

- 2 [認証] 一覧で、[SAP] を選択します。
- 3 [SAP システム ID] ボックスに、ご使用の SAP システムの 3 文字のシステム ID (SID) を入力します。
正しい SID がわからない場合、管理者に問い合わせてください。
- 4 [SAP クライアント] ボックスに、3 桁の SAP クライアント番号を入力します。
- 5 [ユーザ名] および[パスワード] ボックスに、通常使用する SAP ログオン認証情報を入力します。
- 6 [ログオン] をクリックします。
これで、BI 起動パッドにログオンされます。
- 7 [マイグループ] フォルダをクリックすると、さまざまな SAP ロールに保存され、BI プラットフォームに公開されているすべてのオブジェクトに簡単にアクセスできます。

ヒント

BI 起動パッドの使用方法の詳細については、[ヘルプ] をクリックして BI 起動パッドヘルプにアクセスしてください。

6.3.3.2 公開されたレポートを SAP Easy Access を通じて表示する

- 1 [SAP Easy Access] にログオンします。
- 2 ロールを参照して、SAP NetWeaver BW に保存しているレポートを探します。

ヒント



SAP NetWeaver BW で使用されている Crystal レポートアイコンを探します。

- 3 レポートをダブルクリックします。

レポートが Web ブラウザに表示されます。SAP Web アプリケーションサーバや BI プラットフォームへのログオンが必要な場合があります。その場合は、通常の認証情報を入力します。

6.3.4 SAP NetWeaver BW クエリから生成されたレポートのパーソナライゼーション

BI プラットフォームでは、SAP NetWeaver BW クエリから生成されたレポートのパーソナライズ変数をサポートしています。

SAP NetWeaver BW クエリに基づくレポートでは、変数を使用されることがあります。この変数には、BW クエリから返されるデータを制限または指定する際に使用される値が格納されます。通常は、レポートの実行に使用する値を入力するか、あらかじめ定義されている値の一覧から選択できます。

SAP Business Explorer (BEx) のパーソナライゼーション機能を利用すると、変数の値を設定し、固有のデフォルト値として保存することができます。レポート実行時に生成されるデータは、そのユーザが設定した値に基づいて決まります。同じレポートを実行するたびに、保存しておいたパーソナライズ値を使用できます。

注

パーソナライズ値はユーザ固有です。ユーザ自身が設定したパーソナライズ値は、他のユーザに対しては設定できません。各ユーザは自分自身のパーソナライズ値を、変数にあらかじめ設定される代替値として設定できます。

パーソナライゼーションに関する情報は、SAP NetWeaver BW システムのマニュアルを参照するか、システム管理者に問い合わせてください。

6.3.4.1 パラメータ

レポート内の変数は、BI 起動パッドではパラメータとして表されます。レポートを表示またはスケジュールする際に、各パラメータに対するダイナミックピックリストから値を選択します。ピックリストの値は、SAP 環境で変数に割り当てられており、SAP 内のユーザ権限に基づいてフィルタされます。

[プロンプト値を入力してください。]ダイアログボックスには、次のオプションが表示されます。

- ・ デフォルトのパラメータ値を使用してレポートを実行する。
- ・ ダイナミックピックリストから値を選択し、その選択したパラメータ値を使用してレポートを実行する。
- ・ 各パラメータ値を手動で入力し、その入力値を使用してレポートを実行する。
- ・ パラメータに対して NULL 値を使用してレポートを実行する。
- ・ 各パラメータ値をパーソナライズし、そのパーソナライズ値を使用してレポートを実行する。

注

一部のオプションは、そのレポートの基になる SAP NetWeaver BW クエリ内またはBI プラットフォーム内で有効になっている場合にのみ利用できます。

6.3.4.1.1 デフォルトのパラメータ値を使用してレポートを表示する

レポートパラメータのデフォルト値は、クエリ作成時に SAP 環境で設定できます。BI プラットフォームのレポートは SAP NetWeaver BW クエリに基づいているので、クエリ変数のデフォルト値が自動的にレポートパラメータのデフォルト値になります。

- 1 BI 起動パッドにログオンします。
- 2 表示するオブジェクトをダブルクリックします。
[プロンプト値の入力] ダイアログボックスが表示されます。

- 3 [OK]をクリックします。

レポートが Crystal レポートビューアに表示されます。このレポートには、パラメータに割り当てられていたデフォルト値に基づくデータだけが表示されます。

関連項目

- ・ 60 ページの[スケジュールされたレポートのパーソナライズされたパラメータ値](#)」

6.3.4.1.2 ダイナミックピックリスト内のパラメータ値を使用してレポートを表示する

パラメータに対するダイナミックピックリスト内のアイテムは、SAP 環境でその変数に割り当てられていた値に基づいています。BI 起動パッドに表示される値は、ユーザが持っている権限に対応しているため、レポートの権限のある値のみ表示することができます。

注

このオプションは、SAP NetWeaver BW クエリベースのパラメータでのみ使用できます。

- 1 BI 起動パッドにログオンします。
- 2 変数が含まれるオブジェクトを探してダブルクリックします。
[プロンプト値の入力]ダイアログボックスが表示されます。
- 3 パラメータの横にある [...] ボタンをクリックします。
[ピックリスト]画面が表示されます。
- 4 ピックリスト内で目的のパラメータに対する値を探し、見つかったらそのハイパーリンクをクリックします。
[プロンプト値を入力してください。] ダイアログボックスに戻ります。選択した値が、そのパラメータに対する編集フィールドに表示されます。
- 5 その他のパラメータに対してもステップ 3 および 4 を繰り返し、その後[実行]をクリックします。
レポートは Crystal レポートビューアに表示され、選択したパラメータ値に基づくデータが示されます。

6.3.4.1.3 スケジュールされたレポートにおける NULL パラメータ値

NULL パラメータ値を使用してレポートをスケジュールすると、レポートの実行時にクエリには何も値が渡されません。この場合、レポートでは、あらかじめ設定されているデフォルト値または定義したパーソナライズ値が使用されます。

注

パーソナライズ値はデフォルト値を上書きします。

レポートの実行に使用されているパラメータ値を変更する場合は、BI プラットフォームでそのレポートをクリックするだけで、新しいパラメータを使用してレポートを再スケジュールすることができます。そのレポートはもともと、NULL パラメータ値を使用して実行するようにスケジュールされていたので、そのレポートに対して値は保存されていません。

レポートを次に実行すると、新しいパラメータ値に基づいてデータが生成されます。

NULL パラメータ値を使用してレポートを表示する

NULL パラメータ値を使用してレポートを実行すると、実行時にクエリには何も値が渡されません。したがって、レポートの実行に使用される値は、変数に対してあらかじめ設定されているデフォルト値またはパーソナライズ値になります。パーソナライズ値はデフォルト値を上書きします。変数にデフォルト値またはパーソナライズ値がない場合、レポートは変数の値なしに実行を試みます。レポートの実行に変数の値を必要とするクエリの場合、エラーが表示される可能性があります。

注

- この方法は、主にレポートをスケジュールする際に使用されます。
- このオプションは、SAP NetWeaver BW クエリベースのパラメータでのみ使用できます。

- 1 BI 起動パッドにログオンします。
- 2 変数が含まれるオブジェクトを探してダブルクリックします。
[プロンプト値の入力]ダイアログボックスが表示されます。
- 3 各パラメータが [NULL に設定] に設定されていることを確認します。
- 4 [OK]をクリックします。

レポートが Crystal レポートビューアに表示されます。このレポートには、SAP で変数にもともと割り当てられていたデフォルト値またはパーソナライズ値に基づくデータだけが表示されます。

6.3.4.1.4 スケジュールされたレポートのパーソナライズされたパラメータ値

パーソナライズされたパラメータ値を含むレポートに対して定期スケジュールを設定すると、BI プラットフォームはスケジュールされたすべてのレポート生成時には、パーソナライズ値を使用します。

注

値をパーソナライズすると、BI プラットフォームによってその値が保存され、そのレポートでユーザ固有の永久パラメータ値として設定されるからです。パラメータのパーソナライズ値を途中で変更しても、スケジュールされたレポートでは、変更前のパーソナライズ値に基づくデータが引き続き表示されます。

パラメータのパーソナライズ値を変更する場合は、次の手順に従い、レポートのスケジュールで変更前の値が使用されないようにします。

- 新しいパラメータ値でレポートをもう一度スケジュールする。
- パラメータに対する NULL 値を使用するレポートをスケジュールする。これによって、レポートの実行時にパーソナライズ値が評価されます。

パーソナライズされたパラメータ値を使用してレポートを表示する

パーソナライゼーション機能を利用することにより、ユーザはパラメータに対する自分専用のデフォルト値を設定して保存し、後で再利用することができます。パラメータのパーソナライズ値を設定すると、そのパーソナライズ値は事実上、そのパラメータに対する新しいデフォルト値になります。

注


- ・ このオプションは、SAP NetWeaver BW クエリベースのパラメータでのみ使用でき、SAP NetWeaver MDX ドライバに基づいたレポートにのみ適用されます。
- ・ パーソナライズ値はユーザ固有です。ユーザ自身が設定したパーソナライズ値は、他のユーザに対しては実装されません。他のユーザが同じレポートを使用する場合、そのユーザは、自分専用のパーソナライズ値を選択することも、そのパラメータに対してすでに設定されている値のいずれかを使用することもできます。

1 BI 起動パッドにログオンします。

2 変数が含まれるオブジェクトを探してダブルクリックします。

[プロンプト値の入力]ダイアログボックスが表示されます。レポートパラメータのデフォルト値は、それぞれ[現在の値]の横に表示されています。

3 以下のいずれかの方法でパラメータの値をパーソナライズします。

- ・  リストから値を選択して[パーソナライズ]アイコンをクリックし、その値をパーソナライズ値として設定する。
- ・ パラメータの編集フィールドをクリックして値を入力し、次に[パーソナライズ]アイコンをクリックしてその値をパーソナライズ値として設定する。

これで、設定したパーソナライズ値に基づくデータを使用したレポートを表示できます。今後同じレポートを表示する際に別のパラメータ値を指定しなかった場合、このパーソナライズ値に基づいてレポートが実行されます。

パーソナライゼーションに関する情報は、SAP NetWeaver BW システムのマニュアルを参照するか、システム管理者に問い合わせてください。

6.4 プログラムオブジェクトの管理

この節では、プログラムオブジェクトおよびプログラムインスタンスについてと、それらをセントラル管理コンソール(CMC)で管理する方法、およびタイプ特有のプログラムオブジェクトの設定およびプログラムオブジェクトのセキュリティ上の考慮点について説明します。

6.4.1 プログラムオブジェクトとインスタンスの概要

プログラムオブジェクトとは、BI プラットフォーム内のアプリケーションを表すオブジェクトです。プログラムオブジェクトを追加すると、プログラムオブジェクトをスケジュールして実行したり、プログラムオブジェクトに関連したユーザアクセス権を管理したりできます。

プログラムオブジェクトまたはその関連ファイルを BI プラットフォームに追加すると、オブジェクトまたはファイルは、Input File Repository Server (FRS) に格納されます。プログラムが実行されるたびに、プログラムとファイルは、Program Job Server に渡され、BI プラットフォームはプログラムインスタンスを作成します。完全な書式で表示可能なレポートインスタンスと違って、プログラムインスタンスはオブジェクト履歴内にレコードとして存在します。BI プラットフォームでは、プログラムの標準出力と標準エラーがテキスト形式の出力ファイルに保存されます。オブジェクトの履歴でプログラムインスタンスをクリックすると、このファイルが表示されます。

プログラムオブジェクトを正常にスケジュールし、実行するには、プログラムオブジェクトの実行に使用するアカウントのログオン情報を指定する必要があります。

関連項目

- ・ 19 ページの [BI プラットフォームへのオブジェクトの追加](#)

6.4.1.1 プログラムタイプ

プログラムオブジェクトとしてリポジトリに追加できるアプリケーションには、次の 3 つの種類があります。

- ・ 実行可能プログラム

実行可能プログラムは、バイナリファイル、バッチファイル、またはシェルスクリプトです。一般的に、これらのファイル拡張子は .com、.exe、.bat、.sh です。Program Job Server が動作しているマシンのコマンドラインから実行できる実行可能プログラムであれば、いずれも追加できます。

- ・ Java

いずれの Java プログラムも、Java プログラムオブジェクトとしてリポジトリに追加できます。

- ・ スクリプト

スクリプトプログラムオブジェクトには、JScript スクリプトと VBScript スクリプトがあります。これらのスクリプトは、埋め込み COM オブジェクトを使用して Windows 上で実行され、公開後は、BI プラットフォーム SDK オブジェクトを参照できます。

注

スクリプトプログラムオブジェクトは、UNIX ではサポートされません。

注

システム管理者は、プログラムオブジェクトのいずれの種類に対しても有効/無効を設定できます。

プログラムオブジェクトをリポジトリに追加すると、CMC の [フォルダ] 管理エリアでこのオブジェクトを設定できるようになります。プログラムオブジェクトのタイプ(実行可能プログラム、Java、スクリプト)ごとに、コマンドライン引数と作業ディレクトリを指定できます。実行可能プログラムおよび Java プログラムについては、プログラムオブジェクトを設定し、それらのプログラムオブジェクトが他のファイルにアクセスできるようにするための追加の方法(必須またはオプション)が用意されています。

ヒント

プログラムオブジェクトを使用すると、BI プラットフォームに対して実行され、履歴からインスタンスを削除する、などの保守作業を行うスクリプトや Java プログラムを、作成、公開、スケジュールすることができます。さらに、BI プラットフォームセッション情報にアクセスするように、これらのスクリプトと Java プログラムを設計することができます。これによって、スケジュールされたプログラムオブジェクトが、確実に、ジョブをスケジュールしたユーザーのセキュリティアクセス権や制限を保持するようになります。スクリプトや Java プログラムは、BI プラットフォーム SDK にアクセスする必要があります。詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Java SDK 開発者ガイド』などの BI プラットフォーム SDK ドキュメントを参照してください。

6.4.2 プログラムの処理オプションの設定

6.4.2.1 コマンドライン引数を指定する

[管理]メニューの[デフォルト設定]コマンドで、プログラムオブジェクトごとにコマンドライン引数を指定できます。プログラムのコマンドラインインターフェースでサポートされている引数であれば、どのような引数でも指定できます。引数は、解析されずに、コマンドラインインターフェースに直接渡されます。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、プログラムオブジェクトを選択します。
- 2 [管理] > [デフォルト設定]をクリックします。
[デフォルト設定]ダイアログボックスが表示されます。
- 3 ナビゲーション一覧で[プログラムパラメータ]をクリックします。
- 4 [引数]フィールドには、コマンドライン自身で使用するのと同じ形式で、プログラムのコマンドライン引数を入力します。

たとえば、プログラムにループオプションがある場合に、ループ値を 100 に設定するには、「-loops 100」と入力します。
- 5 [保存して閉じる]をクリックします。

6.4.2.2 プログラムオブジェクトの作業ディレクトリの設定

BI プラットフォームでは、プログラムオブジェクトの実行時、デフォルトで Adaptive Job Server の作業ディレクトリ内に一時サブディレクトリが作成され、このサブディレクトリがそのプログラムの作業ディレクトリとして使用されます。プログラムの実行が終了すると、サブディレクトリは自動的に削除されます。

[管理]メニューの[デフォルト設定]コマンドでは、プログラムオブジェクトに代わりの作業ディレクトリを指定できます。また、Adaptive Job Server の作業ディレクトリについては、デフォルト設定値を変更することもできます。

注

プログラムの実行に使用するアカウントには、作業ディレクトリとして設定されたフォルダに対する適切なアクセス権が必要です。必要なファイルのアクセスレベルは、プログラムの機能によって異なりますが、プログラムのアカウントには、通常、作業ディレクトリに対する読み取り、書き込み、実行の各権限が必要です。

関連項目

- ・ 71 ページの[認証およびオブジェクトパッケージ](#)」

6.4.2.2.1 プログラムオブジェクトの作業ディレクトリを設定する

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、プログラムを選択します。
- 2 [管理] > [デフォルト設定] をクリックします。
[デフォルト設定] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 ナビゲーション一覧で [プログラムパラメータ] をクリックします。
- 4 [作業ディレクトリ] フィールドに、プログラムオブジェクトの作業ディレクトリとして設定するディレクトリの完全パスを入力します。

たとえば、Windows で `working_directory` という作業ディレクトリを作成した場合は、「`C:\working_directory`」と入力します。

UNIX では、「`/working_directory`」と入力します。

- 5 [保存して閉じる] をクリックします。

6.4.2.2.2 プログラムオブジェクトのデフォルトの作業ディレクトリを変更する

- 1 CMC の [サーバ] 管理エリアを表示します。
- 2 プログラムスケジューリングサービスをホストする Adaptive Job Server を選択します。
Adaptive Job Server がプログラムスケジューリングサービスをホストしているかどうかを確認するには、サーバを選択して、[管理] > [プロパティ] をクリックします。
- 3 [管理] > [プロパティ] をクリックします。
[プロパティ] ダイアログボックスが表示されます。
- 4 [一時ディレクトリ] フィールドに、作業ディレクトリとして設定するディレクトリの完全パスを入力します。
- 5 [保存して閉じる] をクリックします。

6.4.3 実行可能プログラムの設定

実行可能プログラムオブジェクトを CMC に追加すると、次のアクションを実行できます。

- ・ 外部ファイルまたは補助ファイルへのアクセス権を持つオブジェクトの設定。
- ・ BI プラットフォームでプログラムを実行する際のシェルの環境変数のカスタマイズ。

関連項目

- ・ 66 ページの[Java プログラムの設定](#)

6.4.3.1 必要なファイルのパスを指定する

一部のバイナリファイル、バッチファイル、シェルスクリプトは、実行時に外部ファイルまたは予備ファイルにアクセスする必要があります。プログラムオブジェクトの作業ディレクトリの設定は別として、これらのファイルにアクセスするには 2 つの方法があります。

- ・ 必要なファイルがプログラムスケジュールサービスをホストする Adaptive Job Server と同じマシン上に存在する場合は、そのファイルの完全パスを指定することができます。
- ・ これに対して、そのファイルが他の場所にある場合は、ファイルを File Repository Server にアップロードすることができます。File Repository Server は、必要に応じてファイルをプログラムスケジュールサービスに渡します。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、実行可能なプログラムオブジェクトを選択します。
- 2 [管理] > [デフォルト設定] をクリックします。

[デフォルト設定] ダイアログボックスが表示されます。

- 3 ナビゲーション一覧で [プログラムパラメータ] をクリックします。
- 4 [外部依存] フィールドに、必要なファイルの完全パスを入力し、[追加] をクリックします。
- 5 必要な各ファイルに対して手順 4 を繰り返します。
- 6 [保存して閉じる] をクリックします。

ヒント

指定した外部依存を編集または削除するには、[外部依存] のファイルパスを選択し、[編集] または [削除] のいずれかの適切なボタンをクリックします。

6.4.3.2 必要なファイルをアップロードする

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、実行可能なプログラムオブジェクトを選択します。
- 2 [アクション] > [関連ファイル] をクリックします。
- 3 [参照] をクリックして、必要なファイルに移動し、[ファイルの追加] をクリックします。
- 4 必要なファイルのそれぞれで、ステップ 3 を繰り返します。
- 5 [保存して閉じる] をクリックします。

ヒント

指定した予備ファイルを削除するには、[現在の補助ファイル] リストでファイル (複数可) を選択し、[ファイルの削除] をクリックします。

6.4.3.3 環境変数を追加する

CMC では、環境変数の追加または変更を行ってプログラムを設定することができます。既存の環境変数を変更すると、変数に変更が付け足されるのではなく、変数を書き換えられます。環境変数に対する変更は、BI プラットフォームがプログラムを実行する一時的なシェル内でのみ有効です。つまり、プログラムが終了すると環境変数は破棄されます。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、プログラムオブジェクトをクリックします。
- 2 [管理] > [デフォルト設定] をクリックします。
[デフォルト設定] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 [プログラムパラメータ] をクリックします。
- 4 [環境変数] フィールドに、設定する環境変数を入力し、[追加] をクリックします。

name=value という形式を使用します。ここで、name は環境変数の名前で、value は環境変数の値です。たとえば、ユーザの bin ディレクトリを既存のパスに付加するには、次のように path 変数を設定できます。

- ・ Windows では、「path=%path%;c:\usr\bin」のように入力します。
- ・ UNIX では、「PATH=\$PATH:/usr/bin」と入力します。

注

BI プラットフォームは、お使いのオペレーティングシステムに適した構文を使用して、環境変数を設定します。ただし、UNIX では、以下の規則に従って大文字/小文字を適切に使い分けます。たとえば、UNIX では、name の値をすべて大文字で入力する必要があります。

- 5 [保存して閉じる] をクリックします。

ヒント

指定した環境変数を編集または削除するには、[環境変数] リストで変数を選択し、[編集] または [削除] のいずれか適切なボタンをクリックします。

6.4.4 Java プログラムの設定

BI プラットフォームで Java プログラムを正常にスケジュールして実行するには、プログラムオブジェクトに必要なパラメータを指定する必要があります。

また、Java プログラムが Adaptive Job Server マシンにある他のファイルにアクセスできるように設定したり、Java 仮想マシンオプションを指定したりすることもできます。

6.4.4.1 Java プログラムの必須パラメータを指定する

Java プログラムのスケジュールと実行を正常に行うには、BI プラットフォーム Java SDK の IProgramBase インタフェースを実装する .class ファイルの基本名を BI プラットフォームに指定する必要があります。

注

Java Runtime Environment は、Adaptive Job Server を実行する各マシン上にインストールする必要があります。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、Java プログラムオブジェクトを選択します。
- 2 [管理] > [デフォルト設定] をクリックします。
[デフォルト設定] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 ナビゲーション一覧で [プログラムパラメータ] をクリックします。
- 4 [実行するクラス] フィールドに、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Java SDK の IProgramBase (com.businessobjects.sdk.plugin.desktop.program.IProgramBase) を実装する .class ファイルの基本名を入力します。
たとえば、ファイル名が Arius.class の場合は、「Arius」と入力します。
- 5 [保存して閉じる] をクリックします。

注

OutOfMemoryError が発生したためにスケジュールされたジョブを実行できなかった場合は、JVM に割り当て最大ヒープサイズを増やしてください。JVM 引数は、[プログラムパラメータ] セクションの [JVM 引数] フィールドで設定できます。実行する Java プログラムに合った最大ヒープサイズを指定します (例: Xmx1024m)。[JVM 引数] フィールドは、エラーを解消する目的のみで使用し、それ以外の場合は空のままにしてください。

6.4.4.2 Java プログラムが他のファイルにアクセスできるように設定する

Java プログラムが Java ライブラリといったプログラムスケジュールサービスマシン上のファイルにアクセスできるように設定することができます。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、Java プログラムオブジェクトを選択します。
- 2 [管理] > [デフォルト設定] をクリックします。
[デフォルト設定] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 ナビゲーション一覧で [プログラムパラメータ] をクリックします。
- 4 [Classpath] フィールドに、プログラムスケジュールサービスをホストする Adaptive Job Server に格納されている、Java プログラムが必要とするすべての Java ライブラリファイルの場所への完全パスを入力します。
複数のパスを入力する場合は、使用しているオペレーティングシステムに適した classpath 区切り文字 (Windows ではセミコロン、UNIX ではコロン) を使用します。
- 5 [保存して閉じる] をクリックします。

6.4.5 プログラムオブジェクトのユーザアカウントを指定する

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、プログラムオブジェクトを選択します。
- 2 [管理] > [デフォルト設定] をクリックします。
[デフォルト設定] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 ナビゲーション一覧で [プログラムのログオン] をクリックします。
- 4 [ユーザ名] と [パスワード] フィールドに、プログラムを実行するときのアカウントの認証情報を入力します。
- 5 [保存して閉じる] をクリックします。

6.5 オブジェクトパッケージ管理

この節では、オブジェクトパッケージおよびインスタンスについて説明し、さらにセントラル管理コンソール (CMC) でのそれらの管理方法、オブジェクトパッケージの作成方法、オブジェクトパッケージへのオブジェクトの追加方法について説明します。

6.5.1 オブジェクトパッケージ、コンポーネント、インスタンスについて

オブジェクトパッケージは、BI プラットフォームの独立したオブジェクトとして機能します。オブジェクトパッケージは、すべてのコンテンツとともに、スケジュールが可能なフォルダと考えることができます。オブジェクトパッケージは、システムに追加されるレポートとプログラムオブジェクトの任意の組み合わせから成ります。BI プラットフォームオブジェクト以外のオブジェクト (Excel、Word、Acrobat、テキスト、リッチテキスト、PowerPoint、およびハイパーリンクオブジェクト) は、オブジェクトパッケージに追加することができません。

複数のオブジェクトを 1 つのオブジェクトパッケージにまとめると、それらのオブジェクトを同時にスケジュールすることができます。レポートのオブジェクトパッケージでは、ユーザはレポート間で同期されたデータを表示することができます。コンポーネントオブジェクトは自立していないため、他のオブジェクトよりも設定オプションに制限があり、CMC の [フォルダ] 管理エリアのすべてのオブジェクトのリストには表示されません。オブジェクトパッケージを開いたときだけコンポーネントオブジェクトを表示できるようになっています。

BI プラットフォームでは、オブジェクトパッケージを実行するたびに、オブジェクトパッケージインスタンスが作成されます。オブジェクトパッケージインスタンスには、各コンポーネントオブジェクトの個々のインスタンスが含まれています。コンポーネントインスタンスは、コンポーネントオブジェクトではなく、オブジェクトパッケージインスタンスと連携しています。たとえば、オブジェクトパッケージを実行し、インスタンスを作成して、オブジェクトパッケージからレポートオブジェクトを削除しても、既存のオブジェクトパッケージインスタンスは変更されません。オブジェクトパッケージには、削除したレポートオブジェクトから作成されたレポートインスタンスが残っているからです。しかし、オブジェクトパッケージの将来のインスタンスは、変更を反映します。

オブジェクトパッケージインスタンス内にあるハイパーリンクされたレポートインスタンスの場合、ハイパーリンクは、同じオブジェクトインスタンス内にある他のレポートインスタンスをポイントします。

関連項目

- ・ 51 ページの[ハイパーリンクを使用したレポートでの作業](#)」

6.5.2 新しいオブジェクトパッケージを作成する

- 1 CMC の[フォルダ]管理エリアに移動し、オブジェクトパッケージを作成するフォルダに移動します。
- 2 [管理] > [新規] > [オブジェクトパッケージ]の順にクリックします。
[オブジェクトパッケージ]ダイアログボックスが表示されます。
- 3 オブジェクトパッケージのタイトル、説明、およびキーワードを入力します。
- 4 [OK]をクリックします。

オブジェクトパッケージがシステムに追加されると、そのオブジェクトパッケージのプロパティ、コンテンツ、スケジュール情報、出力先、ユーザアクセス権、オブジェクト設定、および通知を変更できます。それには、[管理] > [プロパティ] または [管理] > [デフォルト設定] を使用します。

6.5.3 オブジェクトパッケージへのオブジェクトの追加

CMC では、作成したオブジェクトパッケージに、レポートオブジェクトやプログラムコンポーネントオブジェクトを追加できます。新しいオブジェクトをオブジェクトパッケージに直接追加したり、既存のオブジェクトをオブジェクトパッケージにコピーしたりできます。既存のオブジェクトのコピーは、オブジェクトパッケージ内に移動したり、オブジェクトパッケージ間で移動したりできますが、既存のオブジェクト自体を移動することはできません。

オブジェクトをオブジェクトパッケージにコピーすると、コンポーネントオブジェクトには元のオブジェクトと同じ設定が保持されます。しかし、オブジェクトパッケージ内に元のオブジェクトのコピーを作成すると、コンポーネントと元のオブジェクトは別のエンティティになります。片方のオブジェクトを変更しても、もう片方のオブジェクトには反映されません。

関連項目

- ・ 31 ページの[オブジェクトをコピーする](#)」

6.5.3.1 新しいオブジェクトをオブジェクトパッケージに追加する

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、オブジェクトパッケージをダブルクリックします。
オブジェクトパッケージのコンテンツは、詳細パネルに表示されます。
- 2 追加するオブジェクトに応じて、[管理] > [追加] > [ローカルドキュメント] または [プログラムファイル] をクリックします。
このダイアログボックスは、選択したオプションに応じて変わります。
- 3 [参照] をクリックして、追加するオブジェクトを選択します。
- 4 適切なプロパティを設定します。
 - ・ レポートを追加する場合、以下の手順を実行します。
 - ・ レポートの概要情報を保持する場合は、[レポートからの説明を使用する] を選択します。
 - ・ レポートの保存データを保持する場合は、[保存済みデータを保持] を選択します。
 - ・ プログラムオブジェクトを追加する場合は、[実行ファイル]、[Java]、または [スクリプト] をクリックしてプログラムの種類を指定します。
- 5 [OK] をクリックします。

6.5.4 オブジェクトパッケージとオブジェクトの設定

オブジェクトパッケージを使用すると、同様のスケジュール要件を持つオブジェクトをスケジュールする時間を節約できます。結果として、オブジェクトパッケージレベルのいくつかのパラメータ、およびオブジェクトレベル、つまりオブジェクトパッケージ内の個々のオブジェクトに対していくつかのパラメータを設定します。

たとえば、オブジェクトパッケージの出力先を指定する必要がありますが、パッケージ内の個々のオブジェクトに対して出力先を指定することはできません。オブジェクトパッケージが実行されると、そのオブジェクトパッケージに対して指定した出力先に出力インスタンスが保存されます。

注

オブジェクトパッケージ内のオブジェクトは、パッケージ外に存在するオブジェクトのコピーであるため、実行した変更内容は、オブジェクトパッケージ外のオブジェクトには反映されません。

6.5.4.1 オブジェクトパッケージのコンポーネントエラーオプションを設定する

このタスクを実行して、実行時のコンポーネントのエラーに対するオブジェクトパッケージの対処法を指定できます。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアでオブジェクトパッケージに移動し、選択します。
- 2 [管理] > [デフォルト設定] をクリックします。
- 3 ナビゲーション一覧で [コンポーネントのエラー] をクリックします。
- 4 [個々のコンポーネントにエラーが発生するとスケジュールされたパッケージが失敗する] チェックボックスをオンまたはオフにします。

- 5 [保存して閉じる]をクリックします。

6.5.5 認証およびオブジェクトパッケージ

オブジェクトパッケージは、Enterprise とデータベースにおける認証処理を簡便にします。Enterprise 認証を1回入力するだけで、コンポーネントオブジェクトがすべて含まれているオブジェクトパッケージをスケジュールすることができます。したがって、オブジェクトパッケージ内の各オブジェクトをスケジュールするアクセス権を持っている必要があります。スケジュールアクセス権のないコンポーネントオブジェクトを 1 つ以上含むパッケージのスケジュールを試みると、コンポーネントインスタンスはエラーを起こします。

データベース認証では、オブジェクトパッケージ内の各レポートコンポーネントオブジェクトに対し、データベースログオン情報を指定します。レポートをオブジェクトパッケージにコピーすれば、元のレポートのデータベースログオン情報が最初に継承されます。

オブジェクトのスケジュール

7.1 スケジュール

スケジュールは、オブジェクトが指定の時刻に自動的に実行されるようにする処理です。オブジェクトをスケジュールする場合、必要な定期スケジュールパターンを選択し、その他のパラメータを指定して、そのオブジェクトの実行時刻と頻度を正確に制御します。

オブジェクトをスケジュールすると、システムによってスケジュールされたインスタンスが作成されます。スケジュールされたインスタンスは個々のオブジェクトの「履歴」ダイアログボックスに（「定期」または「待機」というステータスで）表示されますが、このインスタンスにはオブジェクトとスケジュール情報のみが含まれ、データは含まれません。

オブジェクトの実行時に、オブジェクトの出力インスタンス（レポートまたはプログラムインスタンスなど）が作成されます。レポートインスタンスには、データベースから取得した実際のデータが含まれます。プログラムインスタンスは、プログラムオブジェクトの実行時に生成された標準出力および標準エラーを含むテキストファイルです。オブジェクトの「履歴」ダイアログボックスには出力インスタンスも表示されます。出力インスタンスのステータスは「成功」または「失敗」になります。

エンドユーザがオブジェクトをスケジュールして実行するには、BI 起動パッドやカスタム Web アプリケーションなど、Web ベースのクライアントを使用する必要があります。BI 起動パッドは、主にオブジェクトのスケジュールとレポートの表示を目的としていますが、CMC ではこれらの用途に加えて、オブジェクトの管理もできます。

関連項目

- ・ 168 ページの[スケジュール情報を指定する](#)

7.1.1 スケジュールオプションの設定

7.1.1.1 オブジェクトをスケジュールする

- 1 CMCの「フォルダ」管理エリアで、オブジェクトを選択します。

注

オブジェクトのデフォルトのスケジュール設定を変更するには、[スケジュール]ダイアログボックスを開いたときに[デフォルト設定]をクリックします。スケジュール設定を指定して[保存]をクリックします。

- 2 [アクション] > [スケジュール]をクリックします。

[スケジュール]ダイアログボックスが表示され、オブジェクトのデフォルト設定が示されます。

- 3 適切なインスタンスのタイトルを入力します。
- 4 [繰り返し]をクリックして、定期的なスケジュールパターンを選択します。
たとえば、[週単位]を選択します。
- 5 必要なパラメータを指定します。

たとえば、[月曜日]、[水曜日]、および [金曜日] を指定します。

- 6 必要に応じて、その他のスケジュールオプションやパラメータをすべて設定します。
- 7 [スケジュール]をクリックします。

スケジュールされたインスタンスが作成され、指定したスケジュール情報に従ってそのインスタンスが実行されます。オブジェクトの[履歴]ページに、スケジュールされたインスタンスを表示することができます。

関連項目

- ・ 75 ページの[定期パターンオプション](#)
- ・ 76 ページの[実行オプションとパラメータ](#)
- ・ 102 ページの[インスタンス情報の表示](#)

7.1.1.2 オブジェクトの[対象指定]設定を変更する

[対象指定]機能により、特定のユーザのみを対象としたデータを含むレポートを生成できます。この機能は、次のオブジェクトタイプのいずれかで使用します。

- ・ ビジネスビュー、ユニバース、または SAP BEx クエリに基づく Crystal レポート
- ・ ユニバースを使用する Web Intelligence ドキュメント

[対象指定]機能を使用すると、オブジェクトをスケジュールするとき、オブジェクトの実行の対象となるユーザを指定できます。システムはオブジェクトを実行して、レポートまたはドキュメントの複数のインスタンスを生成します。各インスタンスには、個々のユーザだけに関連するデータが含まれます。

たとえば、[対象指定]ページですべての営業担当者のユーザ名を指定して、営業レポートをスケジュールできます。指定した時刻になると、レポートオブジェクトが実行されて、個々のレポートインスタンスが生成されます。各インスタンスには、個々の営業担当者だけを対象にした営業情報が含まれます。

- 1 CMCの[フォルダ]管理エリアで、レポートオブジェクトを選択します。
- 2 [アクション] > [スケジュール]をクリックします。
- 3 ナビゲーション一覧で[対象指定]をクリックします。
- 4 オブジェクトをスケジュールする対象者を選択します。

- ・ 現在のユーザだけを対象にスケジュールする
 - ・ スケジュール対象となるユーザ/ユーザグループを指定する
- 5 [スケジュール対象となるユーザ/ユーザグループを指定する]を選択した場合、スケジュールするユーザまたはグループに移動して選択し、[>]をクリックして[選択済み]リストに追加します。

ヒント

[選択済み]リストからユーザまたはグループを削除する場合は、それを選択して[<]をクリックします。

- 6 その他のスケジュールオプションを設定し、[スケジュール]をクリックします。

7.1.1.3 定期パターンオプション

| 定期スケジュールパターン | 説明 |
|--------------|---|
| 今すぐ | [スケジュール] をクリックすると、すぐにオブジェクトが実行されます。 |
| 1 回 | オブジェクトは 1 回だけ実行されます。今すぐまたは後で実行したり、指定したイベントが発生したときに実行したりすることができます。 |
| 時間単位 | オブジェクトは毎時実行されます。開始時間、開始および終了日を指定します。 |
| 日単位 | オブジェクトは毎日実行されます。1 日に 1 回または数回実行することができます。実行時刻、開始日および終了日を指定することができます。 |
| 週単位 | オブジェクトは毎週実行されます。1 週間に 1 回または数回実行することができます。実行する曜日、時間、開始および終了日を指定することができます。 |
| 毎月 | オブジェクトは毎月または数カ月ごとに実行されます。実行する日にち、時間、開始および終了日を指定することができます。 |
| 日付 | オブジェクトは毎月特定の日に実行されます。実行する日にち、開始日および終了日を指定することができます。 |
| 第 1 月曜日 | オブジェクトは毎月第 1 月曜日に実行されます。開始日と終了日を指定できます。 |

| 定期スケジュールパターン | 説明 |
|--------------|---|
| 月末日 | オブジェクトは毎月末日に実行されます。開始日と終了日を指定できます。 |
| 月間の曜日 | オブジェクトは毎月特定の週の特定の曜日に実行されます。曜日、週、開始日および終了日を指定できます。 |
| カレンダー | オブジェクトは、すでに作成されているカレンダーで指定した日に実行されます。 |

関連項目

- 108 ページの[「カレンダー」](#)

7.1.1.3.1 実行オプションとパラメータ

定期スケジュールパターンを選択したら、実行オプションおよび定期スケジュールオプションのパラメータを設定する必要があります。ここでは、オブジェクトのスケジュール用の実行パラメータについて説明します。すべてのパラメータがすべての場合に適用されるわけではありませんが、適用される場合は、どの場合でも機能は同じです。

表 7-2: 実行オプション

| 実行オプション | 説明 |
|------------|--|
| X 変数と N 変数 | 特定の[日単位]および[月単位]定期スケジュールパターンにのみ適用されます。これらの変数を含む実行オプションを選択すると、そのデフォルト値が表示されます。これらの値は必要に応じて変更できます。 たとえば、[日単位]定期スケジュールパターンと[X 時間 N 分ごと]の実行オプションを選択した場合、レポートを 4(X)時間 30(N)分ごとなどに実行するように指定できます。X または N の値を変更しない場合、レポートは 1 時間ごとに実行されます。 |
| 実行日 | これらのオプションは、[週単位]定期スケジュールパターンを選択した場合に表示されます。適切な曜日のチェックボックスをオフにして、ジョブを実行する曜日を選択できます。 |

| 実行オプション | 説明 |
|------------|---|
| 開始時刻 | ほとんどの場合に適用されますが、一部適用されない定期スケジュールパターンと実行オプションがあります。デフォルトは、現在の日時です。開始時刻が経過した直後のできる限り早い段階で、指定したスケジュールに従ってオブジェクトが実行されます。 たとえば、3 カ月後の開始時刻を指定すると、他のすべての基準が満たされている場合でも、その開始日が経過するまでオブジェクトは実行されません。開始日の経過後、指定した時刻にレポートが実行されます。 |
| 終了時刻 | ほとんどの場合に適用されますが、一部適用されない定期スケジュールパターンと実行オプションがあります。デフォルトは遠い将来における現在の時刻と日付で、それまでは何度もオブジェクトが実行されます。必要に応じて、別の終了時刻を指定します。終了時刻が経過すると、オブジェクトは実行されません。 |
| 可能な再試行回数 | 常に適用されます。最初の試行が失敗した場合に、システムがオブジェクトの処理を試行する回数です。デフォルトでは、この数は 0 です。 |
| 再試行間隔(秒単位) | 常に適用されます。最初の試行が失敗した場合に、システムがオブジェクトの処理を再試行するまでの待機間隔(秒単位)です。 |

7.1.1.4 スケジューリングジョブの成功または失敗の通知の設定

オブジェクトインスタンスの実行に成功または失敗したときに自動的に通知されるように、スケジュールオプションを設定できます。通知は、監査通知または電子メール通知で送信できます。複数の通知方法を組み合わせることが可能なため、成功したインスタンスと失敗したインスタンスで、異なる通知設定を使用することもできます。

たとえば、毎日実行するレポートが多数あるとします。管理者は、各インスタンスが正常に実行されたことを確認し、新しいレポートが作成されたことを特定のユーザに電子メールで知らせる必要があります。多数のレポートがある場合、手動でレポートを確認して必要なユーザに通知する作業には非常に時間がかかります。BI プ

プラットフォームの通知設定を使用すると、レポートが正常に実行されなかったときには管理者に、新しいレポートインスタンスが正常に実行されたときにはユーザに通知が自動送信されるよう、各オブジェクトに設定することができます。

7.1.1.4.1 スケジューリングジョブの成功または失敗の決定

オブジェクトをスケジュールすると、スケジュールされたインスタンスは成功するか失敗するかのいずれかです。インスタンスが成功する条件と失敗する条件は、次に示すように、スケジュールしたオブジェクトの種類によって決まります。

- ・ レポートオブジェクトおよび Web Intelligence ドキュメント

オブジェクトの処理中またはデータベースのアクセス中にエラーが発生しない場合は、レポートインスタンスまたはドキュメントオブジェクトインスタンスの実行は成功となります。ユーザの指定したパラメータやログオン情報が間違っていると、インスタンスは失敗する可能性があります。

- ・ プログラムオブジェクト

プログラムオブジェクトの場合、成功するためにはプログラムが実行される必要があります。プログラムが実行されない場合、インスタンスは失敗と見なされます。プログラムが実行されたものの、本来のタスクが実行されない場合があります。この場合、プログラムオブジェクトが実行された以上、そのインスタンスは、成功と見なされます。BI プラットフォームは、プログラムオブジェクトの内容に応じて問題を監視しているわけではありません。

- ・ オブジェクトパッケージ

オブジェクトパッケージは、そのコンポーネントのどれかが失敗すると、失敗する可能性があります。この設定を変更するには、オブジェクトを選択して、[管理] > [デフォルト設定] をクリックします。[コンポーネントのエラー] をクリックして、[個々のコンポーネントにエラーが発生するとスケジュールされたパッケージが失敗する] オプションを選択解除します。

オブジェクトパッケージに含まれる個々のオブジェクトについても、スケジュールオプションを設定することができます。コンポーネントを選択して、[スケジュール]ダイアログボックスの[コンポーネント]セクションでオプションを設定しても、これを行うことができます。次に、そのコンポーネントの通知、データベースログオン、フィルタ、書式、印刷、パラメータ、サーバグループ、およびアラートの設定をそのコンポーネントに適したものに設定できます。

注

オブジェクトパッケージには監査通知や電子メール通知は設定できませんが、オブジェクトパッケージに含まれる個々のオブジェクトには、任意の種類の通知を設定できます。イベントの発生に合わせてオブジェクトパッケージをスケジュールすることもできます。

関連項目

- ・ 116 ページの[スケジュールベースのイベント](#)

7.1.1.4.2 通知の種類

オブジェクトレベルで通知を設定できます。オブジェクトごとに違った通知オプションを選択し、条件によって異なる種類の通知を送信することができます。オブジェクトパッケージには、イベント通知しか設定できません。イ

イベント通知は、オブジェクトパッケージの成功または失敗に基づいてイベントを発生させます。より一般的な観点からオブジェクトの成功と失敗を監視するには、BI プラットフォームの監査機能を使用します。

通知が失敗すると、オブジェクトインスタンスも失敗します。たとえば、電子メール通知で無効な電子メールアドレスにメッセージが送信されると、通知が失敗し、オブジェクト履歴には、オブジェクトインスタンスの失敗として記録されます。

次に示す通知方法を選択できます。

- ・ 監査通知

監査通知を使用するには、監査データベースを設定し、サーバの監査を有効にする必要があります。監査機能を使用して BI プラットフォームシステムを監視する場合は、監査通知を使用できます。監査データベースの設定と監査機能の有効化の詳細については、SAP ヘルプポータル (<http://help.sap.com>) で入手可能な『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』を参照してください。

監査通知を選択すると、スケジュールされるオブジェクトの情報が監査データベースに書き込まれます。監査データベースに通知を送信するタイミングとして、ジョブが正常に実行されたとき、実行が失敗したとき、その両方のいずれかを選択することができます。

- ・ 電子メール通知

オブジェクトインスタンスの成功または失敗を通知する手段として、電子メールを送信することができます。電子メールメッセージの送信者と受信者を選択することができます。電子メールは、インスタンスが失敗したときと成功したときに送信することができます。たとえば、レポートが失敗したときには管理者に電子メールを送信し、レポートが成功したときにはそれを必要とする人全員に自動的に通知を送信して、レポートが使用できることを知らせることができます。

注

電子メール通知を有効にするには、Job Server で電子メール SMTP の出力先を有効にし、設定が行われている必要があります。詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』を参照してください。

注

スケジュールされたオブジェクトの成功または失敗に関する通知は、アラート通知とは異なります。アラート通知は、レポートの設計に組み込まれている必要があります。たとえば、警告通知を使って、レポート内の特定の値が \$1,000,000 を上回ったときに常に電子メールを送信することができます。このケースでは、通知はレポートの内容に関係なく、単に、レポートオブジェクトのインスタンスが失敗したか成功したかのみを監視します。

7.1.1.4.3 インスタンスの成功または失敗に関する通知を設定する

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、オブジェクトを選択します。
- 2 [アクション] > [スケジュール] をクリックします。
- 3 ナビゲーション一覧で [通知] をクリックします。
- 4 使用したい通知タイプ (複数も可) をクリックします。

すでに使用されている通知タイプには、有効と示されます。そうでない場合は、無効と示されます。

表 7-3: 通知の種類

| 通知の種類 | 説明 |
|-------|---|
| 監査 | <ul style="list-style-type: none"> ・ ジョブの成功時にレコードを監査データベースに送信する場合は、[ジョブの実行の成功]を選択します。 ・ ジョブが失敗したときに、レコードを送信する場合は、[ジョブの実行の失敗]を選択します。 |
| 電子メール | <ul style="list-style-type: none"> ・ ジョブの失敗時または成功時に通知を送信するかどうかを選択します。 ・ 電子メール通知の内容と受信者を指定するには、有効にした通知オプションを展開して[ここで使用する値を設定する]を選択し、[送信者]と[受信者]の電子メールアドレス、電子メールの件名、メッセージを指定します。 <p>注 複数のアドレスまたは配信リストの区切り文字には、セミコロン(;)を使用してください。</p> |

注

デフォルトで、通知はサーバのデフォルトの電子メール宛先に送信されます。

7.1.1.5 出力先の選択

BI プラットフォームでは、出力先がデフォルトの Output FRS (File Repository Server) 以外の場所になるようにオブジェクトやインスタンスを設定できます。オブジェクトの実行時には、必ず出力インスタンスが Output FRS に保存されます。追加の出力先を選択できるようにすると、エンタープライズシステム内またはエンタープライズシステム外の出力先にインスタンスを柔軟に配布することができます。

たとえば、電子メールで他のユーザに出力を自動配布するようにオブジェクトを設定することができます。

注

また、実行後に出力されるようにオブジェクトインスタンスを設定することもできます。

デフォルト以外の出力先を指定すると、BI プラットフォームで出力ファイルの一意の名前が生成されます。ファイル名を生成するために、ID、オブジェクトの名前またはタイトル、所有者情報、日時の情報を組み合わせることができます。

次の出力先を選択できます。

- ・ デフォルトの出力先の場所
- ・ ファイルの場所
- ・ FTP の場所
- ・ 電子メール
- ・ BI 受信ボックス
- ・ SAP StreamWork

注

CMC または BI 起動パッドで、オブジェクトやインスタンスの出力先の設定を変更できます。CMC を使用して出力先の設定を指定すると、指定した設定は BI 起動パッドのデフォルトのスケジュール設定にも反映されます。

関連項目

- ・ 47 ページの[プリンタとページレイアウトオプションの設定](#)
- ・ 81 ページの[出力先をデフォルトに設定する](#)
- ・ 84 ページの[ファイルの場所を出力先に設定する](#)
- ・ 86 ページの[FTP サーバを出力先に設定する](#)
- ・ 82 ページの[オブジェクトを電子メール出力先にスケジュールする](#)
- ・ 81 ページの[オブジェクトを BI 受信ボックス出力先にスケジュールする](#)
- ・ 87 ページの[オブジェクトを StreamWork のワークスペースにスケジュールする](#)
- ・ 88 ページの[Job Server で出力先を有効/無効にする](#)

7.1.1.5.1 出力先をデフォルトに設定する

オブジェクトインスタンスは、デフォルトでは、Output File Repository Server(FRS)に保存されます。FRS だけにインスタンスを保存し、他の出力先には保存しない場合は、このオプションを選択します。

- 1 CMCの[フォルダ]管理エリアで、オブジェクトを選択します。
- 2 [アクション] > [スケジュール] をクリックして、出力先設定を表示します。
たとえば、Crystal レポートまたはオブジェクトパッケージの場合は、[出力先] をクリックします。
- 3 出力先として [デフォルトの Enterprise の場所] を選択します。
たとえば、Crystal レポートまたはオブジェクトパッケージの場合は、[出力先] 一覧から [デフォルトの Enterprise の場所] を選択します。
- 4 他のスケジュールオプションを設定し、[スケジュール] をクリックします。

7.1.1.5.2 オブジェクトを BI 受信ボックス出力先にスケジュールする

オブジェクトをスケジュールするときに、出力先がユーザの BI 受信ボックスとなるようにオブジェクトを設定できます。この場合、インスタンスは、Output File Repository Server および指定した BI 受信ボックスの両方に保存されます。実際のファイルを BI 受信ボックスに送信する代わりに、ショートカットを送信することもできます。

注

出力先を使用するには、Adaptive Job Server で出力先を有効にし、設定を完了しておく必要があります。詳細については、88 ページの[「Job Server で出力先を有効/無効にする」](#)を参照してください。

- 1 CMCの[フォルダ]管理エリアで、オブジェクトを選択します。

- 2 [アクション] > [スケジュール] をクリックして、出力先設定を表示します。
たとえば、Crystal レポートまたはオブジェクトパッケージの場合は、[出力先] をクリックします。
- 3 出力先として [BI 受信ボックス] を選択します。
たとえば、Crystal レポートまたはオブジェクトパッケージの場合は、[出力先] 一覧から [BI 受信ボックス] を選択します。
- 4 Job Server のデフォルト設定を使用するかどうかを選択します。
たとえば、Crystal レポートまたはプログラムオブジェクトの場合は、[デフォルト設定を使用] を選択または選択解除します。
- 5 Job Server のデフォルト設定を使用しない場合は、以下の手順に従います。
 - a ユーザを [利用可能な受信者] 一覧から [選択した受信者] 一覧に移動します。
 - b 自動的に生成されるインスタンス名を使用するのか、特定のインスタンス名を使用するのかを選択します。
 - c インスタンスをショートカットとして送信するのか、コピーとして送信するのかを選択します。
- 6 インスタンスのクリーンアップを有効にするかどうかを選択します。
たとえば、Crystal レポートまたはプログラムオブジェクトの場合は、[履歴にインスタンスを保持する] を選択または選択解除します。

このオプションを選択すると、Output File Repository Server からレポートまたはプログラムインスタンスが自動的に削除され、サーバ上のインスタンスの数が最小に保たれます。
- 7 その他のスケジュールオプションを設定し、[スケジュール] をクリックします。

7.1.1.5.3 オブジェクトを電子メール出力先にスケジュールする

Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) メールサポートを使用して、Crystal レポートのインスタンスや他のオブジェクトのインスタンスを 1 つ以上の電子メール出力先に送信できます。BI プラットフォームから出力インスタンスのコピーが、指定した電子メールアドレスに添付ファイルとして送信されます。

電子メール (SMTP) の出力先を選択すると、BI プラットフォームによってインスタンスが Output FRS に保存されるだけでなく、指定した宛先に電子メールで送信されます。BI プラットフォームは、MIME (Multipurpose Internet Mail Extensions) エンコーディングをサポートしています。

注

- ・ 出力先を使用するには、Adaptive Job Server で出力先を有効にし、設定を完了しておく必要があります。詳細については、88 ページの「[Job Server で出力先を有効/無効にする](#)」を参照してください。
 - ・ Job Server のデフォルト設定は、[サーバ] 管理エリアで変更することができます。詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』を参照してください。
- 1 CMCの[フォルダ]管理エリアで、オブジェクトを選択します。
 - 2 [アクション] > [スケジュール] をクリックして、出力先設定を表示します。
 - 3 [スケジュール] ページで、[出力先] をクリックして出力先の設定を表示します。
 - 4 [出力先] リストで、[電子メール] を出力先として選択します。
 - 5 [デフォルトの設定を使用] チェックボックスをオンまたはオフにして、Job Server のデフォルト設定を使用するかを指定します。

このチェックボックスをオフにすると、次の追加スケジュールオプションを設定する必要があります。

| オプション | 説明 |
|----------------|--|
| 履歴にインスタンスを保持する | このチェックボックスをオンにすると、[履歴] ページでこのインスタンスのコピーを保持します。システムによって Output File Repository Server からレポートプログラムインスタンスが自動的に削除され、サーバ上のインスタンスの数が最小に保たれます。このチェックボックスはデフォルトではオンになっています。 |
| 差出人 | <p>差出人の電子メールアドレスを入力するか、[プレースホルダの追加] リストから電子メールアドレスの変数を選択します。使用可能な変数は、[タイトル]、[ID]、[オーナー]、[日時]、(ユーザの) [電子メールアドレス]、および [ユーザのフルネーム] です変数をクリックして追加します。電子メールアドレスは、セミコロン (;) で区切ります。</p> <p>注 システム設定によっては、このオプションを使用できない場合があります。</p> |
| 宛先 | インスタンスを送信する電子メールアドレスをそれぞれ入力するか、[プレースホルダの追加] リストから電子メールアドレスの変数を選択します。使用可能な変数は、[タイトル]、[ID]、[オーナー]、[日時]、(ユーザの) [電子メールアドレス]、および [ユーザのフルネーム] です変数をクリックして追加します。電子メールアドレスは、セミコロン (;) で区切ります。 |
| CC | インスタンスのコピーを送信する電子メールアドレスをそれぞれ入力するか、[プレースホルダの追加] リストから電子メールアドレスの変数を選択します。使用可能な変数は、[タイトル]、[ID]、[オーナー]、[日時]、(ユーザの) [電子メールアドレス]、および [ユーザのフルネーム] です変数をクリックして追加します。電子メールアドレスは、セミコロン (;) で区切ります。 |
| BCC | 非公開受信者の電子メールアドレスをそれぞれ入力するか、[プレースホルダの追加] リストから電子メールアドレスの変数を選択します。使用可能な変数は、[タイトル]、[ID]、[オーナー]、[日時]、(ユーザの) [電子メールアドレス]、および [ユーザのフルネーム] です変数をクリックして追加します。電子メールアドレスは、セミコロン (;) で区切ります。 |
| 件名 | 電子メールの件名を入力するか、[プレースホルダの追加] リストから件名の変数を選択します。使用可能な変数は、[タイトル]、[ID]、[オーナー]、[日時]、(ユーザの) [電子メールアドレス]、および [ユーザのフルネーム] です変数をクリックして追加します。 |

| オプション | 説明 |
|----------------------|--|
| メッセージ | 電子メール本文のメッセージを入力するか、[プレースホルダの追加] リストからメッセージの変数を選択します。使用可能な変数は、[タイトル]、[ID]、[オーナー]、[日時]、(ユーザの) [電子メールアドレス]、[ユーザのフルネーム]、[ビューア]、および [ドキュメント名] です。変数をクリックして追加します。 |
| [添付ファイルの追加] チェックボックス | インスタンスを含む電子メールに添付ファイルを追加する場合は、このチェックボックスをオンにします。 |
| ファイル名 | <ul style="list-style-type: none"> 自動的に生成される名前をインスタンスのファイル名に使用する場合は、[自動で生成された名前を使用する] を選択します。 インスタンスのファイル名を選択するには、[指定の名前を使用する] を選択し、名前を入力するか、[プレースホルダの追加] リストからファイル名の変数を選択します。使用可能な変数は、[タイトル]、[ID]、[オーナー]、[日時]、(ユーザの) [電子メールアドレス]、[ユーザのフルネーム]、および [ファイル拡張子] です。 <p>インスタンスファイル名に自動的にファイル拡張子を追加する場合は、[ファイル拡張子を追加する] チェックボックスを選択します。ファイル拡張子を追加しない場合は、ドキュメントを開くことができません。</p> |

6 必要に応じて他のスケジュールオプションを設定し、[スケジュール] をクリックします。

7.1.1.5.4 ファイルの場所を出力先に設定する

オブジェクトをスケジュールするときに、出力先がアンマネージドディスクになるようにオブジェクトを設定できます。この場合、出力インスタンスは、Output File Repository Server および指定した出力先に保存されます。

オブジェクトが Web Intelligence ドキュメントまたはオブジェクトパッケージの場合は、出力先としてアンマネージドディスクを指定できません。ただし、オブジェクトパッケージの場合は、オブジェクトパッケージ内の個々のオブジェクトの出力先をアンマネージドディスクに設定することができます。

注

- 出力先を使用するには、Adaptive Job Server で出力先を有効にし、設定を完了しておく必要があります。詳細については、88 ページの「[Job Server で出力先を有効/無効にする](#)」を参照してください。
 - この場所は、処理サーバ上のローカルディレクトリである必要があります。Windows を使用しているサーバでは、保存場所として Universal Naming Convention(UNC)パスまたはローカルディレクトリを指定できます。
 - 処理サーバには、指定の出力先に対する十分なアクセス権が必要です。
- CMC の [フォルダ] 管理エリアで、オブジェクトを選択します。
 - [アクション] > [スケジュール] をクリックして、出力先設定を表示します。
たとえば、Crystal レポートまたはオブジェクトパッケージの場合は、[出力先] をクリックします。

- 3 出力先としてファイルの場所を選択します。

たとえば、Crystal レポートまたはオブジェクトパッケージの場合は、[出力先] 一覧から [ファイルシステム] を選択します。

- 4 Job Server のデフォルト設定を使用するかどうかを選択します。

たとえば、Crystal レポートまたはプログラムオブジェクトの場合は、[デフォルト設定を使用] を選択または選択解除します。

デフォルト設定を使用しない場合は、スケジュール時に使用する追加の設定をいくつか設定する必要があります。以下の表に、これらの設定を示します。

| 設定 | 説明 |
|--------|--|
| ディレクトリ | ローカルの場所、マップされた場所、または UNC パスを入力します。 |
| ファイル名 | <ul style="list-style-type: none"> ファイル名が自動的に生成されるようにするには、[自動で生成された名前を使用する] を選択します。 ファイル名を選択するには、[指定の名前を使用する] を選択して、使用する名前を入力します。Web Intelligence ドキュメントの場合は、ファイル名にプレースホルダを含めることも、[ファイル拡張子を追加する] を選択して名前にファイル拡張子を含めることもできます。 |
| ユーザ名 | 出力先ディレクトリにファイルを書き込む権限を持つユーザを指定します。 |
| パスワード | ユーザのパスワードを入力します。 |

注

- Windows サーバにだけ、ユーザ名とパスワードを指定することができます。
- CMC の[サーバ]管理エリアで、デフォルトの Job Server の設定を変更できます。詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』を参照してください。

- 5 インスタンスのクリーンアップを有効にするかどうかを選択します。

たとえば、Crystal レポートまたはプログラムオブジェクトの場合は、[履歴にインスタンスを保持する] を選択または選択解除します。

インスタンスクリーンアップを有効にすると、Output File Repository Server からレポートまたはプログラムインスタンスが自動的に削除され、サーバ上のインスタンスの数が最小に保たれます。

注

これらのインスタンスはイベントの監査に必要です。したがって、スケジュールされたオブジェクトに対して監査が有効になった場合には、この設定は破棄されます。

- 6 必要に応じて他のスケジュールオプションを設定し、[スケジュール] をクリックします。

7.1.1.5.5 FTP サーバを出力先に設定する

オブジェクトをスケジュールするときに、オブジェクトの出力先を FTP(File Transfer Protocol)サーバに設定できます。FTP サーバに接続するには、FTP サーバにファイルをアップロードできるアクセス権を持つユーザを指定する必要があります。FTP の出力先を指定する場合、出力インスタンスは、システムにより Output FRS および指定した出力先に保存されます。

注

出力先を使用するには、Adaptive Job Server で出力先を有効にし、設定を完了しておく必要があります。詳細については、88 ページの「[Job Server で出力先を有効/無効にする](#)」を参照してください。

- CMC の [フォルダ] 管理エリアで、オブジェクトを選択します。
- [アクション] > [スケジュール] をクリックし、以下のいずれかを実行して出力先設定を表示します。
たとえば、Crystal レポートまたはオブジェクトパッケージの場合は、[出力先] をクリックします。
- 出力先として[FTP サーバ]を選択します。
たとえば、Crystal レポートまたはオブジェクトパッケージの場合は、[出力先] 一覧から [FTP サーバ] を選択します。
- Job Server のデフォルト設定を使用するかどうかを選択します。
たとえば、Crystal レポートまたはプログラムオブジェクトの場合は、[デフォルト設定を使用] を選択または選択解除します。

デフォルトの使用を選択すると、BI プラットフォームでは、Job Server のデフォルト設定を使用してオブジェクトがスケジュールされます。これらの設定は、[サーバ] 管理エリアで変更することができます。詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』を参照してください。

デフォルト設定を使用しない場合は、スケジュール時に使用する追加の設定をいくつか設定する必要があります。以下の表に、これらの設定を示します。

| 設定 | 説明 |
|-------|--|
| ホスト | FTP ホストの情報を入力します。 |
| ポート | FTP のポート番号を入力します。デフォルトは 21 です。 |
| ユーザ名 | オブジェクトを FTP サーバにアップロードするアクセス権を持つユーザを指定します。 |
| パスワード | ユーザのパスワードを入力します。 |

| 設定 | 説明 |
|--------|--|
| アカウント | <p>必要に応じて、FTP アカウント情報を入力します。</p> <p>アカウントは標準の FTP プロトコルの一部ですが、実装されている場合はまれです。FTP サーバが要求する場合のみ、適切なアカウントを指定します。</p> |
| ディレクトリ | <p>オブジェクトを保存する FTP ディレクトリを入力します。変数を追加するには、一覧から変数プロパティのプレースホルダを選択します。</p> |
| ファイル名 | <ul style="list-style-type: none"> ファイル名が自動的に生成されるようにするには、[自動で生成された名前を使用する] を選択します。 ファイル名を選択するには、[指定の名前を使用する] を選択して、使用する名前を入力します。Web Intelligence ドキュメントの場合は、ファイル名にプレースホルダを含めることも、[ファイル拡張子を追加する] を選択して名前にファイル拡張子を含めることもできます。 |

- 5 インスタンスのクリーンアップを有効にするかどうかを選択します。
たとえば、Crystal レポートまたはプログラムオブジェクトの場合は、[履歴にインスタンスを保持する] を選択または選択解除します。

インスタンスクリーンアップを有効にすると、Output File Repository Server からレポートまたはプログラムインスタンスが自動的に削除され、サーバ上のインスタンスの数が最小に保たれます。
- 6 その他のスケジュールオプションを設定し、[スケジュール] をクリックします。

7.1.1.5.6 オブジェクトを StreamWork のワークスペースにスケジュールする

StreamWork にオブジェクトをスケジュールするには、有効な StreamWork のアカウントが必要です。

注

出力先を使用するには、Adaptive Job Server で出力先を有効にし、設定を完了しておく必要があります。詳細については、88 ページの「[Job Server で出力先を有効/無効にする](#)」を参照してください。

- 1 CMCの[フォルダ]管理エリアで、オブジェクトを選択します。
- 2 [アクション] > [スケジュール] をクリックして、出力先設定を表示します。
たとえば、Crystal レポートまたはオブジェクトパッケージの場合は、[出力先] をクリックします。
- 3 出力先として [SAP StreamWork] を選択します。
たとえば、Crystal レポートまたはオブジェクトパッケージの場合は、[出力先] 一覧から [SAP Stream Work] を選択します。

注

StreamWork アカウントをユーザ名に関連付けていない場合は、StreamWork での認証が求められます。

- 4 使用する StreamWork 設定を更新します。

| 設定 | 説明 |
|---------------|--|
| 出力先の選択 | StreamWork でレポートの出力先を設定します。これは既存または新しいアクティビティになります。最初の 2 つのドロップダウンフィールドで、アクティビティをワークリストでフィルタリングできます。 |
| アクティビティ名 | オブジェクトを新しいアクティビティに公開する場合に使用する名前を入力します。 |
| アクティビティの目的 | アクティビティの説明を入力し、参加者が目的を理解できるようにします。 |
| アイテムの説明 | オブジェクトの説明を入力し、StreamWork 参加者がオブジェクトの内容および使用方法を理解できるようにします。 |
| アクティビティの種類の選択 | 適切な StreamWork のアクティビティの種類を選択します。 |
| 参加者の追加 | StreamWork アクティビティを新規作成する場合、追加する参加者の StreamWork ID を入力します。 |

たとえば、Crystal レポートまたはプログラムオブジェクトの場合は、[デフォルト設定を使用] を選択または選択解除します。

- 5 インスタンスのクリーンアップを有効にするかどうかを選択します。

たとえば、Crystal レポートまたはプログラムオブジェクトの場合は、[履歴にインスタンスを保持する] を選択または選択解除します。

このオプションを選択すると、Output File Repository Server からレポートまたはプログラムインスタンスが自動的に削除され、サーバ上のインスタンスの数が最小に保たれます。

- 6 その他のスケジュールオプションを設定し、[スケジュール]をクリックします。

7.1.1.5.7 Job Server で出力先を有効/無効にする

デフォルトでは、スケジュールされたレポートまたはプログラムオブジェクトの実行時に、作成された出力インスタンスが Output File Repository Server (FRS) に保存されます。ただし、別の出力先を指定することもできます。別の出力先を指定した場合、出力インスタンスは Output FRS と指定した出力先に 1 つずつ保存されます。また、[送信] コマンドを使用するときに出力先を指定して、既存のオブジェクトを指定した出力先に送信することもできます。

デフォルト以外の出力先でシステムを機能させるためには、送信先の出力先を、すべての Adaptive Job Server で有効にし、設定する必要があります。

たとえば、レポートインスタンスをスケジュールしたり、電子メールで送信したりするには、Adaptive Job Server で電子メール (SMTP) 出力先を有効にし、設定する必要があります。

注

Adaptive Job Server では、デフォルトで BI 受信ボックスの出力先が有効化され、設定されています。これにより、[送信] コマンドを使用してレポートおよびドキュメントを配信できます。また、Adaptive Job Server に出力先を追加して設定できます。

- 1 CMC の[サーバ]管理エリアを表示します。
- 2 出力先を有効または無効にする Adaptive Job Server を選択します。

- 3 [管理]メニューの[プロパティ]を選択します。
- 4 [プロパティ]ダイアログボックスのナビゲーションリストで、[出力先]をクリックします。
- 5 出力先を有効にするには、[出力先]一覧で出力先を選択し、[追加]をクリックします。

注

出力先を有効にした場合は、出力先を設定する必要もあります。

- 6 出力先を無効にするには、[出力先]一覧で出力先を選択し、[削除]をクリックします。
- 7 [保存] または [保存して閉じる] をクリックします。

7.1.1.6 アラート通知の指定

注

この機能は Web Intelligence ドキュメントには適用されません。

アラートは SAP Crystal Reports で作成されるカスタムメッセージです。レポートデータが特定の条件を満たすと表示されます。警告は、ユーザが取るべき対処方法やレポートデータに関する情報を示します。このアラート条件 (SAP Crystal Reports で定義) が True の場合、アラートが発生し、メッセージが表示されます。

BI プラットフォームでは、レポートのスケジュール作成時にアラート通知を送信させる選択が可能です。アラート通知を有効にすると、SMTP サーバからメッセージが送信されます。さらに、電子メールの配信オプションの設定、電子メールの宛先フィールド、CC フィールド、差出人フィールドの指定、件名とメッセージ情報の追加、電子メールの受信者に使用させたいビューアの URL の設定、送信するアラートレコードの最大数の設定が可能です。

注

- ・ [アラート通知] リンクは、レポートオブジェクトにアラートがある場合のみ使用できます。
- ・ アラート通知を無効にしても、レポートオブジェクト内ではアラートが発生します。
- ・ アラート通知を有効にするには、Job Server で電子メール SMTP の出力先を有効にし、設定を完了しておく必要があります。詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』を参照してください。
- ・ アラート通知は、アラートとは別のものです。

関連項目

- ・ 123 ページの[アラートと Crystal レポートアラート通知の相違点](#)

7.1.1.6.1 アラート通知を設定する

- 1 CMCの[フォルダ]管理エリアで、レポートオブジェクトを選択します。
- 2 [アクション] > [スケジュール]をクリックします。
- 3 ナビゲーション一覧で[アラート通知]をクリックします。
- 4 警告通知を送信する場合は[アラート通知を有効にする]チェックボックスをオンにします。
- 5 [デフォルト設定を使用]と[カスタム設定]のどちらかを選択します。

前者のオプションを選択すると、BI プラットフォームでは Job Server のデフォルト設定に基づいてアラート通知が配信されます。これらの設定は、[サーバ] 管理エリアで変更することができます。詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』を参照してください。

後者のオプションを選択すると、ソフトウェアで電子メールの設定を指定できます。

- 6 電子メールの受信者がレポートを表示するために使用するビューアの URL を入力するか、[デフォルトを使用] をクリックしてデフォルトのビューアを選択します。

アラート通知電子メールで送信されるハイパーリンクに、ビューア URL が表示されます。デフォルトの URL を設定するには、CMC の [アプリケーション] 管理エリアで CMC アプリケーションを選択し、[アクション] > [処理設定] を選択します。

注

ビューア URL を入力するときは、W3C(World Wide Web Consortium)URL エンコーディングを使用する必要があります。たとえば、パス内のスペースを %20 に置き換えます。詳細については、<http://www.w3.org/> を参照してください。

- 7 アラート通知に組み込むアラートレコードの最大数を入力します。

アラートを発生させたレコードを含むレポートページが、アラート通知のハイパーリンクに表示されます。このフィールドでは表示されるレコードの最大数を指定できます。

ヒント

[アラート名] 情報と [ステータス] 情報は、SAP Crystal Reports で定義します。

- 8 スケジュールオプションをすべて設定したら、[スケジュール] をクリックします。

7.1.1.7 形式の選択

ドキュメントまたはレポートインスタンスの生成時に使用する保存形式を選択できます。この形式は、選択した出力先に保存されます。形式は、次の表から選択できます。

表 7-6: インスタンスの形式

| 製品 | 形式 | 説明 |
|---|--|----|
| SAP BusinessObjects Web Intelligence | <ul style="list-style-type: none"> ・ Web Intelligence ドキュメント ・ Microsoft Excel ・ Adobe Acrobat ・ カンマ区切り(CSV) | |

| 製品 | 形式 | 説明 |
|---------------------|---|--|
| SAP Crystal Reports | <ul style="list-style-type: none"> ・ SAP Crystal Reports ・ SAP Crystal Reports 読み取り専用 (RPTR) ・ Microsoft Excel(97-2003) ・ Microsoft Excel(97-2003)(データのみ) ・ Microsoft Excel ワークブックデータのみ ・ Microsoft Word(97-2003) ・ PDF ・ リッチテキスト形式(RTF) ・ Microsoft Word - 編集可能(RTF) ・ テキスト ・ ページ区切り付きテキスト ・ タブ区切りテキスト(TTX) ・ カンマ区切り値(CSV) ・ XML | <ul style="list-style-type: none"> ・ SAP Crystal Reports では、標準の編集可能レポートが生成されます。また、RPTR オプションによって、読み取り専用の Crystal レポートが生成されます。 ・ Excel と Excel(データのみ)の違いは、Excel はレポートのオリジナルの外観を保持し、Excel(データのみ)はデータのみを保持する点です。各セルがフィールドを表します。 ・ タブ区切り値形式では、値の間にタブ文字が挿入されます。区切り値形式では、値の間に指定した文字が挿入されます。 ・ スケジュール時にレポートの印刷を選択すると、レポートインスタンスが SAP Crystal Reports 形式で自動的にプリンタに送信されます。この書式が、レポートをスケジュールする際に選択した書式と競合することはありません。 ・ Excel、ページ区切り付きテキスト、タブ区切りテキスト、カンマ区切り値の場合は、レポートに特定の書式設定プロパティを指定します。たとえば、CSV オプションを選択した場合は、区切り文字および区切り記号を入力します。 |

関連項目

- ・ 80 ページの[出力先の選択](#)

7.1.1.7.1 形式を選択する

- 1 CMCの [フォルダ] 管理エリアで、レポートオブジェクトを選択します。
- 2 [アクション] > [スケジュール] をクリックして、形式設定を表示します。
たとえば、Crystal レポートの場合は、[形式] をクリックします。
- 3 適切な形式を選択します。
たとえば、Crystal レポートの場合は、[形式] 一覧から形式を選択します。
- 4 その他のスケジュールオプションを設定し、[スケジュール]をクリックします。

関連項目

- ・ 92 ページの[Crystal レポートの追加の書式設定オプション](#)

7.1.1.7.2 Crystal レポートの追加の書式設定オプション

Crystal レポートをいくつかの形式にスケジュールする場合、追加のオプションの設定が必要になる場合があります。次の表に、各形式の追加オプションについて説明します。

表 7-7: Microsoft Excel(97-2003)

| オプション | 説明 |
|--------------------------|---|
| ページ範囲 | <ul style="list-style-type: none"> すべてのページをレポートに含めるには、[すべて] を選択します。 ページ範囲を含めるには、[ページ] の [開始] をクリックして最初に含めるページを入力し、[終了] ボックスに最後に含めるページを入力します。 |
| レポートで指定されたエクスポートオプションを使用 | レポートで指定されたエクスポートオプションを使用する場合にクリックします。他の書式設定オプションは設定できません。 |
| 列幅の設定 | <ul style="list-style-type: none"> レポート内のオブジェクトに基づいて Excel 列の幅を設定するには、[列幅を次のオブジェクトに合わせる] をクリックし、列幅を取得するレポート領域を選択します。 一定の列幅を設定するには、[列幅を一定にする (ポイント単位)] をクリックし、幅を入力します。 |
| ページヘッダとページフッタをエクスポートする | <ul style="list-style-type: none"> インスタンスにページヘッダとページフッタを印刷する方法を指定するには、[レポートごとに 1 回] または [各ページ] をクリックします。 インスタンスからページヘッダおよびページフッタを除外するには、[なし] をクリックします。 |
| ページごとにページ区切りを作成 | レポート内の各ページの後にページ区切りを作成する場合にクリックします |
| 日付の値を文字列に変換する | レポート内の日付値をテキスト文字列としてエクスポートする場合にクリックします |
| グリッドラインの表示 | エクスポートしたドキュメントにグリッドラインを表示する場合にクリックします |

表 7-8: Microsoft Excel (97-2003, 2007) (データのみ) および Microsoft Excel ブック (データのみ)

| オプション | 説明 |
|--------------------------|---|
| レポートで指定されたエクスポートオプションを使用 | レポートで指定されたエクスポートオプションを使用する場合にクリックします。他の書式設定オプションは設定できません。 |
| 列幅の設定 | <ul style="list-style-type: none"> レポート内のオブジェクトに基づいて Excel 列の幅を設定するには、[列幅を次のオブジェクトに合わせる] をクリックし、列幅を取得するレポート領域を選択します。 一定の列幅を設定するには、[列幅を一定にする (ポイント単位)] をクリックし、幅を入力します。 |
| オブジェクトの書式設定をエクスポートする | オブジェクトの書式設定を維持する場合にクリックします |
| 画像をエクスポートする | レポート内の画像をエクスポートする場合にクリックします |
| 集計にワークシートの関数を使用する | レポートで集計を使用して Excel でワークシート関数を作成する場合にクリックします |
| オブジェクトの相対位置を維持する | 別のオブジェクトとの相対的なオブジェクトの位置を維持する場合にクリックします |
| 列の配置を維持する | レポートの列内のテキスト配置を維持する場合にクリックします |
| ページヘッダとページフッタをエクスポートする | インスタンスにヘッダおよびフッタを含める場合 to クリックします |
| ページヘッダを簡略化する | ページヘッダを簡略化する場合にクリックします |
| グループのアウトラインを表示する | グループのアウトラインを表示する場合にクリックします |

表 7-9: Microsoft Word(97-2003)

| オプション | 説明 |
|-------|--|
| ページ範囲 | <ul style="list-style-type: none"> すべてのページをレポートに含めるには、[すべて] を選択します。 ページ範囲を含めるには、[ページ] の [開始] をクリックして最初を含めるページを入力し、[終了] ボックスに最後を含めるページを入力します。 |

表 7-10: PDF

| オプション | 説明 |
|--------------------------|--|
| ページ範囲 | <ul style="list-style-type: none"> すべてのページをレポートに含めるには、[すべて] を選択します。 ページ範囲を含めるには、[開始] をクリックして最初を含めるページを入力し、[終了] ボックスに最後を含めるページを入力します。 |
| レポートで指定されたエクスポートオプションを使用 | レポートで指定されたエクスポートオプションを使用する場合にクリックします。他の書式設定オプションは設定できません。 |
| グループツリーからブックマークを作成 | レポートのツリー構造に基づいて PDF ファイルにブックマークを作成する場合にクリックします。これにより、レポート内での移動が簡単になります。 |

表 7-11: リッチテキスト形式(RTF)

| オプション | 説明 |
|-------|--|
| ページ範囲 | <ul style="list-style-type: none"> すべてのページをレポートに含めるには、[すべて] を選択します。 ページ範囲を含めるには、[ページ] の [開始] をクリックして最初を含めるページを入力し、[終了] ボックスに最後を含めるページを入力します。 |

表 7-12: Microsoft Word – 編集可能(RTF)

| オプション | 説明 |
|-------|--|
| ページ範囲 | <ul style="list-style-type: none"> すべてのページをレポートに含めるには、[すべて] を選択します。 ページ範囲を含めるには、[開始] をクリックして最初を含めるページを入力し、[終了] ボックスに最後を含めるページを入力します。 |

| オプション | 説明 |
|--------------------------|---|
| レポートで指定されたエクスポートオプションを使用 | レポートで指定されたエクスポートオプションを使用する場合にクリックします。他の書式設定オプションは設定できません。 |
| レポートのページごとに改ページする | レポートの各ページの後にページ区切りを挿入する場合にクリックします。 |

表 7-13: テキスト

| オプション | 説明 |
|--------------------------|---|
| レポートで指定されたエクスポートオプションを使用 | レポートで指定されたエクスポートオプションを使用する場合にクリックします。他の書式設定オプションは設定できません。 |
| インチあたりの文字数 | インチあたりに含める文字数として 8 ～ 16 の値を入力します。この設定では、テキストファイルの表示方法と書式設定方法を指定します。 |

表 7-14: ページ区切り付きテキスト

| オプション | 説明 |
|--------------------------|---|
| レポートで指定されたエクスポートオプションを使用 | レポートで指定されたエクスポートオプションを使用する場合にクリックします。他の書式設定オプションは設定できません。 |
| 1 ページあたりの行数 | ページ区切り間に含めるテキストの行数を入力します。 |
| インチあたりの文字数 | インチあたりに含める文字数として 8 ～ 16 の値を入力します。この設定では、テキストファイルの表示方法と書式設定方法を指定します。 |

表 7-15: カンマ区切り値(CSV)

| オプション | 説明 |
|--------------------------|--|
| レポートで指定されたエクスポートオプションを使用 | レポートで指定されたエクスポートオプションを使用する場合にクリックします。他の書式設定オプションは設定できません。 |
| 区切り文字 | 区切り文字として使用する文字を入力します。 |
| 区切り文字 | 値を区切るために使用する文字を入力するか、[タブ] をクリックします。 |
| モード | [標準] モードか [レガシー] モードをクリックします。[標準] モードでは、インスタンスに含めるレポートセクション、ページセクション、およびグループセクションを選択できます。[レガシー] モードでは、レポートセクション、ページセクション、およびグループセクションのオプションを設定できません。 |
| レポートセクションとページセクション | [標準] モードを選択した場合、レポートセクションとページセクションをエクスポートするかどうかを指定します。エクスポートする場合は、セクションを切り離すかどうかを指定します。 |
| グループセクション | [標準] モードを選択した場合、グループセクションをエクスポートするかどうかを指定します。エクスポートする場合は、セクションを切り離すかどうかを指定します。 |

表 7-16: XML

| オプション | 説明 |
|--------------------------|---|
| レポートで指定されたエクスポートオプションを使用 | レポートで指定されたエクスポートオプションを使用する場合にクリックします。他の書式設定オプションは設定できません。 |
| XML エクスポート形式 | XML エクスポート形式を選択します。 |

7.1.1.8 Web Intelligence ドキュメントのキャッシュ形式を選択する

スケジュールされた Web Intelligence ドキュメントをシステムが実行する際には、生成されたインスタンスが Output File Repository Server に保存されます。また、ドキュメントのキャッシュ形式を選択することにより、適切な Report Server にレポートをキャッシュすることができます。キャッシュ形式を選択しない場合には、ドキュメントの実行時にそのキャッシュは保存されません。

注

キャッシュオプションを選択するには、そのオブジェクトの出力形式として Web Intelligence ドキュメントを指定する必要があります。これ以外の形式を選択した場合には、指定したキャッシュオプションが無効になります。

- 1 CMC の[フォルダ]管理エリアで、Web Intelligence ドキュメントオブジェクトを選択します。
- 2 [アクション] > [スケジュール]をクリックし、[キャッシュ]をクリックします。
- 3 キャッシュを事前ロードする際に使用する形式を選択します。

以下のオプションがあります。

- ・ Microsoft Excel
- ・ 標準 HTML
- ・ Adobe Acrobat

- 4 キャッシュを事前ロードする際に使用するロケールを選択します。

Web Intelligence ドキュメントをスケジュールする場合は、BI プラットフォームは指定したロケールにキャッシュされたバージョンのドキュメントを生成します。

- 5 その他のスケジュールオプションを設定し、[スケジュール] をクリックします。

7.1.1.9 オブジェクトのイベント発生時のスケジュールの設定

イベント発生に合わせてオブジェクトをスケジュールすると、追加条件(イベント)が発生したときのみオブジェクトが実行されます。以下のイベントタイプのいずれかが発生するまで、オブジェクトの待機をスケジュールできません。

- ・ ファイルベース: 特定のファイルが存在する場合に発生します。
- ・ カスタム: マニュアルで発生させます。
- ・ スケジュールベース: 実行中の他のオブジェクトによって発生します。

スケジュールされたオブジェクトによってイベントを発生させるには場合は、スケジュールベースのイベントを選択する必要があります。

イベントの発生に基づくオブジェクトのスケジュール

特定のイベントが発生するまで待機するようにオブジェクトをスケジュールすると、そのイベントが生成され、他のすべてのスケジュール条件が満たされたときのみオブジェクトは実行されます。オブジェクトの開始日時より前にイベントが発生した場合、オブジェクトは実行されません。オブジェクトの終了日時を指定して、その終了日時より前にイベントが発生しなかった場合は、すべての条件が満たされないためオブジェクトは実行されません。週単位、月単位、またはカレンダースケジュールを選択すると、オブジェクトの処理を行える特定の時間枠が設定されます。オブジェクトが実行されるためには、イベントが指定時間内に発生する必要があります。たとえば、毎週火曜日に実行する週単位レポートオブジェクトをスケジュールした場合、イベントはそのインスタンスの日付が終わるまで(この例では火曜日)に発生する必要があります。

イベントを発生させるオブジェクトのスケジュール

オブジェクトの実行完了時にスケジュールベースのイベントを発生させるオブジェクトをスケジュールすることもできます。オブジェクトが実行されると、BI プラットフォームは指定のイベントを発生させます。スケジュールベースのイベントが成功したインスタンスに基づく場合、たとえば、インスタンスが失敗するとイベントは発生しません。

注

イベント発生に合わせてオブジェクトをスケジュールするには、最初にイベントを作成しておく必要があります。

関連項目

- ・ 31 ページの[一般的なオブジェクトの管理](#)
- ・ 97 ページの[オブジェクトのイベント発生時のスケジュールの設定](#)

7.1.1.9.1 イベントの発生に基づいてオブジェクトの実行をスケジュールする

このタスクは、イベントの発生後にスケジュールされたジョブを実行する場合に実行します。

- 1 CMCの[フォルダ]管理エリアで、オブジェクトを選択します。
- 2 [アクション] > [スケジュール]をクリックします。
- 3 ナビゲーション一覧の[繰り返し]をクリックして、[オブジェクトの実行] 一覧からオプションを選択します。
- 4 オブジェクトのスケジュールパラメータ (開始日、終了日など) を設定します。
- 5 [イベント]をクリックして[使用できるイベント]から選択し、[>]をクリックしてそのイベント(複数可)を[待機するイベント]に追加します。

ヒント

使用可能なイベントをすべて追加する場合は、[>>]をクリックします。

- 6 オブジェクトをスケジュールするには[スケジュール]をクリックします。

関連項目

- ・ 75 ページの[定期パターンオプション](#)
- ・ 76 ページの[実行オプションとパラメータ](#)
- ・ 98 ページの[イベントの発生に基づいてオブジェクトの実行をスケジュールする](#)

7.1.1.9.2 イベントを発生させるオブジェクトをスケジュールする

このタスクは、スケジュールしたジョブによってジョブの実行時にイベントを発生させる場合に実行します。

- 1 CMCの[フォルダ]管理エリアで、オブジェクトを選択します。
- 2 [アクション] > [スケジュール]をクリックします。
- 3 ナビゲーション一覧の[繰り返し]をクリックして、[オブジェクトの実行] 一覧から実行オプションを選択します。
- 4 オブジェクトのスケジュールパラメータ (開始日、終了日など) を設定します。
- 5 [利用可能なスケジュールイベント] の一覧から選択し、[>] をクリックして [完了時に発生させるイベント] の一覧に追加します。

注

このリストでは、スケジュールベースのイベントのみを選択できます。

ヒント

使用可能なイベントをすべて追加する場合は、[>>]をクリックします。

- 6 オブジェクトをスケジュールするには[スケジュール]をクリックします。

関連項目

- ・ 75 ページの[定期パターンオプション](#)」
- ・ 116 ページの[スケジュールベースのイベント](#)」

7.1.1.10 ジョブのスケジュールに使用するサーバを選択する

スケジュールを実行する特定のサーバを指定できます。これによって、負荷分散を詳細に制御できます。たとえば、指定したサーバグループでプログラムジョブを実行して、そのジョブがシステムリソースを独占しないようにすることができます。

また、ユーザが Crystal レポートまたは Web Intelligence ドキュメントのインスタンスを表示しながら最新表示するときに BI プラットフォームで使用するサーバグループを選択することもできます。これらの設定は、[管理] > [デフォルト設定] をクリックすると表示されます。Crystal レポートの場合は、[サーバグループの表示] をクリックします。Web Intelligence ドキュメントの場合は、[Web Intelligence 処理設定] をクリックします。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、スケジュールするオブジェクトを選択します。
- 2 [アクション] > [スケジュール] をクリックします。
- 3 ナビゲーション一覧で [スケジューリングサーバグループ] をクリックします。
- 4 適切なオプションを選択します。
 - ・ [最初に見つかった利用可能なサーバを使用する] を選択すると、サーバグループに関係なく、できるだけ速やかにオブジェクトを実行します。
 - ・ 複数のサーバグループを利用できる場合に特定のサーバグループを使用する場合は、[選択したグループに所属するサーバを優先して使用する] を選択します。
 - ・ [選択したグループに所属するサーバだけを使用する] を選択すると、必ず指定されたサーバグループでジョブが実行されます。

注

プログラムスケジュールサービスをホストする Adaptive Job Server 上にローカルで保存されたファイルにアクセスする必要があるプログラムオブジェクトをスケジュールする際、Adaptive Job Server が複数存在する場合は、プログラムを実行するサーバを指定する必要があります。

- 5 オブジェクトが存在する場所で実行する場合は、[元のサイトで実行] を選択または選択解除します。
- 6 その他のスケジュールオプションを設定し、[スケジュール] をクリックします。

7.1.1.11 レポートインスタンスの言語を選択する

注

このタスクは、SAP Crystal Reports のみに適用されます。

このタスクは、レポートインスタンスを異なる言語で生成する場合に実行します。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、スケジュールするオブジェクトを選択します。
- 2 [アクション] > [スケジュール] をクリックします。
- 3 ナビゲーション一覧で [言語] をクリックします。
- 4 以下の言語オプションからいずれかを選択します。
 - ・ 優先表示ロケールでレポートをスケジュール

このオプションを選択すると、基本設定で設定した優先表示ロケールに従ってレポートがスケジュールされ、そのロケールだけを使用してインスタンスが生成されます。

- ・ 複数のロケールでレポートをスケジュール

このオプションを選択すると、レポートが複数の言語でスケジュールされます。このオプションを選択した場合は、ロケールの選択も必要になります。このためには、[すべてのロケール] 一覧から [選択インスタンスロケール] 一覧にロケールを移動します。

- 5 必要に応じて他のスケジュールパラメータを設定し、[スケジュール] をクリックします。

7.1.2 オブジェクトを直ちに実行する

スケジュールする代わりに、[今すぐ実行] を使用すると、CMC の [フォルダ] 管理エリアからオブジェクトを一度に実行できます。オブジェクトをすぐに実行すると、オブジェクトはデフォルトのスケジュール設定を使用して直ちに実行されます。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアを表示します。
- 2 実行するオブジェクトを探して選択します。
- 3 [アクション] > [今すぐ実行] をクリックします。

7.1.3 オブジェクトパッケージによるオブジェクトのスケジュール

オブジェクトパッケージ機能を使用すると、オブジェクトをバッチでスケジュールすることができます。オブジェクトパッケージは、BI プラットフォームの独立したオブジェクトです。レポートオブジェクト、プログラムオブジェクト、および Web Intelligence ドキュメントなどのスケジュール可能なオブジェクトを自由に組み合わせてこれに

含めることができます。オブジェクトパッケージを使用することで認証処理が簡便になり、ユーザは異なるオブジェクトのインスタンス間で同期されたデータを表示することができます。

オブジェクトパッケージを使用してオブジェクトをスケジュールするには、最初にオブジェクトパッケージを作成します。次に、既存のオブジェクトをオブジェクトパッケージにコピーします。最後に、任意のオブジェクトと同様に、そのオブジェクトパッケージをスケジュールします。

注

オブジェクトパッケージに含まれている各コンポーネントの処理情報は、個別に設定する必要があります。たとえば、スケジュール時にオブジェクトパッケージ内のレポートオブジェクトを印刷する場合は、[スケジュール]ダイアログボックスの [コンポーネント] をクリックし、印刷するコンポーネントのタイトルをクリックして、オブジェクトの印刷を設定する必要があります。次にそのコンポーネントの[出力設定]を展開して、コンポーネント自体についてスケジュールするときと同様に印刷を設定します。

関連項目

- ・ 68 ページの [オブジェクトパッケージ管理](#)
- ・ 70 ページの [オブジェクトパッケージとオブジェクトの設定](#)
- ・ 51 ページの [ハイパーリンクを使用したレポートでの作業](#)

7.2 インスタンスの管理

BI プラットフォームでは、オブジェクトからインスタンスが生成されます。つまり、レポートオブジェクトがスケジュールされ、Job Server によって実行されると、レポートインスタンスが生成されます。レポートインスタンスは、1 つまたは複数のデータベースから取得されたレポートデータが含まれるレポートオブジェクトです。各インスタンスには、レポートが処理された時点のデータが含まれます。

同様に、BI プラットフォームでは、プログラムオブジェクトがスケジュールされ、Job Server によって実行されるたび、プログラムインスタンスも生成されます。完全な書式で表示可能なレポートインスタンスと違って、プログラムインスタンスはオブジェクト履歴内にレコードとして存在します。BI プラットフォームでは、プログラムの標準出力と標準エラーがテキスト形式の出力ファイルに保存されます。

次の場所でインスタンスを表示および管理できます。

- ・ オブジェクトの [履歴] ダイアログボックス
- ・ インスタンスマネージャ

関連項目

- ・ 102 ページの [インスタンス情報の表示](#)
- ・ 107 ページの [インスタンスに制限を設定する](#)
- ・ 103 ページの [インスタンスマネージャ](#)

7.2.1 インスタンス情報の表示

BI プラットフォームでは、[インスタンスマネージャ] または各オブジェクトの [履歴] ダイアログボックスを使用して、インスタンスを管理できます。以下の表に、各インスタンスの列と表示されるインスタンス情報を示します。

表 7-17: [履歴] ダイアログボックスに表示されるインスタンス情報

| 列 | 表示される情報 |
|-----------|--|
| インスタンスの日時 | 各インスタンスの最終更新日時。 |
| タイトル | インスタンスのタイトル。 |
| ステータス | 各インスタンスのステータス。 |
| 実行者 | インスタンスをスケジュールしたユーザ。 |
| 書式 | レポートインスタンスを保存するときの書式。レポートオブジェクトのみに適用されます。 |
| パラメータ | 各インスタンスで使用された、または使用される予定のパラメータ。レポートオブジェクトのみに適用されます。 |
| 引数 | 各インスタンスのコマンドラインインタフェースに渡された、または渡される予定のコマンドラインオプション。プログラムオブジェクトのみに適用されます。 |

注

オブジェクトタイプによっては、上の表に示されていない別の列が表示される場合があります。

表 7-18: インスタンスマネージャに表示されるインスタンス情報

| 列 | 表示される情報 |
|-------|---------------------|
| タイトル | インスタンスのタイトル。 |
| 型 | オブジェクトの種類 |
| ステータス | 各インスタンスのステータス。 |
| 場所 | リポジトリ内のオブジェクトの場所。 |
| 所有者 | インスタンスをスケジュールしたユーザ。 |
| 終了時刻 | インスタンスの実行が完了した日時。 |

| 列 | 表示される情報 |
|--------|--|
| 次回実行時 | 定期スケジュールが設定され、ステータスが保留となっているオブジェクトの次回実行時刻。 |
| 送信時刻 | ユーザがオブジェクトをスケジュールした日時。 |
| 開始時刻 | オブジェクトの実行開始日時。 |
| 期間 (秒) | スケジュールされたジョブの期間。 |
| 繰り返し | スケジュールされたジョブの頻度。 |
| 有効期限 | インスタンスの実行終了日時、またはエラーによる終了日時。 |
| サーバ | インスタンスが実行されたサーバ。 |
| エラー | 実行中に発生し、オブジェクトの失敗原因となったエラー (エラーが発生した場合)。 |

関連項目

- ・ 105 ページの[インスタンスを表示する](#)」
- ・ 106 ページの[インスタンスの一時停止および再開](#)」
- ・ 106 ページの[インスタンスを削除する](#)」

7.2.1.1 インスタンスマネージャ

[インスタンスマネージャ] を使用すると、BI プラットフォームデプロイメント内のすべてのインスタンスを 1 つの場所から表示および管理できます。インスタンスマネージャを使用すると、以下のようなタスクを実行できます。

- ・ 特定のインスタンスを検索する。
- ・ 複数のインスタンスを選択し、それらに対して、一時停止、再開、削除などのバッチ操作を実行する。
- ・ 単一インスタンスの詳細情報を表示する。
- ・ インスタンスエラーの原因となっているシステムの問題を診断して解決する。

インスタンスマネージャのデフォルトビューには、保留中のインスタンスがタイトル別に表示されます。インスタンスに関する詳細情報を表示するには、インスタンスを選択し、ツールバーの[インスタンスの詳細]アイコンをクリックします。

例 インスタンスマネージャを使用したトラブルシューティング

管理者が CMC にログオンし、インスタンスマネージャを確認して、複数のジョブが失敗していることに気づいたとします。管理者は一覧をフィルタ処理し、この 2 日間に失敗したジョブだけを表示すると、それらはすべて同じサーバで実行されていることがわかりました。管理者は一覧をサーバ別に並べ替え、失敗したジョブがすべて同じサーバで実行されていることを確認します。各失敗のエラーコードは同じでした。管理者が 1 つ

のインスタンスの詳細情報を表示すると、データベース接続が正しく再接続されていないことがわかりました。管理者はデータベース接続を正しく再接続し、インスタスマネージャに戻って失敗したすべてのジョブを再実行します。

7.2.1.1.1 インスタスマネージャでの特定のインスタンスの検索

インスタスマネージャで特定のインスタンスを検索するには、[次の基準を満たすインスタンスを検索する] のオプションを使用します。次の表に、使用可能なオプションを示します。

| オプション | 有効化方法 |
|-----------|--|
| 親フォルダ | [親フォルダ] チェックボックスをオンにして、リポジトリフォルダを参照します。BI プラットフォームでは、親フォルダ内のすべてのインスタンスが一覧表示されます。 |
| 所有者 | [所有者] チェックボックスをオンにし、ユーザ名を入力して、そのユーザによってスケジュールされているインスタンスを検索します。 |
| ステータス | [ステータス] チェックボックスをオンにして、一覧から以下のステータスのいずれかを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 成功 ・ 失敗 ・ 実行中 ・ 一時停止 ・ 待機中 ・ 繰り返し |
| オブジェクトタイプ | [オブジェクトタイプ] チェックボックスをオンにして、一覧からオブジェクトタイプを選択します。 |
| 終了時刻 | [終了時刻] チェックボックスをオンにして、開始時刻と停止時刻を設定します。 注 完了したパブリケーションインスタンスについては、[オブジェクトの種類]を有効にし、[パブリケーション]に設定して、終了時刻を設定することをお勧めします。 |
| 次回実行時 | [次回実行時] チェックボックスをオンにして、開始時刻と停止時刻を設定します。 |

複数のオプションを同時に使用してインスタンスを検索することができます。入力したすべての基準に一致するインスタンスだけが表示されます。完了したら、[検索] をクリックします。

注

BI 受信ボックスにオブジェクトをスケジュールすると、ユーザが BI 受信ボックスで受け取ったドキュメントはインスタンスとして見なされません。したがって、これらの BI 受信ボックスドキュメントはインスタンスマネージャに表示されません。

7.2.1.2 オブジェクトのインスタンスを管理する

このタスクは、特定のオブジェクトのインスタンスを表示および管理する場合に実行します。すべてのオブジェクトのインスタンスを表示および管理する場合は、このタスクの代わりに、インスタンスマネージャを使用します。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、オブジェクトを選択します。
- 2 [アクション] > [履歴] をクリックします。
- 3 インスタンス(複数可)を選択します。

注

このリストを最新表示するには、[最新表示] をクリックします。この場合、最初にインスタンスを選択する必要はありません。

- 4 [今すぐ実行]、[一時停止]、[再開]、[送信]、[再スケジュール]、または[削除]のいずれかをクリックします。
[今すぐ実行] をクリックすると、システムはオブジェクトをすぐに実行するようにスケジュールします。スケジュールされたジョブのステータスは、[待機中] になります。

関連項目

- ・ 103 ページの [インスタンスマネージャ](#)

7.2.1.3 インスタンスを表示する

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、オブジェクトを選択します。
- 2 [アクション] > [履歴] をクリックします。
- 3 [インスタンスの日時] 列で、表示するインスタンスをクリックします。

インスタンスマネージャを使用すると、ステータス別やユーザ別にインスタンスのリストを表示することができます。

すべての列をデフォルトの幅で表示するためには、右側にスクロールする必要があります。

注

[送信時刻]、[開始時刻]、[期間]、[繰り返し]、または[有効期限]列を使用してインスタンスを並べ替えることはできません。

関連項目

- ・ 103 ページの[インスタスマネージャ](#)

7.2.2 インスタンスの一時停止および再開

必要に応じてインスタンスを一時停止し、後でこれを再開することができます。一時停止と再開はスケジュールされたインスタンスのみに適用できます。つまり、ステータスが“定期”と“待機”のインスタンスのみです。

たとえば、保守作業のために Job Server が休止している場合などには、スケジュールされたインスタンスを一時停止することが望ましい場合もあります。一時停止にすることによってオブジェクトの実行が停止され、Job Server の休止によるオブジェクトの失敗を防ぐことができます。Job Server が再始動したら、このスケジュールされたオブジェクトを再開することができます。

7.2.2.1 インスタンスを一時停止する

- 1 オブジェクトの[履歴]ダイアログボックスを表示します。
- 2 一時停止するスケジュール済みインスタンスを選択します。
- 3 [一時停止]をクリックします。

7.2.2.2 一時停止したインスタンスを再開する

- 1 オブジェクトの[履歴]ダイアログボックスを表示します。
- 2 再開するスケジュール済みインスタンスを選択します。
- 3 [再開]をクリックします。

7.2.3 インスタンスを削除する

必要に応じてオブジェクトからインスタンスを削除できます。ステータスが“定期”または“待機”のスケジュールされたインスタンスと、ステータスが“成功”または“失敗”のレポートインスタンスまたはプログラムインスタンスの両方を削除できます。

- 1 オブジェクトの[履歴]ダイアログボックスを表示します。

- 2 削除するインスタンス(複数可)を選択します。
- 3 [削除]をクリックします。

7.2.4 インスタンスに制限を設定する

制限は、古いインスタンスの自動/定期クリーンアップに対して設定します。システム上に残すオブジェクトやユーザ/グループのインスタンスの数をオブジェクトレベルで制限することができます。また、ユーザ/グループのインスタンスをシステム上に残す日数を制限することもできます。

制限は、オブジェクトレベルだけでなく、フォルダレベルでも設定することもできます。フォルダレベルで制限を設定した場合、その制限は、フォルダ内にあるすべてのオブジェクト(そのサブフォルダ内のオブジェクトも含む)に適用されます。

注

オブジェクトレベルで制限を設定した場合、オブジェクトの制限が、フォルダに対して設定された制限を上書きします。つまり、オブジェクトはフォルダの制限を継承しません。

- 1 CMC の [フォルダ] 管理エリアで、オブジェクトを選択します。
- 2 [アクション] > [制限]をクリックします。
[制限]ダイアログボックスが表示されます。
- 3 制限を設定します。

| オプション | 説明 |
|---|--|
| オブジェクトのインスタンスが N 個より多い場合は、超過インスタンスを削除する | オブジェクトあたりのインスタンス数を制限するには、このチェックボックスをオンにします。システム上に残すインスタンスの最大数を入力しますデフォルト値は 100 です。 |
| 超過インスタンスを削除するユーザ/グループ | ユーザやグループのインスタンス数を制限するには、このエリアで[追加]をクリックします。使用可能なユーザとグループから選択して、[>]を押して一覧に追加します。[OK]をクリックします。[インスタンスの制限]列にインスタンスの最大数を入力しますデフォルト値は 100 です。 |
| N 日後にインスタンスを削除するユーザ/グループ | ユーザやグループのインスタンスが保存される日数を制限するには、このエリアで[追加]をクリックします。使用可能なユーザとグループから選択して、[>]を押して一覧に追加します。[OK]をクリックします。次に、[最大日数]列にインスタンスの最大有効日数を入力しますデフォルト値は 100 です。 |

- 4 [更新]をクリックします。

関連項目

- ・ 25 ページの [フォルダレベルでインスタンスを制限する](#)

7.3 カレンダー

カレンダーとは、スケジュールされたジョブの実行日をカスタマイズしたリストです。ジョブにカレンダーを適用すると、BI プラットフォームは、ユーザが指定した定義済みの実行日にジョブを実行します。

カレンダーでは、標準のスケジュールオプションよりも複雑な処理スケジュールを作成することができます。

注

レポートオブジェクト、プログラムオブジェクト、およびオブジェクトパッケージを含め、スケジュール可能なオブジェクトでカレンダーを使用できます。

BI プラットフォームでは、カレンダーを必要な数だけ設定することができます。

カレンダーおよび処理スケジュール

カレンダーを使用すると、定期的に行われる複雑なジョブを効率的にスケジュールすることができます。カレンダーが特に有効なのは、定期的に行うジョブを不規則なスケジュールに従って実行する場合や、一連の定期的なスケジュール日付をユーザに提示し、そこから日付を選んでもらう場合です。カレンダーを使用すると、定期的なスケジュール日付に固有のスケジュール日付を組み合わせた、複雑な処理スケジュールを作成することができます。

例 休日用の非実行カレンダー

自国の法定休日を除いて、営業日には毎日レポートオブジェクトを実行する場合、レポートオブジェクトを実行しない非実行日として指定した休日を含むカレンダーを作成することができます。BI プラットフォームは、カレンダーに実行日として指定された日に毎日ジョブを実行します。

7.3.1 カレンダーを作成する

新しいカレンダーを作成するには、このタスクを実行します。

ヒント

新しいカレンダーを作成するためのテンプレートに使用するカレンダーを作成すると便利です。このようなテンプレートカレンダーは、必要に応じてコピーし、変更することができます。たとえば、週末と会社の休日を除くすべての日付を実行日とした、デフォルトの平日カレンダーを作成することができます。

- 1 CMC の [カレンダー] 管理エリアを表示します。
- 2 [管理] > [新規] > [新しいカレンダー] の順にクリックします。
- 3 新しいカレンダーの名前と説明を入力します。
- 4 [OK] をクリックします。

新しいカレンダーがシステムに追加されました。このカレンダーに実行日を追加することができます。

作成したら、実行日は、[日付] タブでカレンダーに追加できます。

関連項目

- ・ 109 ページの[「カレンダーに日付を追加する」](#)

7.3.2 カレンダーに日付を追加する

日付は、さまざまな形式のカレンダーに追加することができます。カレンダーの年単位ビュー、四半期単位ビュー、月単位ビューから特定の日付を選択することや、月や週の曜日に基づく一般的な形式で、定期的な日付を指定することができます。

- 1 CMC の [カレンダー] 管理エリアを表示します。
- 2 変更するカレンダーを選択します。
- 3 [アクション] > [日付の選択] をクリックします。
- 4 カレンダー形式 ([年単位]、[四半期単位]、または [月単位]) を選択するか、または、定期的な日付のカレンダーを作成する場合、[日別] または [曜日別] をクリックします。
- 5 実行日としてカレンダーに追加する月の日付をクリックします。

実行日を削除するには、その日を再度クリックします。

ヒント

週を選択する、またはある月の特定の曜日をすべて選択するには、行または列のヘッダをクリックします。

- 6 作業が完了したら、[保存] をクリックします。

注

既存のカレンダーを変更する際には、システム内で現在スケジュールされているすべてのインスタンスが BI プラットフォームによってチェックされます。編集したカレンダーを使用しているオブジェクトは、改定された日付スケジュールに従って実行されるように自動的に更新されます。

7.3.2.1 カレンダー形式のオプション

| カレンダー形式のオプション | 説明 |
|---------------|--|
| 年単位 | [年単位] 形式では、1 年間のカレンダーの実行日が表示されます。表示される年を変更するには、[前の年] および [次の年] ボタンをクリックします。[年単位] 形式を使用して日付を追加するには、追加する日、曜日ヘッダ、または週の行ヘッダをクリックします。 |

| カレンダー形式のオプション | 説明 |
|---------------|---|
| 四半期単位 | [四半期単位] 形式では、現在の四半期カレンダーの実行日が表示されます。[前の四半期] ボタンおよび [次の四半期] ボタンを使用すると、表示される四半期を変更することができます。[四半期単位] 形式を使用して日付を追加するには、追加する日、曜日ヘッダ、または週の行ヘッダをクリックします。 |
| 月単位 | [月単位] 形式では、現在の月カレンダーの実行日が表示されます。[前の月] および [次の月] ボタンを使用すると、表示される月を変更できます。[月単位] 形式を使用して日付を追加するには、追加する日、曜日ヘッダ、または週の行ヘッダをクリックします。 |

7.3.2.2 個々の日付

カレンダーに特定の日付を追加するには、[年単位]、[四半期単位]、[月単位] の各形式を使用します。

[年単位] 形式では、1 年間の実行スケジュールが表示されます。[四半期単位] 形式では、現在の四半期の実行日が表示されます。また、[月単位] 形式で表示することもでき、現在の月の実行日が表示されます。これら 3 つの形式では、[戻る] ボタンおよび [次へ] ボタンをクリックして、表示される期間の範囲を変更することができます。

追加する日をクリックすることで、任意のカレンダー形式に特定の日付を追加できます。週全体を追加する場合は、その週の行ヘッダの [>] をクリックします。ある月の指定された曜日のすべての日を実行日に追加するには、その曜日の名前をクリックします。

2008 - 2009

前の年

次の年

特定日の追加：

日別

曜日別

表示：

年単位

四半期単位

月単位

下の日付をクリックし、実行日を追加または削除してください。

ヘッダーをクリックして特定の曜日の、または左側の行ヘッダーをクリックしてすべての曜日の選択/非選択を切り替えてください。

7月 2008

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|----|----|----|----|----|----|
| > | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| > | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 |
| > | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 |
| > | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 |
| > | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | |

8月 2008

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|----|----|----|----|----|----|
| > | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| > | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
| > | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
| > | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 |
| > | 31 | | | | | |

9月 2008

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|----|----|----|----|----|----|
| > | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| > | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| > | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 |
| > | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 |
| > | 28 | 29 | 30 | | | |

10月 2008

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|----|----|----|----|----|----|
| > | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| > | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
| > | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 |
| > | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 |

11月 2008

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|----|----|----|----|----|----|
| > | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| > | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 |
| > | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 |
| > | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 |
| > | 30 | | | | | |

12月 2008

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|---|----|----|----|----|----|----|
| > | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| > | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| > | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 |
| > | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 |
| > | 28 | 29 | 30 | 31 | | |

凡例

8 非実行日

8 元の実行日

8 新しい実行日

8 削除した実行日

保存

保存して閉じる

リセット

たとえば、貴社が、日単位または週単位の設定では定義できない不規則なスケジュールに従って製品を出荷している場合は、出荷日カレンダーを使用してこれらの日付のリストを作成することができます。これによって、出荷部門は、各出荷日の終わりにレポートが実行されるように、カレンダーを使用してレポートをスケジュールすることで、出荷を済ませるたびに在庫を確認できるようになりました。

関連項目

- 111 ページの[定期的な日付](#)

7.3.2.3 定期的な日付

日別、または曜日別で、定期的な日付を追加することができます。既存の実行日を表示する場合は、年単位、四半期単位、月単位の各形式を使用する必要がありますが、カレンダーに定期的な日付を追加する場合は、一般的な形式を使用します。定期的な日付を追加するには、[日別] または [曜日別] をクリックして、追加する日を選択します。

標準的なスケジュールオプションを使用すると、定期的なスケジュールを設定することができますが、カレンダーでは一度にさまざまな定期的な実行パターンを組み合わせることもできます。個々の日付をカレンダーに追加することによって、パターンに従わない日付でインスタンスを実行することもできます。


たとえば、毎月の月初の 4 日間と、毎月の第 2 および第 4 金曜日にレポートオブジェクトをスケジュールするには、まず、新しいカレンダーオブジェクトを作成して名前を付けます。次に、日別で定期的な日付を追加するこ

とにして、このカレンダーに月初の 4 日間を追加します。このカレンダーを更新すると、新しい実行日が設定された年単位形式が表示されます。

特定日の追加 (日別)

特定日の追加 : **日別** **曜日別**

下の日付をクリックし、月単位の定期実行日を追加してください。

開始日 : ☒ 

終了日 : ☐

| | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 |
| 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 |
| 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 |
| 29 | 30 | 31 | | | | |

凡例

非実行日

新しい実行日

このカレンダーに第 2 および第 4 金曜日を追加する場合は、曜日別で定期的な日付を追加することにして、第 2 および第 4 金曜日を選択します。

特定日の追加 (曜日別)

特定日の追加 :

日別

曜日別

表示 :

年単位

四半期単位

月単位

下の曜日をクリックし、週単位の定期実行曜日を追加してください。

ヘッダーをクリックして特定の曜日の、または左側の行ヘッダーをクリックしてすべての曜日の選択/非選択を切り替えてください。

開始日 : ☒

2008/05/26

終了日 : ☐

2009/05/26

曜日

| 日曜日 | 月曜日 | 火曜日 | 水曜日 | 木曜日 | 金曜日 | 土曜日 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| > 第 | 第 | 第 | 第 | 第 | 第 | 第 |
| > 第 | 第 | 第 | 第 | 第 | 第 | 第 |
| > 第 | 第 | 第 | 第 | 第 | 第 | 第 |
| > 第 | 第 | 第 | 第 | 第 | 第 | 第 |
| > 最 | 最 | 最 | 最 | 最 | 最 | 最 |

凡例

8

非実行日

8

新しい実行日

保存

保存して閉じる

キャンセル

7.3.3 カレンダを削除する

カレンダを削除すると、削除されたカレンダに従ってスケジュールされていたオブジェクトはシステムによってもう一度実行されます。カレンダが存在しないため、その後はシステムがそのオブジェクトを再度スケジュールすることはありません。オブジェクトが引き続き実行されるようにするには、異なるカレンダを選択するか、異なる定期スケジュールパターンを選択することにより、そのオブジェクトのスケジュール情報を変更します。

- 1 CMC の [カレンダ] 管理エリアを表示します。
- 2 削除するカレンダを選択します。

ヒント

複数のカレンダを選択するには、Ctrl キーまたは Shift キーを押したままで選択するカレンダをクリックします。

- 3 [管理] > [削除] をクリックします。
- 4 [OK] をクリックして確認します。

関連項目

- ・ 73 ページの [オブジェクトをスケジュールする](#)

7.3.4 カレンダへのアクセス権の指定

ユーザおよびグループに対して、カレンダへのアクセスを許可または拒否することができます。カレンダの整理方法によって、特定の従業員または部署でのみ利用可能な、特定の日付セットを作成できます。たとえば、財務チームが使用する一連の財務記録日は、他の部署には関係ないでしょう。

注

そのカレンダに対して閲覧するアクセス権のあるユーザだけが、それを閲覧できます。また、特定のグループに対してカレンダを非公開にすることもできます。

デフォルトでは、カレンダは現在のセキュリティ設定に基づきます。カレンダは、ユーザの親フォルダの権限を継承します。

アクセス権の設定の詳細については、SAP ヘルプポータル (<http://help.sap.com>) で入手できる『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』の「アクセス権の設定」の章を参照してください。

7.4 イベント

イベントは、システム内での発生を表すオブジェクトです。イベントタイプに従って、スケジュール、アラート、またはシステムの健全性をモニタリングするために使用できます。CMC の [イベント] 管理エリアでは、イベントタイプに従ってすべてのイベントがフォルダに整理されます。各イベントタイプフォルダ内では、イベントの保存と管理のためにサブフォルダを作成できます。

イベントとスケジュール

イベントベースのスケジュールを使用すると、オブジェクトのスケジュールをより詳細に制御できます。たとえば、指定したイベントが発生した後にのみオブジェクトが処理されるように、イベントを設定できます。イベントに関する作業は、イベントの作成と、イベント発生に合わせたオブジェクトのスケジュールという 2 つのステップによって成り立ちます。一度イベントを作成すれば、オブジェクトをスケジュールする際にそれを依存関係として選択できます。これにより、スケジュールされたジョブは、イベントの発生時にのみ処理されます。

スケジュールと併用する、以下のタイプのイベントを作成できます。

- ・ ファイルイベント

ファイルベースのイベントを定義するときには、Event Server で監視する特定のファイルの名前を指定します。その名前のファイルが生成されると、Event Server はイベントを生成します。たとえば、他のプログラムやスクリプトの通常のファイル出力に応じてレポートが実行されるようにできます。ファイルイベントは、[システムイベント] フォルダに保存されます。

- ・ スケジュールイベント

スケジュールベースのイベントを定義するときには、イベントのトリガとして機能する定期的なスケジュールが設定されているオブジェクトを選択します。スケジュールベースのイベントでは、このようにして、スケジュー

ルされたオブジェクト間に依存関係(条件)を設定することができます。たとえば、大量のレポートを連続して実行したり、詳細売上レポートが正常に実行された場合のみ、特定の売上集計レポートを実行することができます。スケジュールイベントは、[システムイベント] フォルダに保存されます。

- ・ カスタムイベント

カスタムイベントを作成するときには、イベントを発生させるためのショートカットを手動で作成します。カスタムイベントは、[カスタムイベント] フォルダに保存されます。

イベントを使ってスケジュールする場合、オブジェクトの定期的なスケジュールによってオブジェクトの実行頻度が決定されることに注意してください。たとえば、ファイルベースイベントに依存する日次レポートは、指定したファイルが毎日生成される限り、1 日 1 回実行されます。さらにこのイベントは、ユーザがイベントベースのレポートのスケジュールで設定した時間枠内に発生する必要があります。

ヒント

アラートにはファイルベースのイベントを使用します。

自動的に作成されたイベント

リポジトリに特定のタイプのオブジェクト(例: Crystal レポート) が追加されると、対応するイベントが自動的に作成されます。

注

これらのタイプのイベントは[イベント] エリアで表示できます。ただし、これらのタイプのイベントを管理または変更するには、対応するイベントソース、または関連アプリケーションに対するアクセス権が必要です。

イベントのモニタリング

システムの総合的な健全性を監視するために、BI プラットフォームにはモニタリングイベントがあります。これらのイベントは [モニタリング] エリアで作成および管理されるモニタリングプローブに対応します。

関連項目

- ・ [121 ページの「アラート」](#)
- ・ [121 ページの「アラート」](#)
- ・ [115 ページの「ファイルベースのイベント」](#)
- ・ [116 ページの「スケジュールベースのイベント」](#)
- ・ [118 ページの「カスタムイベント」](#)
- ・ [97 ページの「オブジェクトのイベント発生時のスケジュールの設定」](#)

7.4.1 ファイルベースのイベント

ファイルベースのイベントは、イベント発生前に特定のファイル(トリガ)が作成されるのを待ちます。ファイルベースのイベントの発生を待つオブジェクトをスケジュールする前に、まず CMC の[イベント]管理エリアでファイルベースのイベントを作成する必要があります。次に、オブジェクトをスケジュールしてイベントを選択します。

ファイルベースのイベントは、[Event Server] によって監視されます。指定したファイルが作成されると、[Event Server] はイベントを生成します。CMC は、イベントに応じてスケジュールリクエストを送信します。

たとえば、データベース分析プログラムが終了して自動ログファイルが書き込まれた後に、日次レポートを実行するとして、これを行うには、ファイルベースのイベントにログファイルを指定して、そのイベントを依存関係として日次レポートをスケジュールします。ログファイルが作成されると、イベントが生成され、レポートが処理されます。

注

イベント作成前にすでにファイルが存在する場合は、イベントは生成されません。この場合、ファイルが削除後に再作成されたときのみ、イベントが生成されます。イベントを複数回生成させたい場合は、イベント生成のたびにファイルを削除して再作成する必要があります。

関連項目

- 97 ページの[オブジェクトのイベント発生時のスケジュールの設定](#)

7.4.1.1 ファイルベースのイベントを作成する

- 1 CMC の [イベント] 管理エリアに移動して、[システムイベント] フォルダを開きます。
ファイルベースのイベントは、[システムイベント] に保存され、管理されます。
- 2 [管理] > [新規] > [新規イベント] をクリックします。
- 3 [タイプ] リストで [ファイル] を選択します。
- 4 [イベント名] にイベントの名前を入力します。
- 5 [説明] に説明を入力します。
- 6 [サーバ] リストで、指定したファイルをモニタリングする Event Server を選択します。
- 7 [ファイル名] にファイル名を入力します。

注

Event Server が監視するファイルの絶対パス (例: C:\<フォルダ>\<ファイル名> または /<ホーム>/<フォルダ>/<ファイル名>) を入力します。指定するドライブとディレクトリは、Event Server から見えるようにしておく必要があります。通常は、ローカルドライブ上のディレクトリを指定してください。

- 8 イベントのアラートを有効化するには、[アラート有効] を選択し、[アラートメッセージ] にメッセージを入力します。
イベントがトリガされると、ユーザに送信されるアラート通知に入力したメッセージが含まれます。
- 9 [OK] をクリックします。

7.4.2 スケジュールベースのイベント

スケジュールベースのイベントは、スケジュールされたオブジェクトに依存します。特定のオブジェクトが処理されると、完了したジョブ、またはスケジュールされたオブジェクトの成功/失敗に基づいてイベントが開始されます。

スケジュールベースのイベントには、スケジュールされたオブジェクトを少なくとも 2 つ関連付ける必要があります。1 つ目のオブジェクトはイベントのトリガとして機能します。オブジェクトが処理されると、イベントが発生します。2 つ目のオブジェクトはイベントに依存します。イベントが発生すると、2 つ目のオブジェクトが実行されます。

たとえば、プログラムオブジェクト P1 を実行した後に、レポートオブジェクト R1 と R2 を実行させるとします。これを実行するには、最初にスケジュールベースのイベントを [イベント] 管理エリアで作成してから、イベントの [成功] オプションを指定します (つまり、イベントはプログラム P1 が正常に実行された場合のみ開始されます)。次に、イベント発生に合わせてレポート R1 と R2 をスケジュールします。新しいスケジュールベースのイベントを依存として選択します。イベント発生に合わせてプログラム P1 をスケジュールして、プログラム P1 が正常に完了するとスケジュールベースのイベントが生成されるように設定します。プログラム P1 が正常に実行されると、スケジュールベースのイベントが生成され、レポート R1 と R2 が処理されるようになります。

関連項目

- 97 ページの [オブジェクトのイベント発生時のスケジュールの設定](#)

7.4.2.1 スケジュールベースのイベントを作成する

- CMC の [イベント] 管理エリアに移動して、[システムイベント] フォルダを開きます。
スケジュールベースのイベントは、[システムイベント] に保存され、管理されます。
- [管理] > [新規] > [新規イベント] をクリックします。
[新規イベント] ダイアログボックスが表示されます。
- [タイプ] リストで [スケジュール] を選択します。
- [イベント名] にイベントの名前を入力します。
- [説明] フィールドに入力します。
- イベントのステータスオプションを選択します。

| イベントのステータス | 説明 |
|------------|---------------------------------------|
| 成功 | 指定したオブジェクトが正常に完了した場合のみ、イベントが発生します。 |
| 失敗 | 指定したオブジェクトが正常に完了しなかった場合のみ、イベントが発生します。 |
| 成功または失敗 | このイベントは、指定したオブジェクトが完了した場合に発生します。 |

- イベントのアラートを有効化するには、[アラート有効] を選択します。
イベントがトリガされると、ユーザにアラート通知が送信されます。

- 8 [OK] をクリックします。

7.4.3 カスタムイベント

カスタムイベントは、明示的に呼び出したときのみ発生します。他のイベントと同様、カスタムイベントに基づくオブジェクトは、オブジェクトのスケジュールパラメータで設定されている時間枠内にイベントが発生したときのみ実行されます。カスタムイベントは、クリックすると依存スケジュールリクエストが生成されるショートカットを設定できるため、便利です。

たとえば、データベースで情報を更新した後に、多数のレポートをスケジュールしてそれらのレポートを実行するようにするとします。これを行うには、新しいカスタムイベントを作成して、そのイベントの発生に合わせてレポートをスケジュールします。データベースのデータを更新してレポートを実行する必要がある場合は、CMC のイベントに戻って手動でトリガします。BI プラットフォームでレポートが実行されます。

注

カスタムイベントは複数回発生させることができます。たとえば、2 組のイベントベースのオブジェクトをスケジュールして、1 組は午前、もう 1 組は午後というように毎日実行させるとします。関連するカスタムイベントを午前に発生させると、1 組のプログラムが実行されます。そのイベントを午後に発生させると、もう 1 組のプログラムが実行されます。午前にイベントを発生させるのを忘れて、午後にだけ発生させた場合、2 組ともプログラムが実行されます。

関連項目

- 97 ページの [オブジェクトのイベント発生時のスケジュールの設定](#)

7.4.3.1 カスタムイベントを作成する

- 1 CMC の [イベント] 管理エリアに移動して、[カスタムイベント] フォルダを開きます。
- 2 [管理] > [新規] > [新規イベント] をクリックします。
- 3 [イベント名] フィールドにイベントの名前を入力します。
- 4 [説明] フィールドに入力します。
- 5 イベントのアラートを有効化するには、[アラート有効] を選択し、[アラートメッセージ] フィールドにメッセージを入力します。
イベントがトリガされると、ユーザに送信されるアラート通知に入力したメッセージが含まれます。
- 6 [OK] をクリックします。

注

このカスタムイベントを発生させる前に、このイベントに依存するオブジェクトをスケジュールしてください。

関連項目

- ・ 73 ページの [オブジェクトをスケジュールする](#)
- ・ 127 ページの [イベントのアラートを有効化する](#)

7.4.3.2 カスタムイベントを発生させる

- 1 CMC の [イベント] 管理エリアに移動して、[カスタムイベント] フォルダを開きます。
- 2 カスタムイベントを選択します。
- 3 [アクション] > [イベントの呼び出し] をクリックします。

7.4.4 イベントのアクセス権の指定

ユーザおよびグループに対して、イベントおよびイベントフォルダへのアクセスを許可または拒否することができます。特定の従業員または部署でのみ使用できるように、イベントを指定することができます (たとえば、管理者や IT 担当者に対して特定のイベントを指定する)。

ユーザは、表示権限のあるイベントのみを表示することができます。権限を使用して、特定のグループに対して適用されないイベントを非表示にすることができます。たとえば、IT 関連のイベントへのアクセス許可を IT 管理グループだけに限れば、人事管理グループのユーザはこれらのイベントを閲覧することはできません。したがって、イベントリストがあれば人事管理グループにも閲覧させることが可能になります。

注

デフォルトでは、イベントは現在のセキュリティ設定に基づきます。

権限は、ユーザの親フォルダから継承されます。

ヒント

イベントは、イベントタイプに基づいてフォルダに保存されます。各イベントタイプのフォルダ内では、より細かい精度でイベントを並べ替えるためにサブフォルダを作成できます。

アクセス権の詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) で入手できる『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』の「アクセス権の設定」の章を参照してください。

アラート

8.1 アラート

アラートは、BI プラットフォーム内のさまざまなアプリケーションを対象とし、イベントのトリガ時にユーザおよび管理者に通知する機能です。アラートを使用し、例外に基づいてオブジェクトとイベントを管理することができます。アラートによって変更に関する情報が通知されます。

たとえば、Julie は自動車保険会社で働いており、Crystal レポートを使用して提出された保険金請求を監視しています。彼女は保険金請求数アラートを購読しており、アラート通知を電子メールで受け取ることを選択しました。レポートは毎日実行されます。1 週間後、自動車保険の保険金請求数が 10,000 件に達し、アラートの条件が満たされて、イベントがトリガされました。Julie は電子メール通知を受け取り、自動車保険の保険金請求数が大幅に増加していることに気がきます。Julie はマネージャに通知し、安全運転を呼びかけるキャンペーンの開始を推奨します。

アラートの購読

BI プラットフォームでは、ユーザおよび管理者は、セントラル管理コンソール (CMC) または BI 起動パッドを使用してアラートを購読できます。

アラートの有効化

レポート作成者は、新しいレポートを作成したときにアラートを有効化します。イベントがトリガされると、通知が購読者の電子メールアドレスまたは BI システム送信先 (BI 起動パッドアカウントなど) に送信されます。

アラート通知の表示

BI プラットフォームでは、ユーザおよび管理者は BI 起動パッドまたは電子メールで通知を表示します。

アラートを右クリックして [その他を表示] を選択すると、[アラート情報] ウィンドウが開いてタイトル、メッセージ、およびトリガ時間が表示されます。

アラートの管理

コンテンツ管理者とパワーユーザは、CMC または BI 起動パッドでアラートを管理します。システム管理者は、CMC でアラートを管理し、権限を割り当ててユーザアクセスを制御します。

8.1.1 アラートオブジェクトソース

| オブジェクト | 説明 |
|-------------------------------|---|
| Crystal レポート | <p>Crystal レポートには、複数のアラートを含めることができます。アラートを含むレポートをリポジトリに追加すると、BI プラットフォームはレポートの各アラートに対応するイベントオブジェクトを自動的に作成します。セントラル管理コンソールでは、これらのイベントが [イベント] エリアの [Crystal Reports のイベント] フォルダで一覧にされます。また、[コンテンツ検索] オプションを使用してイベントを検索することもできます。</p> <p>注 BI プラットフォームで作成されたレポートのみがアラートをサポートし、レポートが追加された場合にユーザがアラート通知を購読することができます。購読するには、レポートに移動して、レポートオブジェクトで購読タスクを実行します。</p> |
| イベント (ファイルベース、スケジュールベース、カスタム) | 任意のイベントに対して、アラートを有効化することができます。 |

注

- ・ モニタリングでは、アラートを使用して、システムの全体的な状態の変化をシステム管理者に通知します。モニタリングプローブに基づくアラートは、[イベント] エリアの [監視イベント] フォルダで見つけることができます。モニタリングの詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』(<http://help.sap.com>) を参照してください。
- ・ Information Steward および Event Insight などのアプリケーションで作成されたオブジェクトにも、アラートが使用されます。詳細については、アプリケーションのマニュアルを参照してください。

8.1.2 アラートワークフロー

アラートワークフローには、さまざまなステップ、アプリケーション、およびユーザタイプが関与します。

Crystal レポートのアラートワークフロー

- 1 レポート作成者が、SAP Crystal Reports for Enterprise においてアラートを含むレポートを作成します。
- 2 レポート作成者またはコンテンツ管理者が、セントラル管理コンソール (CMC) の [フォルダ] または [個人用フォルダ] エリアのフォルダに Crystal レポートを追加します。レポートが追加されると、レポートのアラートに基づいてレポートイベントオブジェクトが自動的に作成されます。
- 3 ユーザが CMC または BI 起動パッドにログオンし、Crystal レポートに移動して、アラートを購読します。
- 4 レポート作成者またはコンテンツ管理者が、Crystal レポートの実行をスケジュールします。アラート条件が満たされた場合、アラートがトリガされ、購読設定に基づいてユーザに通知が送信されます。

イベントのアラートワークフロー

- 1 コンテンツ管理者が CMC でイベントを作成し、新規イベントに対してアラートを有効化します。
- 2 ユーザが CMC の [イベント] エリアでアラートを確認するか、BI 起動パッドで名前によってアラートを検索して、アラートを購読します。

- 3 イベントが発生し、アラートがトリガされます。
- 4 イベントが発生したことを示す通知が、購読設定に基づいてユーザに送信されます。

8.1.3 アラートと Crystal レポートアラート通知の相違点

旧バージョンの BI プラットフォームでは、Crystal レポートのスケジュール時に Crystal レポートのアラート通知を設定することができました。BI プラットフォームは、SAP Crystal Reports で作成されたレポートについては、この機能を引き続きサポートします。下の表は、旧アラート通知機能とアラートの主な相違点をまとめたものです。

| 主な相違点 | Crystal レポートアラート通知 | アラート |
|---------------|--|--|
| サポートされるオブジェクト | SAP Crystal Reports で作成されたレポート | <ul style="list-style-type: none"> ・ SAP Crystal Reports で作成されたレポートのみ ・ イベント ・ モニタリングプローブ ・ Information Steward アラート ・ Event Insight アラート |
| サポートされる送信先 | 電子メールのみ | <ul style="list-style-type: none"> ・ BI 起動パッドの [マイアラート] ・ 電子メール |
| 用法 | この機能は、Crystal レポートのスケジュールの設定時に設定します。すべての受信者の電子メールアドレスを、手動で入力する必要があります。受信者には、Enterprise ユーザと BI プラットフォームアカウントを持たないユーザを含めることができます。 | アラートソースからのアラート通知を購読し、必要に応じて購読を修正します。受信者には、Enterprise ユーザと BI プラットフォームアカウントを持たないユーザを含めることができます。ユーザの電子メールアドレスを、アカウントなしで手動で入力する必要があります。 |

8.1.4 アラートに必要な権限

アラートワークフローにおけるロールと責任によって、必要な権限は変化する可能性があります。下の表は、一般的なアラートタスクで必要とされる権限をまとめたものです。

表 8-2: ドキュメントアラートの処理

| ロール | タスク | 必要な権限 |
|----------|-----------------------------|--|
| ユーザ | ドキュメントアラートの購読 | <ul style="list-style-type: none"> ドキュメントに対する表示権限 関連イベントに対する表示権限 ユーザ自身のアカウントに対する購読権限 <p>注 アラート通知に含まれるドキュメントリンクを使用してインスタンスを表示する場合は、ドキュメントに対するインスタンス表示権限も必要です。</p> |
| ユーザ | ドキュメントアラートの購読解除 | <ul style="list-style-type: none"> 関連イベントに対する表示権限 ユーザ自身のアカウントに対する購読権限 |
| ユーザ | ドキュメントアラートの通知受信 | <ul style="list-style-type: none"> 関連イベントに対する表示権限 ドキュメントに対する表示権限 |
| コンテンツ管理者 | ドキュメントアラートの送信先およびパラメータ設定の管理 | <ul style="list-style-type: none"> ドキュメントの権限の編集 イベントの編集権限 |
| コンテンツ管理者 | ドキュメントのアラート設定の管理 | <ul style="list-style-type: none"> ドキュメントに対する表示および編集権限 関連イベントに対する表示および編集権限 購読者に追加されるすべてのユーザまたはグループに対する表示およびスケジュール権限 <p>注 購読者のリストにユーザグループを追加する場合、ユーザグループオブジェクトに対する表示および購読権限が必要です。グループ内の個別ユーザに対する表示および購読権限では不十分です。</p> |
| コンテンツ管理者 | ユーザのドキュメントアラートの購読解除 | <ul style="list-style-type: none"> ドキュメントに対する表示権限 関連イベントに対する表示権限 ユーザに対する表示および購読権限 |
| コンテンツ管理者 | ドキュメントアラートのトリガ | <ul style="list-style-type: none"> ドキュメントに対する表示およびスケジュール権限 関連イベントに対する表示およびトリガ権限 |

表 8-3: イベントアラートの処理

| ロール | タスク | 必要な権限 |
|----------|----------------|---|
| ユーザ | イベントアラートの購読 | <ul style="list-style-type: none"> イベントに対する表示権限 ユーザ自身のアカウントに対する購読権限 注 デフォルトでは、購読権限は個人のアカウントを持つユーザに対して付与されます。 |
| ユーザ | イベントアラートの購読解除 | <ul style="list-style-type: none"> イベントに対する表示権限 ユーザ自身のアカウントに対する購読権限 注 デフォルトでは、購読権限は個人のアカウントを持つユーザに対して付与されます。 |
| コンテンツ管理者 | イベントのアラート設定の管理 | <ul style="list-style-type: none"> イベントに対する表示および編集権限 購読者に追加されるすべてのユーザまたはグループに対する表示およびスケジュール権限 注 購読者のリストにユーザグループを追加する場合、ユーザグループオブジェクトに対する表示および購読権限が必要です。グループ内の個別ユーザに対する表示および購読権限では不十分です。 |
| コンテンツ管理者 | イベントのトリガ | <ul style="list-style-type: none"> イベントに対する表示およびトリガ権限 |

表 8-4: アラート通知の処理

| ロール | タスク | 必要な権限 |
|-----|-----------------------|--|
| ユーザ | アラート通知の受信 | <ul style="list-style-type: none"> 関連イベントに対する表示権限 |
| ユーザ | アラート通知の既読または未読への設定 | <ul style="list-style-type: none"> アラート通知に対する表示権限 ユーザアカウントに対する購読権限 |
| ユーザ | アラート通知の再読 | <ul style="list-style-type: none"> アラート通知に対する表示権限 |
| ユーザ | BI 起動パッドにおけるアラート通知の削除 | <ul style="list-style-type: none"> アラート通知に対する表示権限 ユーザアカウントに対する購読権限 |

8.1.5 購読の不整合の解決

グループメンバーシップの結果として、ユーザの購読設定が不整合の原因となる可能性があります。購読設定の不整合が発生すると、アラートは以下の方法でそれを解決します。

- ・ ユーザに対する設定により、グループメンバーシップから継承されたすべての設定が上書きされます。
- ・ サブグループに対する設定により、グループから継承されたすべての設定が上書きされます。

ユーザが階層で等しいレベルにある 2 つのグループから異なる購読設定を継承することがあります。この場合、ユーザはそれぞれの設定に基づいてアラート通知を受け取ります。

注

[除外する] リストに含まれると、その他すべての購読設定が無効化されます。アラートを購読しているものの、[除外する] リストに含まれているユーザは、アラート通知を受け取りません。


例 階層で等しいレベルにある 2 つのグループからの購読設定

Julie は、北米販売グループと南米販売グループに属しています。どちらのグループも、もう 1 つのグループのサブグループではありません。北米販売グループは収益アラート通知を電子メールと BI 受信トレイで受け取り、南米販売グループは収益アラート通知を電子メールのみで受け取ります。Julie は両方のグループに属しているため、収益アラート通知を電子メールと BI 受信トレイで受け取ります。レポートに定義済みのパラメータ（北米および南米の地域パラメータ値など）がある場合、Julie は個別の電子メールアラート通知を受け取ります。それ以外の場合、アラートは 1 件の電子メールにまとめられます。

8.2 アラートの使用

8.2.1 セントラル管理コンソールにおけるアラートソースオブジェクトの検索

アラートソースは、オブジェクトタイプに基づいて異なる場所に格納されます。下の表は、各種アラートソースを検索する方法をまとめたものです。

| オブジェクト (アラートソース) | CMC での場所 |
|-------------------------------|--|
| Crystal レポート | <p>[フォルダ] または [個人用フォルダ] エリア</p> <p>アラートをサポートするシステムにおけるすべての Crystal レポートアラートのリストは、CMC の [イベント] エリアの [Crystal Reports のイベント] フォルダにあります。アラートを購読するには、Crystal レポートを [フォルダ] または [個人用フォルダ] エリアに格納します。</p> |
| イベント (ファイルベース、スケジュールベース、カスタム) | <p>[イベント] エリア</p> <p>[イベント] は、イベントタイプで整理されます。アラートが有効化されたイベントは、 アイコンで示されます。</p> |

8.2.2 イベントのアラートを有効化する

アラートは、アラートを含む Crystal レポートに対して自動的に有効化されます。ユーザは、レポートがリポジトリに追加された瞬間から、レポートアラートを購読することができます。イベントのアラートを有効化するには、新しいイベントの作成時にアラートを有効化するなどの追加の手順が必要になります。

- 1 CMC の [イベント] エリアで、アラートを有効化するイベントを選択します。
- 2 [管理] > [プロパティ] をクリックします。
[プロパティ] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 ナビゲーションペインで [イベントの設定] をクリックします。
- 4 [アラート有効] を選択し、[アラートメッセージ] フィールドのメッセージを入力します。
このメッセージは、アラートがトリガされたときに購読者に送信されます。

注

スケジュールベースのイベントに対してメッセージを入力することはできません。

- 5 [保存して閉じる] をクリックします。

8.2.3 アラートを購読する

- 1 アラートソースに移動し、それを選択します。
詳細については、126 ページの [「セントラル管理コンソールにおけるアラートソースオブジェクトの検索」](#) を参照してください。
- 2 [アクション] > [購読] をクリックします。

[購読] ダイアログボックスが表示されます。

- 送信先を選択します。

| オプション | 説明 |
|--------|--|
| マイアラート | アラート通知をビジネスインテリジェンスシステム (BI 起動パッドなど) の送信先に送信します。 |
| 電子メール | アラート通知を BI プラットフォームのユーザアカウントに対して指定された電子メールアドレスに送信します。 注 <ul style="list-style-type: none"> 送信先は、ユーザアカウントに対して電子メールアドレスが指定されている場合にのみ使用することができます。 電子メールアドレスが有効であり、正しく入力されていることを確認します。電子メールアドレスが正しくない場合、アラート通知を受け取ることができません。 |

- 必要に応じてその他の設定を行います。

アラートソースによっては、追加の設定を行う必要がある場合があります。たとえば、複数のアラートを含む Crystal レポートの場合、購読するアラートを選択する必要があります。

- [保存して閉じる]をクリックします。

次回アラートがトリガされると、通知が選択した送信先に送信されます。アラート通知の送信先を変更するには、アラートソースを選択し、[アクション] > [購読の変更] をクリックします。また、[アクション] > [購読の変更] を使用して、購読する Crystal レポートアラートを変更することもできます。

アラートソースのカスタム設定を指定しない場合、通知は、アラートアプリケーションに対して設定された送信先デフォルトを使用して送信されます。

関連項目

- 130 ページの [アラートソースのアラート設定を管理する](#)

8.2.4 アラートを購読解除する

このタスクは、アラートの購読を解除するために実行します。

- アラートソースに移動し、それを選択します。
- [アクション] > [購読解除] をクリックします。
- 確認を求めるメッセージが表示されたら、[購読解除] をクリックします。

関連項目

- 126 ページの [セントラル管理コンソールにおけるアラートソースオブジェクトの検索](#)

8.2.5 他のユーザをアラートの購読者として指定する

- 1 アラートソースに移動し、それを選択します。
- 2 [アクション] > [購読者の管理] をクリックします。
[購読者の管理] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 ナビゲーションペインで、[受信者一覧] が選択されていることを確認します。
- 4 新しい購読者を追加するには、以下を実行します。
 - a [追加] をクリックします。
 - b [追加] ダイアログボックスで、ユーザおよびグループを [利用可能] リストから [購読済み] リストに移動させ、[デフォルト購読の追加] をクリックします。
 - c 必要に応じてその他のアラート設定を行います。
たとえば、購読するアラート (アラートソースに複数のアラートが含まれる場合) および送信先を変更することができます。アラートソースによっては、その他の設定も行うことができます。
 - d [保存して閉じる] をクリックします。
- 5 購読者の設定を編集する場合、以下の操作を行います。
 - a [受信者一覧] で購読者を選択し、[編集] をクリックします。
[購読の編集] ダイアログボックスが表示されます。
 - b 購読者が受け取るアラートを編集する場合、ナビゲーションリストで [アラート] をクリックし、関連するアラートを選択します。
アラートソースに複数のアラートが含まれている場合、すべてのアラートがここに一覧にされます。複数のアラートが含まれていない場合は、1 つのアラートのみが表示されます。
 - c アラートの送信先を編集する場合、ナビゲーションリストで [送信先] をクリックし、関連する送信先を選択します。
電子メール送信先は、Adaptive Job Server で有効化および設定されている場合に使用することができます。それ以外の場合、[マイアラート] のみを使用することができます。
 - d 必要に応じてその他のアラート設定を行います。
アラートソースによっては、追加の設定を行う必要がある場合があります。
 - e [保存して閉じる] をクリックして、[受信者一覧] に戻ります。
- 6 すべての変更を実行した後、[購読者の管理] ダイアログボックスで [保存して閉じる] をクリックします。

関連項目

- ・ 126 ページの [セントラル管理コンソールにおけるアラートソースオブジェクトの検索](#)

8.2.6 ほかのユーザのアラートの購読を解除する

- 1 アラートソースに移動し、それを選択します。
- 2 [アクション] > [購読者の管理] をクリックします。
[購読者の管理] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 ナビゲーションペインで、[受信者一覧] が選択されていることを確認します。
- 4 ユーザまたはグループを選択し、[購読解除] をクリックします。

関連項目

- ・ 126 ページの[セントラル管理コンソールにおけるアラートソースオブジェクトの検索](#)

8.2.7 ユーザをアラートから除外する

アラートからユーザを除外するには、次の手順に従います。

注

ユーザの除外は、グループの少数ユーザのみを購読者として指定する場合に有用です。この手順を使用して、グループ全体を購読者として指定し、アラート通知を受け取る必要がないユーザを除外します。[除外する] リストに含まれると、ユーザのその他すべての購読設定が無効化されます。

- 1 アラートソースに移動します。
- 2 [アクション] > [購読者の管理] をクリックします。
[購読者の管理] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 ナビゲーションペインで [除外リスト] が選択されていることを確認します。
- 4 ユーザおよびグループを [利用可能] リストから [除外する] リストに移動させます。
- 5 [保存して閉じる] をクリックします。

関連項目

- ・ 126 ページの[セントラル管理コンソールにおけるアラートソースオブジェクトの検索](#)

8.2.8 アラートソースのアラート設定を管理する

他の設定を指定しない場合、通知は、アラートアプリケーションに対して設定されたデフォルト送信先設定を使用して送信されます。アラートソースの設定を管理するには、次の手順に従います。

- 1 アラートソースに移動します。
- 2 [アクション] > [アラート設定の管理] をクリックします。
[アラート設定の管理] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 BI 起動パッドを送信先として有効化し、[マイアラートの有効化] を選択します。
このオプションを選択して、アラート通知が購読者の BI 起動パッドアカウントに送信され、購読者がアラート通知を [マイアラート] で表示できるようにすることができます。
- 4 送信先として電子メールを有効化するには、[電子メールを有効にする] を選択し、デフォルト電子メール設定とカスタム電子メール設定のどちらを使用するかを選択します。
[アプリケーション] エリアの [アラート] に対する設定がデフォルト設定です。カスタム電子メール設定については、必要に応じて以下のオプションを設定します。
 - ・ 差出人
 - ・ 宛先
 - ・ CC
 - ・ BCC
 - ・ 件名
 - ・ メッセージ
 - ・ 添付ファイルの追加
 - ・ [ファイル名] ([自動生成される名前] または [指定の名前])
- 5 [保存して閉じる] をクリックします。

関連項目

- ・ 126 ページの [セントラル管理コンソールにおけるアラートソースオブジェクトの検索](#)

8.2.9 アラート管理の推奨事項

アラートが最適に機能するようにするため、次のベストプラクティスに従ってください。

- ・ Crystal レポートアラートで、アラートを名前変更しない。BI プラットフォームでは、名前が変更された Crystal レポートアラートを新しいオブジェクトとして解釈します。この場合、そのアラートに対して行った購読設定はすべて失われます。
- ・ Everyone グループではなく、特定のグループを購読します。
- ・ 大容量のアラートに対しては、BI 起動パッドではなく電子メールを出力先に使用してください。BI 起動パッドに送信されるメッセージはシステム内に保存されます。メッセージが蓄積されると、システムパフォーマンスが低下する可能性があります。

プロフィールの管理

9.1 プロファイルの仕組み

プロフィールは、パブリケーションと共に動作し、コンテンツをパーソナライズします。

オブジェクトとしてのプロフィール

プロフィールは、ユーザおよびグループを分類する BI プラットフォーム内のオブジェクトでもあります。プロフィールは、レポート内のデータを個人用にカスタマイズするために使用されるプロフィール値に、ユーザとグループをリンクします。プロフィールは、プロフィールのレポートへの適用方法を示した“プロフィールターゲット”も使用します。異なるプロフィール値を割り当てることで、レポート内のデータを特定のユーザまたはグループに合わせて調整できます。多くの異なるカスタマイズバージョンのレポートがユーザに配信されます。

プロフィールおよびロール

プロフィールは、組織構造の中でのユーザとグループのロールを反映することがあります。たとえば、部署プロフィールに組織のすべての従業員を含むようにできます。ユーザとグループのそれぞれのプロフィール値は、組織内のロールを反映します（たとえば、財務、販売、マーケティングなど）。公開者がパブリケーションに部署プロフィールを適用すると、従業員は自分の部署に関連したデータを受け取ります。

プロフィールおよびドキュメントコンテンツ

プロフィールは、ドキュメントのコンテンツを詳細に設定したり、フィルタリングしたりするために使用され、データへのアクセスは管理しません。プロフィールを使用してデータのサブセットをユーザに表示することは、ユーザにデータ参照の制約をかけることとは異なります。ユーザに適切なアクセス権があつてドキュメントの元の形式にアクセスした場合、BI 起動パッドまたは CMC でドキュメントを表示することにより、そのドキュメントの完全データを参照できます。プロフィールは、データソースからクエリされたデータを変更またはセキュリティ保護することなく、データのビューをフィルタリングします。

9.1.1 プロファイルと公開のワークフロー

プロフィールを使用したパブリケーションをパーソナライズするためのプロセスは 2 つの部分で構成されます。最初に、CMC の [プロフィール] エリアでプロフィールを作成します。プロフィールの作成には、以下のタスクが含まれます。

- 1 プロファイルの作成
- 2 プロファイルにユーザおよびグループを追加する。
- 3 プロファイルの各ユーザおよびグループにプロフィール値を割り当てる。

- 4 必要に応じて、グローバルプロフィールターゲットを指定する。

パブリケーションの作成には、以下のタスクが含まれます。

- 1 受信者としてユーザおよびグループを追加します。
- 2 プロファイルのローカルプロフィールターゲットを指定してフィルタを適用する (Crystal レポート内のフィールドなど)。
- 3 パーソナライゼーションで使用するプロフィールを指定します。

関連項目

- ・ 153 ページの [パーソナライゼーション](#)

9.1.2 プロファイルを作成する

- 1 CMC の[プロフィール]管理エリアに移動します。
- 2 [管理] > [新規] > [新規プロフィール]の順にクリックします。
[新規プロフィールの作成]ダイアログボックスが開きます。
- 3 [タイトル]フィールドにプロフィールの名前を入力します。
- 4 [説明]フィールドに入力します。
- 5 [OK]をクリックします。

関連項目

- ・ 134 ページの [プロフィールターゲットおよびプロフィール値](#)
- ・ 136 ページの [プロフィール値を指定する](#)
- ・ 140 ページの [プロフィールのアクセス権の指定](#)

9.2 プロファイルターゲットおよびプロフィール値

プロファルを使用してパブリケーションを個人用にカスタマイズするには、プロパティのプロファイル値とプロフィールターゲットを設定する必要があります。

プロフィールターゲット

プロフィールターゲットとは、個人用にカスタマイズされたパブリケーションを提供するために、プロフィール値がフィルタを適用したり、対話するデータソースです。プロフィールターゲットには次の 2 つの種類があります。

- ・ ローカルプロフィールターゲット

ローカルプロファイルターゲットは、Web Intelligence ドキュメントの変数、または Crystal レポートのフィールドまたはパラメータにすることができます。ローカルプロファイルターゲットを使用する場合、ローカルプロファイルターゲットを含むソースドキュメントはパブリケーションの受信者に対してフィルタ処理されます。

- ・ グローバルプロファイルターゲット

グローバルプロファイルターゲットはユニバースにすることができます。同様に、ユニバース内のオブジェクトを指定する必要があります。このタイプのプロファイルターゲットは、ユニバースを使用するすべてのソースドキュメントをフィルタ処理できます。

注

グローバルプロファイルターゲットは、Web Intelligence ドキュメントを含むパブリケーションで使用できます。Crystal レポートではグローバルプロファイルターゲットは使用できません。

プロファイル値

プロファイル値は、特定のユーザまたはグループをプロファイルに割り当てるときに、これらのユーザやグループの詳細を示す属性です。プロファイルがパブリケーションに適用されると、そのプロファイルに割り当てられたユーザおよびグループは、自らに設定されたプロファイル値に従ってフィルタ処理されたパブリケーションバージョンを受信します。

注

プロファイル値をユーザとグループの両方に割り当てるとき、セキュリティ設定の場合と同様に、継承も有効になる点に注意してください。詳細については、SAP Help Portal (<http://help.sap.com>) で入手可能な『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』の「アクセス権の設定」の章を参照してください。

プロファイルターゲットおよびプロファイル値の使用

プロファイルターゲットとプロファイル値により、プロファイルは受信者に合わせてパブリケーションをカスタマイズできます。プロファイルに対して指定されているユーザとグループは、自身に最も関連するデータのみを表示する、同じパブリケーションのフィルタ済みバージョンを受け取ります。

グローバルな売上レポートを、北米、南米、アジアにある会社の地域営業チームに配布する例を考えます。各地域営業チームは、その地域に固有のデータのみ表示する必要があります。管理者は、“地域営業”プロファイルを作成し、各地域営業チームをグループとしてプロファイルに追加します。管理者は各地域の営業チームに対応するプロファイル値を割り当てます(たとえば、北米の営業チームには、北米を割り当てます)。公開中に、公開者はグローバルな売上レポートの“地域”フィールドをローカルプロファイルターゲットとして使用し、レポートにプロファイルを適用します。各地域営業チームに設定されたプロファイル値に従って、グローバルな売上レポートがフィルタ処理されます。グローバルな売上レポートが配布されると、各地域営業チームはその地域の売上データのみを表示する、カスタマイズされたバージョンを受信します。

9.2.1 グローバルプロファイルターゲットを指定する

このタスクでは、プロファイルのグローバルプロファイルターゲットを指定できます。ローカルプロファイルターゲットは、公開プロセス中に指定します。

- 1 CMC の [プロファイル] エリアで、プロファイルターゲットを指定するプロファイルを選択します。
- 2 [アクション] > [プロファイルターゲット] をクリックします。

[プロファイルターゲット] ダイアログボックスが表示されます。

- 3 [追加] をクリックします。
- 4 [ユニバース名] 一覧からユニバースを選択します。
- 5 [クラス名] フィールドにクラス名を入力するか、[ユニバースからオブジェクトを選択します] をクリックします。
- 6 [変数名] フィールドに変数名を入力するか、[ユニバースからオブジェクトを選択します] をクリックします。
- 7 [OK] をクリックします。

9.2.2 プロファイル値の指定

プロファイル値として、静的な値、式、または変数を使用できます。

最も一般的なプロファイル値の種類は、静的な値で、すべてのソースドキュメントの種類フィルタ処理に使用できます。1 つのプロファイルのユーザまたはグループに対して、複数の静的な値を入力することもできます。たとえば、複数の部署からデータを受信する管理者は、“部署” プロファイルの静的なプロファイル値として製造、設計、マーケティングなどを指定できます。

式は、ソースドキュメントの種類に固有の構文を使用します。SAP Crystal Reports および Web Intelligence 式を使用して、複雑なパーソナライゼーションとフィルタ処理を実行できます。ユーザに対して値の範囲、または指定された値よりも大きいあるいは小さい値の範囲をフィルタ処理する場合に、式が役に立ちます。

プロファイル値としてユーザ情報を使用する場合は、ユーザ名、フルネーム、および電子メールアドレスの変数を使用できます。これらの変数は、ユーザ情報にマップされてプレースホルダとして機能します。プロファイルをパブリケーションに適用すると、システムはユーザの最新情報を取得します。

プロファイル値に変数を使用することによって、情報の手動入力に関連する管理コストおよび発生する可能性のあるエラーを減らすことができます。管理者が AD ユーザをシステムにマップし、ユーザを 2 つのプロファイルに追加する状況を考えてみます。管理者はユーザのデータに使用する変数を指定することで、プロファイル値ごとに手動で情報を入力する手間がなくなり、入力エラーは発生しなくなります。

サードパーティユーザの場合、ユーザの情報が外部のシステムで変更された場合、BI プラットフォーム内のデータはパブリケーションが実行されたときにそれらの変更を反映して更新されます。

ヒント

サードパーティユーザアカウントのデータを外部ディレクトリのユーザ属性では上書きできない場合、そのユーザオブジェクトの [プロパティ] ダイアログボックスを開いて [フルネームと電子メールアドレスのインポート] チェックボックスをオフにします。

注

静的な値のプロファイル値は、ソースドキュメントの文字列フィールドだけをフィルタ処理できます。不適切なタイプのフィールドをプロファイルにマップすると、パーソナライゼーションは失敗します。

9.2.2.1 プロファイル値を指定する

このタスクでは、ユーザまたはグループにプロファイルを割り当てます。

- 1 CMCの [プロファイル] 管理エリアで、プロファイルを選択します。

ヒント

または、[ユーザとグループ] エリアでユーザまたはグループを選択することができます。

- 2 [アクション] > [プロファイル値]をクリックします。
[プロファイル値]ダイアログボックスが表示されます。
- 3 [追加]をクリックします。
- 4 [選択] をクリックします。
- 5 ユーザまたはグループ(それぞれ複数可)を選択し、[>]をクリックして右側の一覧に選択したものを移動します。
- 6 [OK] をクリックします。
- 7 選択したユーザまたはグループのプロファイル値を入力します。

さまざまな種類のプロファイル値を使用できます。静的プロファイル値または式を入力することができます。また、システムにマップされているサードパーティのユーザおよびグループとして、変数プロファイル値を指定することができます。

- ・ 値を使用する場合
 - a [値] をクリックします。
 - b [新しい値] フィールドに値を入力します。
 - c [追加] をクリックします。

ヒント

- ・ ユーザまたはグループに、複数の静的な値を追加できます。追加する静的な値ごとにステップ 1 から 3 ままでを繰り返します。
- ・ パーソナライゼーションのためにプロファイルでフィルタ処理できる値がユーザまたはグループに含まれていない場合は、%NULL% を静的なプロファイル値として使用できます。
- ・ フィルタ式を使用する場合
 - a [フィルタ式]をクリックします。
 - b 使用する式の種類に応じて、[Web Intelligence 式] フィールドまたは [Crystal Reports 式] フィールドに式を入力します。

注

Web Intelligence 式を使用するには、プロファイルに対するグローバルプロファイルターゲットを指定する必要があります。

ヒント

複数のドキュメントの種類にプロファイルを適用する場合は、3 つのフィールドすべてにフィルタ式を入力します。

- 8 [OK]をクリックします。

関連項目

- ・ 138 ページの[変数をプロファイル値として使用する](#)

9.2.2.2 変数をプロフィール値として使用する

このタスクでは、ユーザの変数プロフィール値をプロフィールに追加するときに指定できます。ユーザのフルネーム、アカウント名、または電子メールアドレスの変数プロフィール値を指定できます。

- 1 CMC の [プロフィール] エリアで、ユーザまたはグループを追加するプロフィールを選択します。
- 2 [アクション] > [プロフィール値] をクリックします。
[プロフィール値] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 [追加] をクリックします。
- 4 [選択] をクリックします。
- 5 左側の一覧からユーザまたはグループを選択し、[>] をクリックして右側の一覧にユーザまたはグループを移動します。
- 6 [OK] をクリックします。
- 7 [値] をクリックします。
- 8 [プレースホルダの追加] 一覧からプレースホルダ変数を選択し、[追加] をクリックします。

以下の表に、プロフィールの外部化に使用できる変数の概要を示します。

| 変数 | 説明 |
|-----------|----------------------------|
| タイトル | この変数は、ユーザのアカウント名に関連付けられます。 |
| ユーザのフルネーム | この変数はユーザのフルネームに関連付けられます。 |
| 電子メールアドレス | この変数はユーザの電子メールに関連付けられます。 |

ヒント

これらの変数はグループにも使用できます。電子メールアドレス変数をグループ全体で共通の電子メールアドレスにマップできます。このようにすると、システムが変数を解決して、グループの各メンバーの個別の電子メールアドレスを取得します。

プレースホルダは、[既存値] フィールドに表示されます。

- 9 [OK] をクリックします。

プロフィールを使用してパブリケーションをパーソナライズする場合、サードパーティユーザのプロフィール値は最新のユーザ情報で自動的に更新されます。たとえば、最後にパブリケーションを実行した後にユーザの電子メールアドレスが変更された場合、次にパブリケーションを実行すると、プロフィール値に使用されている電子メールアドレスが変更されます。

9.3 プロファイル間の競合の解消

ユーザおよびグループが複数のプロフィールに割り当てられている場合、プロフィール間の競合が発生します。2つの競合するプロフィールを持つドキュメントをユーザに配布する場合、この競合を解消する必要があります。

たとえば、トニーはメキシコオフィスの製品マネージャです。彼には、メキシコのデータのみを表示するように彼のドキュメントをパーソナライズする“地域”というプロフィールが割り当てられています。また、製品マネージャにデータを表示するように、彼のドキュメントをパーソナライズする“マネジメント”というプロフィールも割り当てられています。

これらのプロフィールを両方とも使用するドキュメントでは、トニーにどのようなデータが表示されるのでしょうか。1つのプロフィールに従えば、メキシコのデータを参照します。もう1つのプロフィールに従うと、製品マネージャのデータのみを参照します。

BI プラットフォーム での競合を解決するには、以下の2つの方法があります。

- ・ マージしない

BI プラットフォームは、パブリケーションで考えられるすべてのビューを判別し、それぞれの場合に固有のビューを使用します。例では、トニーはメキシコのデータを表示するようにパーソナライズされたパブリケーションと、製品マネージャのデータを表示するパブリケーションを受け取ります。

- ・ マージ

マージを選択すると、BI プラットフォームは考えられる異なるデータビューを判別し、競合していないプロフィールをマージします。この種類のプロフィールの解決は、ロールベースのセキュリティに対して設計されます。例では、トニーはメキシコの製品マネージャのデータを表示するようにパーソナライズされた単一のパブリケーションを受け取ります。

注

このマージしない/マージするシナリオは、継承されたプロフィール値のみに適用されます。ユーザが2つのプロフィール値に明示的に割り当てられている場合、パブリケーションインスタンスは必ずマージされます。

関連項目

- ・ 184 ページの[プロフィールの解決方法を指定する](#)

9.3.1 プロファイル値の競合

グループメンバーシップの結果としてユーザが2つの相反するプロフィール値を継承したときに、プロフィール値の競合が発生することがあります。通常、明示的に割り当てられたプロフィール値は、グループメンバーシップから継承したプロフィール値より優先されます。ユーザまたはサブグループに割り当てられたプロフィール値は、グループメンバーシップから継承したプロフィール値より優先されます。

たとえば、David は“北アメリカ営業”グループと“カナダ営業”グループに所属しています。“カナダ営業”グループは“北アメリカ営業”グループのサブグループです。2つのグループが両方とも“地域”プロフィールに追加されます。David は、“北アメリカ営業”グループからは“地域”プロフィール値北アメリカを継承し、“カナダ営業”グループからはカナダを継承します。この場合、サブグループに割り当てられるプロフィール値はグループに割り当てられるプロフィール値より優先され、David はカナダに対するデータのパブリケーションを受信します。

ユーザに対して、グループメンバーシップから継承したプロフィールと相反するプロフィール値が明示的に割り当てられたときにも、プロフィール値の競合が発生します。たとえば、Paula は“北アメリカ営業”グループに所属し、その“地域”プロフィール値は北アメリカです。管理者が、Paula に“地域”プロフィール値としてスペインを割り当てました。この場合、メンバーに割り当てられるプロフィール値はグループから継承したプロフィール値より優先され、Paula はスペインに対するデータのパブリケーションを受信します。

しかし、2 つの異なるグループから、1 つのプロフィールに対して異なるプロフィール値を継承することがあります。どちらのグループも階層上は対等で、一方が他方のサブグループではない場合、どちらのプロフィールも他方より優先されません。この場合、両方のプロフィールが有効になり、ユーザは各プロフィール値に対するパブリケーションインスタンスを受信します。

このようにプロパティ値が競合すると、重複するレポートインスタンスが複数の異なるパブリケーションインスタンスに含まれ、同じユーザに送信される場合があります。たとえば、2 つの北米オフィスのマネージャを務める Sandra は、2 つのレポートを含むパブリケーションを電子メールで受信しています。レポート 1 は、レポートプロフィールを使用してカスタマイズされています。このレポートプロフィールで Sandra はグループメンバーシップから競合するプロフィール値米国およびカナダを継承します。レポート 2 は役割プロフィールを使用してカスタマイズされています。この役割プロフィールで Sandra はプロフィール値マネージャを継承します。プロフィール値の競合がない場合は、パーソナライゼーションの後に、Sandra はマージされたレポート 1 インスタンス (米国とカナダのデータ) およびレポート 2 インスタンス (マネージャデータ) を含む 1 つの電子メールを受信します。競合がある場合、Sandra は 2 つの電子メールを受信します。1 つの電子メールには、レポート 1 の米国のインスタンスが含まれ、もう 1 つの電子メールにはレポート 1 のカナダのインスタンスが含まれています。どちらの電子メールにも、同じレポート 2 のマネージャインスタンスが含まれています。

ヒント

重複するパブリケーションインスタンスの送信の原因となるプロフィール値の競合をできる限り防ぐには、ユーザがグループメンバーシップからプロフィール値を継承できるようにする代わりに、プロフィール値をユーザに明示的に割り当てます。

9.4 プロファイルのアクセス権の指定

ユーザおよびグループに対して、プロフィールへのアクセスを許可または拒否することができます。プロフィールの構成方法によっては、特定の従業員または部署だけが特定のプロフィールを利用できるようにすることができます。

CMC に対するアクセス権があるユーザは、参照するアクセス権のあるプロフィールだけを閲覧できるので、アクセス権を使用して特定のグループに対してプロフィールを非公開にすることもできます。たとえば、IT 関連のプロフィールへのアクセス許可を IT 管理グループだけに限れば、人事管理グループのユーザはこれらのプロフィールを閲覧することはできません。したがって、プロフィールリストがあれば人事管理グループにも閲覧させることが可能になります。

BI プラットフォーム内のアクセス権モデルの詳細については、SAP ヘルプポータル (<http://help.sap.com>) で入手可能な『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』の「アクセス権の設定」の章を参照してください。

公開

10.1 公開について

公開により、Crystal レポートおよび Web Intelligence ドキュメントなどのドキュメントはディスクに保存され、BI プラットフォームで Web の表示、アーカイブ、取得、スケジュール用に管理されて、電子メールまたは FTP サーバ経由で自動的に使用可能になります。BI 起動パッドまたは CMC を使用して、ドキュメントを異なるそれぞれのユーザ (受信者) 用にカスタマイズしたり、スケジュールして一定の間隔で実行したり、また、BI 受信ボックスや電子メールアドレスなどの複数の出力先に送信したりすることができます。

10.2 パブリケーションとは

パブリケーションは、不特定多数の受信者に配信するドキュメントのコレクションです。ドキュメントを配信する前に、公開者はメタデータのコレクションを使用してパブリケーションを定義します。このメタデータには、パブリケーションのソース、受信者、および適用されるパーソナライゼーションが含まれます。

パブリケーションを使用すると、組織内への情報提供をより効果的に行うことができます。

- ・ 個人またはユーザグループに個人用またはグループ用にカスタマイズしたフィルタを適用して、情報を簡単に配信できます。
- ・ イン트라ネット、エクストラネット、またはインターネット経由でパスワード保護されたポータルを使って個人またはグループに必要なビジネス情報を提供することができます。
- ・ ユーザが自分でドキュメント処理要求を送信する手間が省かれるので、データベースへのアクセスを最小限に抑えることができます。

Crystal レポートまたは Web Intelligence ドキュメントに基づいて、さまざまな種類のパブリケーションを作成できます。

10.3 パブリケーションの概念

10.3.1 レポートバースト

公開中、ドキュメント内のデータがデータソースに対して最新表示され、パーソナライズされてから、パブリケーションが受信者に配信されます。この結合されたプロセスをレポートバーストと呼びます。パブリケーションのサイズや、対象受信者の数に応じて、いくつかのレポートバースト方法の中から選択できます。

- すべての受信者のデータベースフェッチ

このレポートバースト方法を使用すると、パブリケーションのすべてのドキュメントが一度だけ最新表示され、ドキュメントは受信者ごとにパーソナライズされて配信されます。このレポートバーストの方法では、公開者のデータソースログオン認証情報を使用して、データを最新表示します。

これは、Web Intelligence ドキュメントパブリケーションのデフォルトオプションです。このオプションは、データベースにおける公開の影響をできる限り抑える場合にも推奨されます。このオプションは、ソースドキュメントが静的ドキュメントとして配信される場合にも安全です。たとえば、Web Intelligence ドキュメントをその元の形式で受信した受信者は、ドキュメントを変更したり、他の受信者に関連するデータを表示できます。ただし、ドキュメントが PDF として配信された場合は、そのデータは安全です。

注

- このオプションは、Crystal レポートが元の形式で配信されたかどうかに関係なく、ほとんどの Crystal レポートに対して安全です。
- このオプションのパフォーマンスは、受信者数によって異なります。
- 受信者のバッチごとのデータベースフェッチ

このレポートバースト方式を使用すると、パブリケーションは最新表示され、パーソナライズされてから、受信者にバッチで配信されます。このレポートバースト方式では、公開者のデータソースログオン認証情報を使用してデータが最新表示されます。バッチは受信者に対して指定したパーソナライゼーション値に基づきます。バッチサイズは、指定したパーソナライゼーション値に応じて異なり、設定できません。

これは、Crystal レポートパブリケーションのデフォルトオプションです。大容量のシナリオでも、このオプションが推奨されます。このオプションを使用すると、さまざまなサーバでバッチを同時に処理できるので、大量のパブリケーションに必要な処理負荷や時間を大幅に削減できます。

注

このオプションは、Web Intelligence ドキュメントでは使用できません。

- 受信者ごとのデータベースフェッチ

ドキュメント内のデータは受信者ごとに最新表示されます。たとえば、1 つのパブリケーションに受信者が 5 人いる場合、パブリケーションは 5 回最新表示されます。このレポートバースト方式では、受信者のデータソースログオン認証情報を使用してデータが最新表示されます。

このオプションは、パブリケーションをできる限り安全に配信する必要がある場合に推奨されます。

注

ユニバースまたはビジネスビューに基づく Crystal レポートは、セキュリティを最大化するために[受信者ごとのデータベースフェッチ]をサポートします。

関連項目

- ・ 184 ページの[レポートバースト方式を指定する](#)

10.3.2 配信ルール

注

この機能は、Web Intelligence ドキュメントでは使用できません。

配信ルールは、パブリケーション内のドキュメントの処理および配布方法に影響します。ドキュメントに配信ルールを設定する場合は、ドキュメント内の内容が特定の条件と一致する場合にのみパブリケーションが配信されることを指定します。配信ルールには次の 2 種類があります。

- ・ 受信者配信ルール

受信者のインスタンス内のデータが配信ルールに一致すると、そのインスタンスは受信者に配信されます。

- ・ グローバル配信ルール

指定されたドキュメント内のデータが配信ルールに一致すると、パブリケーションはすべての受信者に配信されます。

注

グローバル配信ルールに対して指定されるドキュメントは、パブリケーションで使用されている 1 つまたは複数のドキュメントと異なる場合があります。たとえば、パブリケーション内のドキュメントではなく、動的受信者ソースとして使用されるドキュメントにグローバル配信ルールを設定できます。

パブリケーションに受信者配信ルールとグローバル配信ルールが設定されている場合、グローバル配信ルールが最初に評価され、パブリケーションが処理されるかどうか決まります。パブリケーションがグローバル配信ルールに一致すると、システムによって受信者配信ルールが評価され、受信者ごとにどのインスタンスを処理および配布するかが決定されます。

配信ルールの設定方法は、公開するドキュメントの種類に応じて異なります。Crystal レポートの場合は、レポートデザイナーが Crystal レポートで作成した名前の付いたアラートに基づいて配信ルールを指定します。配信ルールは、パーソナライズされたパブリケーションにデータが含まれているかどうかに基づいて設定することもできます。

「グローバル配信ルールに一致している場合」の図は、アラートに基づくグローバル配信ルールの動作を示しています。この図の例では、グローバル配信ルールは、パブリケーション内のドキュメントに設定されています。Crystal レポートには、100,000 を超える金額に対する“売上げ”アラートが含まれています。公開者は“売上げ”アラートに基づいてグローバル配信ルールを作成し、売上げが 100,000 を超えた場合にだけ Crystal レポートがすべての受信者に配信されるようにします。この場合、配信ルールに一致すると、Crystal レポートが配信されます。

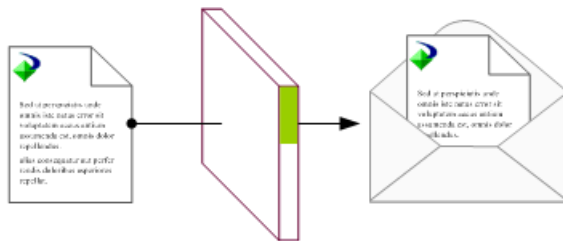


図 10-1: グローバル配信ルールに一致している場合

「受信者配信ルールに一致しない場合」の図は、受信者配信ルールの動作を示しています。公開者は、レポートに特定の受信者のデータが含まれている場合にのみレポートがその受信者に配信されるよう、Crystalレポートに受信者配信ルールを設定します。レポートが受信者ごとにパーソナライズされている場合、緑の受信者はCrystalレポートにデータを持っていません。つまり、青の受信者とオレンジの受信者だけがパブリケーションを受信します。

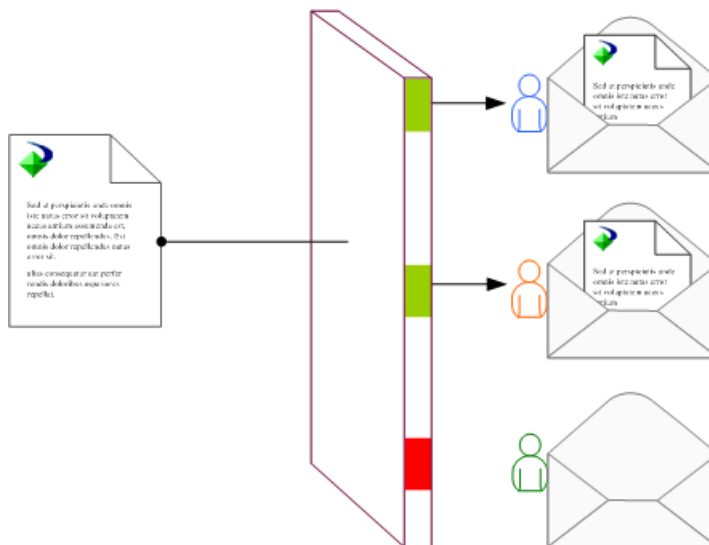


図 10-2: 受信者配信ルールに一致しない場合

複数のドキュメントおよびオブジェクトを含むパブリケーションの場合、ドキュメントごとに独自の受信者配信ルールを設定できます。これを行う場合、次の処理および配信オプションを使用できます。

- ・ パブリケーション内のあるドキュメントが、ある受信者の受信者配信ルールに一致しない場合、パブリケーション全体がその受信者に対して配信されません。
- ・ パブリケーション内のあるドキュメントが、その受信者の受信者配信ルールに一致しない場合、そのドキュメントは配信されませんが、パブリケーション内の他のドキュメントはすべてその受信者に配信されます。

配信ルールは、多くの受信者を対象とするパブリケーションを効率的に処理および配布できるので有用です。保険会社の公開者が、次のオブジェクトを含む顧客向けのパブリケーションを作成する例を考えてみます。

- ・ 保険請求書(パーソナライズされた Crystal レポート)
- ・ 月間ステートメント(パーソナライズされた Crystal レポート)
- ・ 支払方法に関するパンフレット(PDF)

保険請求書には、0 を超える金額に対して「支払額」アラートが存在します。公開者は、保険請求書に対して「支払額」受信者配信ルールを作成して、顧客が支払を行う必要がある場合にのみ保険請求書が発行および

配布されるようにします。また、公開者は、顧客が保険料を支払わない場合に月間ステートメントやパンフレットを顧客が受信しないようにする必要があるため、保険請求書が配信ルールに一致しない場合、パブリケーション全体が公開されないように指定します。パブリケーションを実行すると、パブリケーションが処理されて、支払義務のある顧客にのみ配信されます。

注

パブリケーションの実行時に Crystal レポートパブリケーションの印刷がスケジュールされている場合、パブリケーション内のドキュメントが配信ルールに一致せず、受信者に配信されない場合でも、印刷ジョブは実行されます。これは、印刷ジョブがパーソナライゼーションのときに処理され、配信ルールはパーソナライズ後のパブリケーションに適用されるからです。

関連項目

- ・ 178 ページの[Crystal レポートのグローバル配信ルールを設定する](#)」
- ・ 177 ページの[Crystal レポートの受信者配信ルールを設定する](#)」

10.3.3 動的受信者

動的受信者は、BI プラットフォーム外に存在するパブリケーション受信者です。動的受信者は、データベースや LDAP または AD ディレクトリなどの外部データソースのユーザ情報をすでに持っていますが、BI プラットフォームのユーザアカウントは持っていません。

パブリケーションを動的受信者に配布するには、動的受信者ソースを使用します。これは、BI プラットフォーム外のパブリケーション受信者に関する情報を提供するドキュメントまたはカスタムデータプロバイダです。動的受信者ソースでは、外部のデータソースに直接リンクして最新データを取得することで、動的受信者の情報を簡単に維持できます。また、動的受信者ソースを使用すると、パブリケーションを動的受信者に配布する前に動的受信者の BI プラットフォームユーザアカウントを作成する必要がないため、管理コストが削減されます。

請求元の会社が、BI プラットフォームユーザではない顧客に請求書を配布する状況を考えてみます。顧客情報はすでに外部データベースに存在します。公開者は、外部データベースに基づいてドキュメントを作成し、パブリケーションの動的受信者ソースとしてドキュメントを使用します。顧客は請求パブリケーションを受信し、公開者とシステム管理者は動的受信者ソースを使用して最新の連絡先情報を管理できます。

動的受信者ソースを使用して、次のことを実行できます。

- ・ 1 つのパブリケーションを、動的受信者と BI プラットフォームユーザに同時に配布できます。

注

- ・ パブリケーションごとに 1 つの動的受信者ソースのみ使用できます。
- ・ 動的受信者はパブリケーションから自身を自動的に購読解除できません。
- ・ パブリケーションを作成するときに動的受信者の一覧をプレビューできます。
- ・ パブリケーションをすべての動的受信者に配布するか、特定の動的受信者を含めたり除外したりするように指定できます。
- ・ パブリケーションを電子メールや FTP サーバなどの外部の宛先に配布できます。

注

動的受信者は BI プラットフォームのユーザアカウントを持たないため、BI 受信ボックスは動的受信者には無効な宛先です。

動的受信者ソースを使用するには、次の値ごとに 1 つの列を指定します。

- ・ 受信者 ID(必須)
- ・ 受信者のフルネーム
- ・ 電子メールアドレス

受信者 ID 列によって、パブリケーションを受信する動的受信者の数が決まります。動的受信者ソースは受信者 ID に従って並べ替えることをお勧めします。

レポートの作成についての概要は、『SAP Crystal Reports ユーザガイド』を参照してください。カスタムコーディングされた動的受信者ソースの作成については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Java SDK 開発者ガイド』を参照してください。

関連項目

- ・ 163 ページの[動的受信者を指定する](#)

10.3.4 出力先

出力先はパブリケーションの配信先です。出力先には、パブリケーションが格納される BI プラットフォーム内の場所、BI 受信ボックス、電子メールアドレス、FTP サーバ、およびファイルシステム上のディレクトリを指定できます。1 つのパブリケーションに複数の出力先を指定できます。

複数の Crystal レポートを公開する場合は、それらを出力先ごとに 1 つの PDF にマージすることができます。

パブリケーションを 1 つの ZIP ファイルとして公開する場合は、出力先ごとにインスタンスを ZIP ファイルに圧縮または解凍することができます (たとえば、電子メール受信者用のインスタンスは ZIP に圧縮し、BI 受信ボックスではそれらのインスタンスを解凍した状態にしておくことができます)。

10.3.4.1 指定可能な出力先

| 出力先 | 説明 |
|-----------------------|---|
| デフォルトの Enterprise の場所 | <p>パブリケーションには、そのパブリケーションを作成したフォルダからアクセスできます。デフォルトの出力先について、次のオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none">・ すべての PDF ドキュメントをマージする(Crystal レポートのみ)。・ パブリケーションを Zip ファイルとしてパッケージ化する。 <p>注 デフォルトの場所に配布するか、またはショートカットを受信者の BI 受信ボックスに配布する場合は、すべての受信者がアクセスできるフォルダを選択します。</p> |
| BI 受信ボックス | <p>受信者の BI 受信ボックスに送信するには、次のオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 各ユーザにオブジェクトを配信する。・ 名前を入力する、プレースホルダを使用する、またはデフォルトの名前を使用する。・ パブリケーションをショートカットまたはコピーとして送信する。・ すべての PDF ドキュメントをマージする(Crystal レポートのみ)。・ パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) としてパッケージ化する。 |
| 電子メール | |

| 出力先 | 説明 |
|---------|---|
| | <p>パブリケーションは、メッセージとともに電子メールで受信者に送信されます。Adaptive Job Server で電子メールが正しく設定されていることを確認します。パブリケーションは、電子メールで受信者に送信されます。電子メール受信者の場合は、[差出人] フィールドに必要な情報を入力することをお勧めします。[差出人] フィールドに入力しない場合、BI プラットフォームでは、パブリッシャのアカウントに関連付けられている電子メールアドレスが使用されます。パブリッシャのアカウントに電子メールアドレスがない場合、BI プラットフォームでは、Adaptive Job Server の設定が使用されます。</p> <p>注</p> <p>[差出人] フィールド、パブリッシャのアカウント、または Adaptive Job Server で [差出人] が指定されていない場合は、パブリケーションは失敗します。</p> <p>次のような選択肢もあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 各ユーザにオブジェクトを配信する。 ・ [宛先] フィールドに入力する、または電子メールアドレスのプレースホルダを入力する。 ・ [Cc] フィールドに入力する。 ・ [Bcc] フィールドに入力する。 ・ 件名を入力するか、または [件名] フィールドに使用するプレースホルダを選択する。 ・ パブリケーションと一緒に配信される [メッセージ] フィールドにテキストを入力する。[メッセージ] フィールドに使用するプレースホルダを一覧から選択し、電子メールの本文に動的コンテンツドキュメントを埋め込むこともできます。 ・ ソースドキュメントのインスタンスを電子メールに添付する。 ・ 添付ファイル名が自動生成されるようにする、名前を指定する、またはプレースホルダの一覧から適切な名前を選択する。 ・ すべての PDF ドキュメントをマージする(Crystal レポートのみ)。 ・ パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) としてパッケージ化する。 <p>注</p> <p>この出力先を使用する前に、Adaptive Job Server で電子メール設定が正しく設定されていることを確認します。パブリケーションを電子メールで送信している場合は、[宛先] フィールドにプレースホルダ %\$EMAIL_ADDRESS% があり、[各ユーザにオブジェクトを配信] が選択されていることを確認してください。</p> |
| FTP サーバ | |

| 出力先 | 説明 |
|----------|--|
| | <p>FTP サーバの場合は、[ホスト]フィールドに入力します。[ホスト]フィールドに入力しない場合、Adaptive Job Server に設定されているオプションが使用されます。次のオプションのいずれかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ポート番号、ユーザ名とパスワード、およびアカウントを指定する。 ・ ディレクトリ名を入力する。 ・ ファイル名が自動生成されるようにする、カスタム名を入力する、またはプレースホルダの一覧から名前を選択する。[指定の名前]を選択した場合、ファイルの拡張子も追加することができます。 ・ すべての PDF ドキュメントをマージする(Crystal レポートのみ)。 ・ パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) としてパッケージ化する。 |
| ローカルディスク | <p>出力先としてローカルディスクを選択した場合、パブリケーションのディレクトリを入力する必要があります。次のような選択肢もあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 各ユーザにオブジェクトを配信する。 ・ ファイル名が自動生成されるようにする。または、適切なファイル名を入力するか、プレースホルダの一覧から選択する。名前を指定する場合は、ファイルの拡張子を選択して追加することもできます。 ・ ファイルの場所にアクセスするためのユーザ名とパスワードを入力する。 ・ すべての PDF ドキュメントをマージする(Crystal レポートのみ)。 ・ パブリケーションを圧縮ファイル (.zip) としてパッケージ化する。 |

注

- ・ デフォルトでは、すべての出力先に対して [各ユーザにオブジェクトを配信] がオンになっています。ただし、場合によっては、各ユーザにオブジェクトを配信しないようにする場合もあります。たとえば、3 人の受信者が同一のパーソナライズ値を持っていると、各パブリケーションインスタンスの同じデータが受信されます。[各ユーザにオブジェクトを配信] をオフにした場合は、1 つのパブリケーションインスタンスが生成され、それが 3 人の受信者すべてに配信されます。[各ユーザにオブジェクトを配信] をオンにした場合は、同じパブリケーションインスタンスが 3 回(受信者ごとに 1 回ずつ)配信されます。また、パブリケーションを FTP サーバまたはローカルディスクの出力先に送信し、何人かの受信者が同じパーソナライゼーション値を持っている場合は、[各ユーザにオブジェクトを配信]を無効にすると、処理時間全体を短縮できます。
- ・ [各ユーザにオブジェクトを配信]をオフにした場合は、出力先を設定するときに使用するすべてのプレースホルダに、受信者ではなく公開者の情報が含まれます。

10.3.5 パブリケーションソースドキュメント名のパーソナライズされたプレースホルダ

[パーソナライゼーション] を使用してソースドキュメントのデータをフィルタした場合、パーソナライズされたプレースホルダを使用してパブリケーションインスタンスに名前を付けることができます。

パーソナライズされたプレースホルダをファイル名に組み込むと、受信者はフィルタされたデータを簡単に識別できます。パーソナライゼーション値が異なる複数のユーザグループに属している受信者は、同じソースドキュメントの複数のバージョンの違いをそのコンテンツを表示することなく区別できます。

パーソナライゼーションがパブリケーションに設定されると、パーソナライズされたプレースホルダが [出力先] ページの [プレースホルダの追加] 一覧に表示されます。

注

パブリケーションに複数のソースドキュメントが含まれている場合、すべてのソースドキュメントが同じフィールドでフィルタされていなければ [指定の名前を使用する] の [プレースホルダの追加] 一覧にパーソナライズされたプレースホルダが表示されません。

レポートのすべてのフィルタで、次のパーソナライズされたプレースホルダが表示されます。

- ・ フィールド名に対応するプレースホルダ。%<field name>-NAME%として表されるプレースホルダは、実行時にフィールド名に置換されます。このプレースホルダはすべての受信者に表示されます。
- ・ フィールドのパーソナライズ値に対応するプレースホルダ。%<field name>-VALUE%として表されるプレースホルダは、レポートをフィルタするために使用されるフィールドの値に置換されます。このプレースホルダは受信者ごとに固有です。

パーソナライズされたプレースホルダを使用するには、[選択した出力先のオプションを表示] エリアで以下の選択を行います。

- 1 該当するパブリケーション名の [指定の名前を使用する] オプションを選択し、[プレースホルダの追加] 一覧から必要なプレースホルダを選択します。複数のプレースホルダを追加するには、この手順を繰り返します。テキストとプレースホルダを結びつけるには、まずテキストを入力してからプレースホルダを選択します。
- 2 個々のドキュメントの [ドキュメントごとの指定の名前] オプションを選択します。各ドキュメントのタイトルのそばにある [プレースホルダの追加] 一覧から必要なプレースホルダを選択します。複数のプレースホルダを追加するには、この手順を繰り返します。テキストとプレースホルダを結びつけるには、まずテキストを入力してからプレースホルダを追加します。
- 3 保存して終了するには、[保存して閉じる] を選択します。選択内容は保存するが、別の出力先またはオプションを選択する場合は、[保存] を選択します。

例

カナダの営業マネージャとアメリカの営業マネージャという 2 つのユーザグループに四半期売上レポートを公開するとします。Crystal レポートの名前は国別四半期売上です。パーソナライゼーションが国フィールドに適用されていて、各グループでそれぞれの国のデータを受信します。アメリカの営業マネージャでは国フィールドのプロファイル値が "米国" で、カナダの営業マネージャでは国フィールドのプロファイル値が "カナダ" です。

次の 3 つのパーソナライズされたプレースホルダが [プレースホルダの追加] 一覧に表示されます。

- ・ %Document Name%. %SI_DOCUMENT_NAME% コードがフィールドに挿入されます。
- ・ %Country - Query 1-NAME%. %SI_field name-NAME% コードがフィールドに挿入されます。
- ・ %Country - Query 1-VALUE%. %SI_field name-VALUE% コードがフィールドに挿入されます。

アメリカの営業マネージャに送信されるレポート (米国のデータのみが表示されるようにフィルタされている) には、国別四半期売上_米国.pdf という名前が付きます。カナダの営業マネージャに送信されるレポート (カナダのデータのみが表示されるようにフィルタされている) には、国別四半期売上_カナダ.pdf という名前が付きます。

10.3.6 電子メールフィールドのパーソナライズされたプレースホルダ

パブリケーションのすべてのソースドキュメントが同じフィールドを使用してパーソナライズされている場合、パブリケーションを電子メールで送信するときに [件名] および [メッセージ] フィールドにパーソナライズされたプレースホルダを使用できます。

パーソナライゼーション時にレポートで使用されたフィルタごとに、以下の 2 つのプレースホルダが [プレースホルダの追加] 一覧に表示されます。

- ・ %Field - Query 1-VALUE%。これはフィールドのパーソナライズ値です。実行時に、レポートをフィルタするために使用されるフィールドの値に置換されます。このプレースホルダは受信者ごとに固有です。
- ・ %Field - Query 1-NAME%。これはフィールドの名前です。実行時に、フィールドの実際の名前に置換されます。このプレースホルダはすべての受信者で同じです。

注

パブリケーションに複数のソースドキュメントが含まれている場合、すべてのソースドキュメントが同じフィールドでフィルタされていないければ [件名] および [メッセージ] フィールドの [プレースホルダの追加] 一覧にパーソナライゼーションパラメータが表示されません。

10.3.7 形式

形式は、パブリケーションのドキュメントを公開する際のファイルの種類を定義します。1 つのドキュメントを複数の形式で公開したり、これらのインスタンスを複数の出力先に配信することができます。複数のドキュメントを含むパブリケーションの場合、それぞれのドキュメントに異なる形式を指定できます。Web Intelligence ドキュメントを含むパブリケーションの場合は、ドキュメント全体またはドキュメント内の 1 つのレポートタブをさまざまな形式に公開できます。

ドキュメントに対して選択したすべての形式は、パブリケーションのすべての受信者に適用されます。たとえば、1 つのドキュメントを、ある受信者には Microsoft Excel ファイル形式で公開し、別の受信者には PDF 形式で公開することはできません。受信者がそれらの形式でインスタンスを受信する必要がある場合、受信者は、Microsoft Excel ファイルと PDF を 1 つずつ受信します。

10.3.7.1 指定可能な形式

| ドキュメントの種類 | 形式 | 説明 |
|-----------|-----------------------------|---|
| すべての種類 | mHTML | <p>ドキュメントは mHTML 形式で公開されます。ドキュメントの内容を電子メールに mHTML として埋め込むこともできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> Crystal レポートの場合は、1 つのレポートの内容を電子メールに埋め込むことができます。 Web Intelligence ドキュメントの場合は、1 つのレポートタブの内容を電子メールに埋め込むことができます。 <p>MHTML を選択すると、出力にはドキュメント選択画面にソースドキュメントを配置した順序が反映されます。たとえば、画面上部に表示されていたドキュメントは電子メールの上部に表示されます。</p> |
| | PDF形式 (.pdf) | <p>ドキュメントは静的な PDF として出力されます。</p> <p>注 これを PDF のマージオプションとともに使用すると、出力にはドキュメント選択画面にソースドキュメントを配置した順序が反映されます。たとえば、画面上部に表示されていたドキュメントはマージされた PDF の上部に表示されます。</p> |
| | Microsoft Excel ファイル (.xls) | <p>ドキュメントは Microsoft Excel ファイルとして公開されて、ドキュメントの元の形式ができる限り保持されます。</p> |

| ドキュメントの種類 | 形式 | 説明 |
|-------------------------|------------------------------------|--|
| Crystal レポート | データのための Microsoft Excel ファイル(.xls) | Crystal レポートは、データのみを含む Microsoft Excel ファイルとして公開されます。 |
| | XML | Crystal レポートは XML 形式で公開されます。 |
| | Crystal レポート(.rpt) | Crystal レポートは元の形式で公開されます。 |
| | Crystal レポート読み取り専用 (.rpitr) | Crystal レポートは読み取り専用形式で公開されます。 |
| | Microsoft Word ファイル (.doc) | Crystal レポートは Microsoft Word ファイルとして公開され、Crystal レポートの元の形式が保持されます。このオプションは、受信者がパブリケーションに多くの変更を加えずに表示する場合に推奨されます。 |
| | 編集可能 Microsoft Word ファイル(.rtf) | Crystal レポートは簡単に編集できる Microsoft Word ファイルとして公開されます。このオプションは、受信者がパブリケーションを表示し、その内容を編集する場合に推奨されます。 |
| | リッチテキスト(.rtf) | Crystal レポートはリッチテキスト形式で公開されます。 |
| | テキスト(.txt) | Crystal レポートはテキスト形式で公開されます。 |
| | ページ区切り付きテキスト (.txt) | Crystal レポートはテキスト形式で公開され、パブリケーションの内容がページで区切られます。 |
| | タブ区切りテキスト(.txt) | Crystal レポートはテキスト形式で公開され、タブを使用して各列の内容が区切られます。 |
| | 文字区切り値(.csv) | Crystal レポートは文字区切り値ファイルとして公開されます。 |
| Web Intelligence ドキュメント | Web Intelligence ドキュメント (.wid) | Web Intelligence ドキュメントは元の形式で公開されます。 |

10.3.8 パーソナライゼーション

パーソナライゼーションとは、パブリケーションの受信者に対して関連するデータのみが表示されるように、ソースドキュメントのデータをフィルタする処理です。パーソナライゼーションはデータのビューを変更しますが、必ずしもデータソースからクエリされたデータが変更されたり保護されるわけではありません。

以下の図では、パーソナライゼーションの動作方法を示します。パーソナライゼーションされないレポートには、データの種類 1、2、および 3 が含まれます。そのレポートにパーソナライゼーションが適用されると、ユーザは自分に関連するデータのみを受け取ります。つまり、ユーザ 2 は種類 2 のデータ、ユーザ 1 は種類 1 のデータ、ユーザ 3 は種類 3 のデータのみを受け取ります。

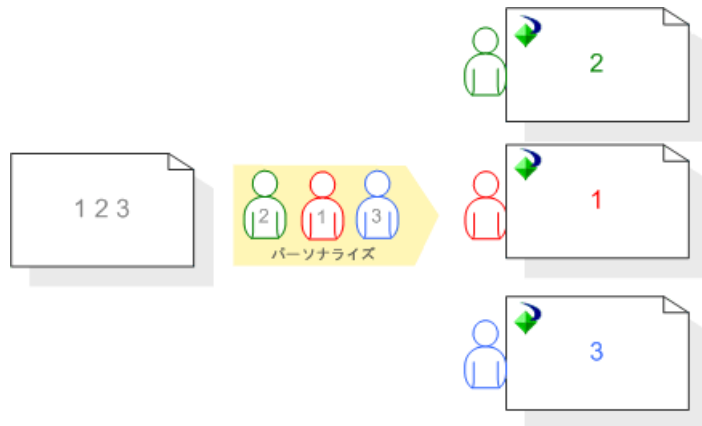


図 10-3: パーソナライゼーション

受信者に対してソースドキュメントをパーソナライゼーションすると、次のようなことができます。

- ・ 受信者が Enterprise 受信者の場合、パブリケーションを設計するときにプロファイルを適用できます。パブリケーションをパーソナライズする前に、Enterprise 受信者のプロファイルを BI プラットフォームで設定する必要があります。
- ・ 受信者が動的受信者の場合、ソースドキュメントのデータフィールドまたは列を動的受信者ソースのデータにマップできます。たとえば、ソースドキュメントの“顧客 ID”フィールドを動的受信者ソースの“受信者 ID”フィールドにマップできます。

注

パーソナライゼーションの完了後、パーソナライズされていないパブリケーションインスタンスを受信する受信者の一覧を表示するには、ナビゲーション一覧で[詳細]をクリックし、[パーソナライゼーションが適用されない完全なパブリケーションを受信するユーザを表示します。]を選択します。

10.3.9 パブリケーション拡張

パブリケーション拡張とは、ビジネスロジックをパブリケーションに適用するコードのライブラリです。処理または配信後に、パブリケーションの自動カスタマイズが必要な場合に拡張を使用します。

パブリケーション拡張を使用して、処理後に次のようなタスクを実行できます。

- ・ 同じタイプのドキュメントをマージする。たとえば、複数の Excel スプレッドシートを 1 つの Excel ワークブックにマージできます。
- ・ ドキュメントにパスワード保護を追加する、またはドキュメントを暗号化する。
- ・ ドキュメントを別の形式に変換する。
- ・ パブリケーションジョブ用のカスタムログファイルを作成する。

注

パブリケーション拡張は、CMC でのみ指定できます。BI 起動パッドでパブリケーションを作成している場合は、この機能を使用できません。

パブリケーション拡張の詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Java SDK 開発者ガイド』を参照してください。

関連項目

- ・ 181 ページの[パブリケーション拡張を指定する](#)

10.3.10 購読

購読では、パブリケーションの受信者ではないユーザが、最新インスタンスを表示するためにサインアップすることができます。購読者は、いつでもパブリケーションから購読解除を行うことができます。適切な権限を持っているユーザは、他のユーザの購読および購読解除できます。

パブリケーションの購読または購読解除を実行するには、BI プラットフォームのアカウントおよび以下の権限が必要です。

- ・ BI 起動パッドまたは CMC へのアクセス権
- ・ パブリケーションの表示権限
- ・ ユーザアカウントの購読権限 (Enterprise 受信者用)

注

動的な受信者は、自動的に購読または購読解除を行うことができません。

関連項目

- ・ 186 ページの[パブリケーションを購読または購読解除する](#)

10.3.11 Crystal レポート向け PFD のマージ

Crystal レポートの PDF インスタンスと静的 PDF ドキュメントは、利便性を高めるために 1 つの PDF にマージすることができます。すべての静的 PDF ソースドキュメントは、マージされた PDF に格納されます。PDF ファイル以外の静的ソースドキュメントは、マージされた PDF から除外されます。

マージされた PDF を使用して、次のことを実行することもできます。

- ・ 目次を追加および書式設定する。
- ・ 実行中のページ番号を挿入する。
- ・ PDF の表示および編集に必要なユーザパスワードと所有者パスワードを追加する。
- ・ 受信者が PDF で実行できる処理に対して制限を設定する。

10.4 公開に必要な権限

| ロール | タスク | 必要な権限 |
|-------------|-----------------------------|---|
| ドキュメントデザイナー | パブリケーションに基づくドキュメントを作成する。 | なし |
| ドキュメントデザイナー | ドキュメントを BI プラットフォームに追加する。 | ・ ドキュメントを追加するフォルダまたはカテゴリに対する表示および追加権限 |
| ドキュメントデザイナー | 動的受信者ソースとして使用するドキュメントを作成する。 | ・ ドキュメントを追加するフォルダまたはカテゴリに対する表示および追加権限 |
| Publisher | パブリケーションを作成する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ パブリケーションが保存されるフォルダに対する追加権限 ・ 受信者となるユーザおよびグループに対する表示権限 ・ パーソナライゼーションに使用されるプロファイルに対する表示権限 ・ パブリケーション用のドキュメントに対する表示権限 ・ ドキュメントに対するスケジュール権限 ・ Enterprise 受信者に対する購読権限 |

| ロール | タスク | 必要な権限 |
|-----------|---------------------------|--|
| Publisher | パブリケーションをスケジュールする。 | <p>注 これらの権限は、公開者だけが持つことをお勧めします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ パブリケーションに対する表示、スケジュール、追加、およびセキュリティの変更権限 ・ パブリケーションに対するインスタンスの削除権限 ・ 受信者となるユーザおよびグループに対する表示権限 ・ パーソナライゼーションに使用されるプロファイルに対する表示権限 ・ ドキュメントに対する表示およびスケジュール権限 ・ 動的受信者ソースに対する表示および最新表示権限 ・ 配信ルールが設定されるドキュメントに対する表示および最新表示権限 ・ パブリケーションのオブジェクトで使用するすべてのユニバースに対するデータアクセス権限 ・ 使用されるすべてのユニバース接続に対するデータアクセス権限 ・ 受信者の BI 受信ボックスに対する表示および追加権限 (受信ボックスをスケジュールした場合) ・ パブリケーションが保存されるフォルダのオブジェクトに対するユーザの権限変更 ・ 受信者に対する購読権限 ・ 公開者がパブリケーションインスタンスを印刷する場合は、Crystal レポートソースドキュメントに対する印刷権限 ・ Enterprise 受信者に対する他のユーザの代理としてスケジュール権限 ([受信者ごとのデータベースフェッチ] を使用している場合) |
| 公開者 | 失敗したパブリケーションインスタンスを再試行する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ パブリケーションをスケジュールするための権限と同じ権限が必要 ・ パブリケーションインスタンスに対する編集権限 |

| ロール | タスク | 必要な権限 |
|-----|-----------------------|--|
| 公開者 | パブリケーションインスタンスを再配布する。 | <ul style="list-style-type: none"> パブリケーションに対する表示、追加、スケジュール、およびセキュリティの変更権限 受信者の BI 受信ボックスに対する表示および追加権限 パブリケーション インスタンスに対するインスタンスの表示および編集権限 |
| 受信者 | パブリケーションを表示する。 | <ul style="list-style-type: none"> パブリケーションに対する表示権限 パブリケーションに対するインスタンスの表示権限 <p>注 これらの権限は、BI プラットフォームでパブリケーションオブジェクトを表示するために必要です。これらの権限は、BI 受信ボックスに送信された内容を表示する場合は必要ありません。</p> |
| 受信者 | パブリケーションを購読および購読解除する。 | <ul style="list-style-type: none"> パブリケーションに対する表示権限 Enterprise 受信者に対する購読権限 |

10.4.1 公開者と受信者: 表示する内容とアクセス権

公開者（パブリケーションを所有し、スケジュールするユーザ）は、すべての受信者のすべてのパブリケーションインスタンスを表示できます。受信者は、自分用にパーソナライズされたパブリケーションインスタンスを表示できます。このアクセス権の設定では、パブリケーションをスケジュールするためのアクセス権と、公開者のみにすべてのパブリケーションインスタンスを表示するアクセス権が保留されるため、パブリケーションデータのセキュリティを最大にすることができます。

ヒント

公開者が自身をパブリケーションに受信者として追加する場合は、自分用に、公開者アカウントと受信者アカウントの2つのユーザアカウントを使用します。公開者アカウントでは、パブリケーションを作成およびスケジュールするときに必要なアクセス権が付与され、受信者アカウントでは通常の受信者のアクセス権が付与されます。

パブリケーションの使用

11.1 パブリケーションのデザイン

新しいパブリケーションをデザインするには、まず BI プラットフォーム内の公開機能にアクセスします。公開機能には、BI プラットフォームで所有している権限と Web ベースアプリケーションへのアクセス権に応じて、セントラル管理コンソール (CMC) または BI 起動パッドでアクセスできます。

パブリケーションデザインプロセスでは、任意の時点でパブリケーションの変更の保存、終了、リオープン、および追加変更ができます。

11.1.1 SAP BusinessObjects Live Office で使用するためのパブリケーションのデザイン

SAP BusinessObjects Live Office で使用するためのパブリケーションをデザインする場合は、次の点に注意してください。

- ・ 動的なコンテンツのドキュメントは、元の形式の Crystal レポートまたは Web Intelligence ドキュメントで構成できます。
- ・ 動的受信者はサポートされません。
- ・ 使用できる出力先オプションは、デフォルトの Enterprise の場所だけです。
- ・ 受信者がパーソナライゼーションの後に複数のパブリケーションインスタンスを受信した場合、最初のパブリケーションインスタンスだけが、SAP BusinessObjects Live Office クライアントで表示できます。この問題は、受信者がグループのメンバーシップから複数のプロファイルを継承している場合に発生する可能性があります。この問題を解決するには、必要なプロファイル値のみを受信者に割り当てます。

関連項目

- ・ 153 ページの [「パーソナライゼーション」](#)

11.1.2 SAP 受信者用パブリケーションの設計

SAP 受信者用パブリケーションは、公開ワークフローにある 2 つの重要な相違点を除いて、Enterprise および動的受信者用のパブリケーションと同じ方法で動作します。

- ・ SAP 受信者用にソースドキュメントをパーソナライズする場合、[パーソナライゼーション] エリアの設定は使用しません。SAP 受信者には、BI プラットフォームの外側でユーザアカウントにマップされているプロファイル値が設定されています。この値が、SAP 受信者の組み込みのパーソナライゼーション方法として機能します。BI プラットフォームで SAP 受信者のプロファイルおよびプロファイル値を作成したり、ソースドキュメントフィールドにプロファイルをマップしたりする必要はありません。
- ・ SAP 受信者用のパブリケーションに関して機能するレポートバースト方法は、[受信者ごとのデータベースフェッチ]のみです。この方法はセキュリティを最大化し、各パブリケーション受信者のデータベースログオン認証情報を個別に処理します。

シングルサインオン設定および認証の詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』を参照してください。

11.1.3 CMC で新しいパブリケーションを作成する

- 1 CMC のフォルダエリアを表示します。
- 2 [グループツリー] で、パブリケーションを作成するフォルダを探します。
- 3 フォルダを選択して、その内容が [詳細] パネルに表示されるようにします。
- 4 [管理] > [新規] > [パブリケーション] の順にクリックします。
[新規パブリケーション] ダイアログ ボックスが表示されます。

[新規パブリケーション] ダイアログボックスで、ソースドキュメント、受信者、配信形式と配信先、およびドキュメントのパーソナライズ方法など、パブリケーションに必要なすべての情報を指定できます。

11.1.4 BI 起動パッドで新しいパブリケーションを作成する

- 1 BI 起動パッドの [ドキュメント] タブで、[フォルダ] ドロワを展開し、パブリケーションを作成するフォルダを探して選択します。
フォルダのコンテンツがリストパネルに表示されます。
- 2 [新規] > [パブリケーション] を選択します。
[新規パブリケーション] ダイアログ ボックスが表示されます。

[新規パブリケーション] ダイアログボックスで、ソースドキュメント、受信者、配信形式と配信先、およびドキュメントのパーソナライズ方法など、パブリケーション用の情報を指定できます。

11.1.5 既存のパブリケーションを開く

この手順では、既存のパブリケーションを開いてそのメタデータを編集します。

- 1 パブリケーションを選択します。
 - ・ BI 起動パッドを使用している場合は、[ドキュメント] タブで、[フォルダ] ドロワを展開し、パブリケーションを参照します。
 - ・ CMC を使用している場合は、[フォルダ] 領域に移動し、パブリケーションを参照します。
- 2 パブリケーションのプロパティを開きます。
 - ・ BI 起動パッドを使用している場合は、パブリケーションを選択し、[ビュー] > [プロパティ] をクリックします。
 - ・ CMC を使用している場合は、パブリケーションを選択し、[管理] > [プロパティ] をクリックします。

これでパブリケーションのメタデータが編集可能になりました。

11.1.6 新規パブリケーションに一般プロパティを入力する

- 1 [一般プロパティ] をクリックします。
- 2 [タイトル] フィールドに、パブリケーションのタイトルを入力します。

注
パブリケーションを作成する場合、タイトルは必須です。
- 3 [説明] フィールドに、パブリケーションの説明を入力します。
- 4 [キーワード] フィールドに、パブリケーションの内容に関連するキーワードを入力します。

11.1.7 ソースドキュメントを選択する

パブリケーションの一般プロパティを入力したら、パブリケーションに含めるソースドキュメントを選択します。それ以降のオプションは、動的コンテンツドキュメントの種類によって異なります。

- 1 [ソースドキュメント] をクリックします。
- 2 [追加] をクリックします。

[ソースドキュメントの選択] ダイアログボックスが開きます。
- 3 パブリケーションに含めるソースドキュメントを探し、選択します。

注
動的コンテンツドキュメントは、同じドキュメントタイプである必要があります。

ヒント

Ctrl + クリックまたは Shift + クリックを使用して複数のソースドキュメントを選択するか、1 つのソースドキュメントをダブルクリックして選択します。

- 4 [OK] をクリックします。

[ソースドキュメントの選択]ダイアログボックスが閉じます。選択したソースドキュメントが[選択]一覧に表示されます。

- 5 ソースドキュメントの横にある[実行時に最新表示]チェックボックスを選択または選択解除します。
この選択によって、パブリケーションの実行時に、個々のソースドキュメントがデータソースを反映して最新表示されるかどうかが決定されます。ソースドキュメントを最新表示する必要がない場合は、パブリケーションのパフォーマンスを向上させるために、そのドキュメントの[実行時に最新表示]チェックボックスをオフにすることをお勧めします。

ソースドキュメントを添付ファイルまたはマージされた PDF として送信する場合は、ドキュメントの表示順序を変更できます。順序を変更するには、[選択]一覧からドキュメントを選択し、[上へ移動]または[下へ移動]をクリックします。

11.1.7.1 静的ソースドキュメントを置換する

静的ソースドキュメントを置換できるようにするには、ドキュメントに対して[編集]アクセス権限を持っている必要があります。

静的 (サードパーティ) ソースドキュメントは、BI 起動パッドで作成されていないサードパーティ製のドキュメントです。たとえば、Microsoft Word、Adobe PDF、または Microsoft Excel ファイルです。

静的ドキュメントのコンテンツは更新できませんが、静的ソースドキュメントを最新バージョンのドキュメントに置換することはできます。これにより、BI 起動パッド以外で作成されたドキュメントで、最新のソース情報を見ることができます。

注

[ファイルの置換] メニューオプションが静的ソースドキュメントで使用できない場合、そのドキュメントに対して[編集] 権限を持っていないことになります。

- 1 静的ソースドキュメントを右クリックして、[整理] > [ファイルの置換] を選択します。
- 2 [ファイルの置換] ダイアログボックスで、[参照] をクリックし、コンピュータ上にある最新バージョンのソースドキュメントファイルを選択します。

注

「ファイルがソースドキュメントのファイル形式と一致しない」というメッセージが表示された場合、元のソースドキュメントとは異なる形式のファイルを選択しています。[OK] をクリックしてメッセージを閉じ、[参照] をクリックして正しいソースドキュメントを選択します。

- 3 [置換] をクリックします。
- 4 確認メッセージで、[OK] をクリックしてソースドキュメントを更新します。

11.1.8 Enterprise 受信者を選択する

Enterprise 受信者がパブリケーションを受信できるようにするには、このタスクを実行します。

- 1 [Enterprise 受信者] をクリックします。
- 2 [利用可能]領域で、受信者に含める、または受信者から除外するユーザまたはグループを探します。
 - a [ユーザー一覧] をクリックすると、BI プラットフォームの全ユーザの一覧が表示されます。[グループリスト] をクリックすると、全グループの一覧が表示されます。
 - b ユーザとグループを選択します。

ヒント

複数のユーザまたはグループを選択するには、Shift + クリックまたは Ctrl + クリックを使用します。

- 3 選択したユーザを受信者に含める場合は、それらのユーザを[選択]一覧に移動します。
- 4 選択したユーザを受信者から除外するには、それらのユーザを[除外する]一覧に移動します。

11.1.9 動的受信者を指定する

動的受信者を指定するには、動的受信者ソースがすでに作成されており、使用可能な状態であることが必要です。動的受信者ソースには受信者のデータを格納し、Crystal レポート、Web Intelligence ドキュメント、またはカスタムコーディングされたデータプロバイダを使用できます。

カスタムコーディングされた動的受信者ソースの作成については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Java SDK 開発者ガイド』を参照してください。

ヒント

パブリケーションの処理効率を高めるには、受信者データを受信者 ID フィールドに基づいて並べ替えることをお勧めします。

BI プラットフォームユーザ以外の受信者がパブリケーションを受信できるようにする場合は、このタスクを実行します。

- 1 [動的受信者] をクリックします。
- 2 [動的受信者のソースの選択]一覧から動的受信者ソースの形式を選択します。

注

Crystal レポート動的受信者のソースを、RPTR 形式にすることはできません。

- 3 右側の枠で、動的受信者ソースとして使用するオブジェクトを探して選択し、[OK]をクリックします。
- 4 動的受信者ソースとして Web Intelligence ドキュメントを使用する場合は、[ドキュメントのデータソース名の選択]一覧からドキュメントに表示されるクエリを選択します。

注

動的受信者データはクエリから取得され、ドキュメントを表示すると表示されるデータと一致していない場合があります。クエリの作成方法によっては、Web Intelligence コンポーネントで作成された動的受信者ソースには、パブリケーションのソースドキュメント内のデータに対応しない値が含まれる場合があります。たとえば、レポート内のフィルタで関連の値を除外したり、クエリが重複行を取得するように設定されているために重複するレコードが表示される場合があります。パブリケーションの作成中に、動的受信者の完全な一覧を確認することをお勧めします。

- 5 [受信者の識別子]一覧から、受信者の ID 値が含まれるフィールドを選択します。

- 6 必要に応じて、[フルネーム]一覧から受信者のフルネームが含まれるフィールドを選択します。
- 7 パブリケーションを電子メールアドレスに配信する場合は、[電子メール]一覧から受信者の電子メールアドレスが含まれるフィールドを選択します。
- 8 動的受信者ソース別に一覧表示された動的受信者全員にパブリケーションを配信するかどうかを決定します。
 - ・ パブリケーションを動的受信者全員に配布するには、[完全リストの使用]を選択します。
 - ・ 一部の動的受信者を含める、または除外するには、次の手順を実行します。
 - a [完全リストの使用]をオフにします。
 - b [利用可能]一覧で、含める、または除外する受信者の横にあるチェックボックスを選択します。
 - c 選択したユーザを受信者に含める場合は、それらのユーザを[選択]一覧に移動します。
 - d 選択したユーザを受信者から除外するには、それらのユーザを[除外する]一覧に移動します。

パブリケーションの動的受信者を指定したら、ソースドキュメントのフィールドを動的受信者ソースの列にマップして、パブリケーションを動的受信者向けにパーソナライズできます。

関連項目

- ・ 163 ページの[動的受信者を指定する](#)
- ・ 169 ページの[フィールドをフィルタリングして Crystal レポートをパーソナライズする](#)
- ・ 176 ページの[フィールドをフィルタリングして、Web Intelligence ドキュメントをパーソナライズする](#)

11.1.10 パブリケーションの出力先を指定する

- 1 [出力先] をクリックします。
- 2 [出力先の選択] で、出力先のチェックボックスをオンにします。

注

各出力先には、パブリケーションの配信方法に関するさまざまなオプションがあります。

- 3 パブリケーションインスタンスがシステムに保持されないようにするには、[デフォルトの Enterprise の場所] の選択を解除します。

ヒント

パブリケーションオブジェクトのインスタンスの制限を低く設定します。

- 4 [選択した出力先のオプションを表示] 一覧で出力先を選択します。
出力先のその他の設定オプションが表示されます。
- 5 任意で [指定の名前を使用する] を選択してパブリケーションの名前を指定します(このオプションを選択しないと、デフォルトでシステムによって生成された名前がパブリケーションに割り当てられます)。名前を入力するか、[プレースホルダの追加] 一覧のプレースホルダを選択します。
プレースホルダは、変数データのコンテナです。実行時に、値がプレースホルダに入力されます。
- 6 パブリケーションに複数のドキュメントが含まれている場合、[ドキュメントごとの指定の名前] を選択して各ドキュメントの名前を指定できます

このオプションを選択しないと、デフォルトでシステムによって生成された同一の名前が各ドキュメントに割り当てられます。名前を入力するか、[プレースホルダの追加] 一覧のプレースホルダを選択します。

- 7 パブリケーションをデフォルトの Enterprise の場所と受信者の電子メールアドレスに送信している場合は、電子メールの本文に Enterprise の場所へのリンクを埋め込むことができます。

Enterprise 受信者がパブリケーションインスタンスを表示するには、そのパブリケーションの表示権限を所持している必要があります。そのためには、カーソルを[メッセージ]ボックスに置き、[メッセージ]ボックスの下にある[プレースホルダの追加]リストで[ビューアのハイパーリンク]をクリックします。プレースホルダ %SL_VIEWER_URL% が電子メールに挿入されます。このプレースホルダは、パブリケーションが実行されるとリンクに置換されます。

動的受信者は、BI アカウントを所持していないため、パブリケーションインスタンスにアクセスできません。

11.1.11 パブリケーションソースドキュメント名のパーソナライズされたプレースホルダ

[パーソナライゼーション] を使用してソースドキュメントのデータをフィルタした場合、パーソナライズされたプレースホルダを使用してパブリケーションインスタンスに名前を付けることができます。

パーソナライズされたプレースホルダをファイル名に組み込むと、受信者はフィルタされたデータを簡単に識別できます。パーソナライゼーション値が異なる複数のユーザグループに属している受信者は、同じソースドキュメントの複数のバージョンの違いをそのコンテンツを表示することなく区別できます。

パーソナライゼーションがパブリケーションに設定されると、パーソナライズされたプレースホルダが[出力先]ページの[プレースホルダの追加]一覧に表示されます。

注

パブリケーションに複数のソースドキュメントが含まれている場合、すべてのソースドキュメントが同じフィールドでフィルタされていなければ[指定の名前を使用する]の[プレースホルダの追加]一覧にパーソナライズされたプレースホルダが表示されません。

レポートのすべてのフィルタで、次のパーソナライズされたプレースホルダが表示されます。

- ・ フィールド名に対応するプレースホルダ。%<field name>-NAME% として表されるプレースホルダは、実行時にフィールド名に置換されます。このプレースホルダはすべての受信者に表示されます。
- ・ フィールドのパーソナライズ値に対応するプレースホルダ。%<field name>-VALUE% として表されるプレースホルダは、レポートをフィルタするために使用されるフィールドの値に置換されます。このプレースホルダは受信者ごとに固有です。

パーソナライズされたプレースホルダを使用するには、[選択した出力先のオプションを表示] エリアで以下の選択を行います。

- 1 該当するパブリケーション名の[指定の名前を使用する]オプションを選択し、[プレースホルダの追加]一覧から必要なプレースホルダを選択します。複数のプレースホルダを追加するには、この手順を繰り返します。テキストとプレースホルダを結びつけるには、まずテキストを入力してからプレースホルダを選択します。
- 2 個々のドキュメントの[ドキュメントごとの指定の名前]オプションを選択します。各ドキュメントのタイトルのそばにある[プレースホルダの追加]一覧から必要なプレースホルダを選択します。複数のプレースホルダを追加するには、この手順を繰り返します。テキストとプレースホルダを結びつけるには、まずテキストを入力してからプレースホルダを追加します。

- 3 保存して終了するには、[保存して閉じる]を選択します。選択内容は保存するが、別の出力先またはオプションを選択する場合は、[保存]を選択します。

例

カナダの営業マネージャとアメリカの営業マネージャという 2 つのユーザグループに四半期売上レポートを公開するとします。Crystal レポートの名前は国別四半期売上です。パーソナライゼーションが国フィールドに適用されていて、各グループでそれぞれの国のデータを受信します。アメリカの営業マネージャでは国フィールドのプロファイル値が“米国”で、カナダの営業マネージャでは国フィールドのプロファイル値が“カナダ”です。

次の 3 つのパーソナライズされたプレースホルダが [プレースホルダの追加] 一覧に表示されます。

- ・ %Document Name%. %SI_DOCUMENT_NAME% コードがフィールドに挿入されます。
- ・ %Country - Query 1-NAME%. %SI_field name-NAME% コードがフィールドに挿入されます。
- ・ %Country - Query 1-VALUE%. %SI_field name-VALUE% コードがフィールドに挿入されます。

アメリカの営業マネージャに送信されるレポート (米国のデータのみが表示されるようにフィルタされている) には、国別四半期売上_米国.pdf という名前が付きまます。カナダの営業マネージャに送信されるレポート (カナダのデータのみが表示されるようにフィルタされている) には、国別四半期売上_カナダ.pdf という名前が付きまます。

11.1.12 電子メールフィールドのパーソナライズされたプレースホルダ

パブリケーションのすべてのソースドキュメントが同じフィールドを使用してパーソナライズされている場合、パブリケーションを電子メールで送信するときに [件名] および [メッセージ] フィールドにパーソナライズされたプレースホルダを使用できます。

パーソナライゼーション時にレポートで使用されたフィルタごとに、以下の 2 つのプレースホルダが [プレースホルダの追加] 一覧に表示されます。

- ・ %Field - Query 1-VALUE%. これはフィールドのパーソナライズ値です。実行時に、レポートをフィルタするために使用されるフィールドの値に置換されます。このプレースホルダは受信者ごとに固有です。
- ・ %Field - Query 1-NAME%. これはフィールドの名前です。実行時に、フィールドの実際の名前に置換されます。このプレースホルダはすべての受信者で同じです。

注

パブリケーションに複数のソースドキュメントが含まれている場合、すべてのソースドキュメントが同じフィールドでフィルタされていなければ [件名] および [メッセージ] フィールドの [プレースホルダの追加] 一覧にパーソナライゼーションパラメータが表示されません。

11.1.13 動的コンテンツソースドキュメントを電子メールに埋め込む

動的コンテンツドキュメントから、電子メールの本文にコンテンツを埋め込むことができます。Crystal レポートの場合は、レポートのコンテンツを埋め込むことができます。Web Intelligence ドキュメントの場合は、ドキュメント全体または 1 つのレポートタブを埋め込むことができます。

- 1 [形式] をクリックします。

[形式]セクションが表示されます。

- 2 電子メールに埋め込む動的コンテンツドキュメントを選択します。

| ドキュメントの種類 | 選択方法 |
|-------------------------|---------------------------|
| Crystal レポート | [タイトル] 一覧からレポートを選択します。 |
| Web Intelligence ドキュメント | [ドキュメント] 一覧でドキュメントを選択します。 |

- 3 選択した動的コンテンツドキュメントのパブリケーション形式として、mHTML を選択します。

| ドキュメントの種類 | 選択方法 |
|-------------------------|--|
| Crystal レポート | [形式オプション] 一覧で、[mHTML] チェックボックスをオンにします。 |
| Web Intelligence ドキュメント | [出力形式] 一覧で、[mHTML] チェックボックスをオンにします。 |

- 4 Web Intelligence ドキュメントの場合は、ドキュメント全体を公開するか、ドキュメント内のレポートタブの 1 つを公開するかを選択します。
 - a [出力形式] 一覧の [mHTML] が選択されていることを確認します。
 - b ドキュメント全体を公開する場合は、[すべてのレポート]が選択された状態にしておきます。単一のレポートタブを公開する場合は、[1 つのレポートを選択]をクリックし、一覧からレポートタブを選択します。
- 5 ナビゲーション一覧で[出力先]をクリックします。
[出力先]セクションが表示されます。
- 6 [送信先の選択]領域で、[電子メール]を選択します。
- 7 [オプションの表示]一覧で、[電子メール]をクリックします。
電子メール送信先オプションの追加の設定オプションが表示されます。
- 8 [差出人]ボックスで、名前または電子メールアドレスを入力するか、[プレースホルダの追加]リストから電子メールを選択します。
たとえば、「Robert」、「公開者」、「publisher@sap.com」などを入力できます。名前を入力すると、Publisher@emailserver のように、その名前が電子メールサーバに追加されます。
- 9 [件名]ボックスに件名を入力します。プレースホルダを挿入するには、[プレースホルダの追加] 一覧から [タイトル] などのオプションを選択します。レポートをパーソナライズした場合、パーソナライズされたプレースホルダは [プレースホルダの追加] 一覧でできるようになります。
- 10 メール本文に含めるメッセージテキストを [メッセージ] ボックスに入力します。
- 11 動的コンテンツを [メッセージ] ボックスに埋め込むには、ドキュメントコンテンツを埋め込む [メッセージ] ボックスにカーソルを置き、[メッセージ] ボックスの下にある [プレースホルダの追加] リストに移動して、[レポート HTML コンテンツ] を選択します。

[メッセージ] ボックスに、%SI_DOCUMENT_HTML_CONTENT% と表示されます。パブリケーションが実行されると、このプレースホルダはユーザが指定した動的コンテンツドキュメントのパーソナライズ済みコンテンツに置換されます。

- 12 パブリケーションに他のソースドキュメントが含まれている場合は、[添付ファイルの追加] が選択され、添付ファイルのオプションが正しく設定されていることを確認してください。

パブリケーションの実行時、パブリケーション内のその他のソースドキュメントは、添付ファイルとして電子メールに追加されます。

11.1.14 スケジュール情報を指定する

このタスクは、パブリケーションのスケジュール情報を指定する場合に実行します。

- 1 [追加オプション] を展開し、[定期] をクリックします。
- 2 [オブジェクトの実行] リストで、定期パターンを選択します。
- 3 必要に応じて、定期スケジュールパターンの実行オプションとパラメータを指定します。

11.1.15 Crystal レポートパブリケーションの設計タスク

11.1.15.1 パラメータ値を使用して Crystal レポートをパーソナライズする

注

このタスクを実行するには、Crystal レポートにパラメータが含まれている必要があります。Enterprise 受信者のデータのパーソナライズにプロファイルを使用する前に、BI プラットフォームでプロファイルを設定する必要があります。

[パーソナライゼーション] セクションでは、各受信者に対して事前に定義されたパラメータ値に基づいて、受信者の Crystal レポートをパーソナライズできます。

パラメータ値に基づくパーソナライゼーションは、他のパーソナライゼーション方法で上書きされる場合があります。たとえば、プロファイルがパラメータにマップされ、Enterprise 受信者のプロファイル値がパラメータ値と競合する場合は、パブリケーションが実行されると、プロファイル値によってパラメータ値が上書きされます。同様に、動的受信者ソースの値が動的受信者のパラメータ値と競合する場合、パブリケーションが実行されるとパラメータ値は上書きされます。

注

可能な場合は、Crystal レポートをローカルプロファイルターゲットでパーソナライズすることをお勧めします。パラメータがレコード選択式、コマンド、テーブル、またはストアドプロシージャで使用される場合、パラメータベ

スのパーソナライゼーションでは受信者ごとにデータベースフェッチを 1 回行う必要があります。このため、パブリケーションの処理時間が増加する場合があります。

- 1 [パーソナライゼーション] をクリックします。
- 2 [パラメータ]領域で、リストされているパラメータのデフォルト値が正しいことを確認します。
デフォルト値を変更する場合は、パラメータ値の横にある [値の編集] ボタンをクリックします。パラメータ値を選択または入力し、[OK]をクリックします。
- 3 デフォルトのパラメータのパーソナライゼーションを、Enterprise 受信者のプロファイル値で上書きする場合は、[Enterprise 受信者のマッピング]列の一覧からプロファイルを選択します。

注

このオプションは、お使いのパブリケーションが Enterprise 受信者向けの場合にのみ表示されます。

このプロファイルが BI プラットフォームで設定されていない場合、パーソナライゼーションは失敗します。BI プラットフォームに追加するプロファイルが必要な場合は、システム管理者に問い合わせてください。

注

デフォルトのパラメータ値のみを使用してレポートをパーソナライズする場合は、[Enterprise 受信者のマッピング]を [すべての受信者のデフォルト値] に設定することをお勧めします。

- 4 デフォルトのパラメータのパーソナライゼーションを動的受信者のパーソナライゼーション値で上書きする場合は、[動的受信者のマッピング]列の一覧から動的受信者ソースの列を選択します。

注

- ・ このオプションは、お使いのパブリケーションが動的受信者向けの場合にのみ表示されます。
- ・ デフォルトのパラメータ値のみを使用してレポートをパーソナライズする場合は、[動的受信者のマッピング]を[指定なし]に指定することをお勧めします。

11.1.15.2 フィールドをフィルタリングして Crystal レポートをパーソナライズする

Enterprise 受信者のデータのパーソナライズにプロファイルを使用する前に、BI プラットフォームでプロファイルを設定する必要があります。

Crystal レポートのフィールドをフィルタリングして Crystal レポートをパーソナライズする場合は、このタスクを実行します。フィルタを使用すると、ViewTime 選択式がレポートに追加され、データがフィルタリングされます。この式は、パブリケーションが実行され、レポートに保存されていない場合に適用されます。Crystal レポートでは、複数のフィールドをフィルタリングできます。

注

- ・ 静的な値のプロファイル値は、Crystal レポートの文字列フィールドだけをフィルタ処理できます。他の種類のフィールドをフィルタ処理する場合は、式のプロファイル値を使用します。不適切なタイプのフィールドをプロファイルにマップすると、パーソナライゼーションは失敗します。
 - ・ この機能は、RPTR 形式の Crystal レポートでは使用できません。
- 1 [パーソナライゼーション] をクリックします。
 - 2 [フィルタ]領域で、[レポートフィールド]列の一覧から Crystal レポートフィールドを選択します。

使用可能なフィールドの一覧には、メインレポートまたは非オンデマンド型サブレポートのすべてのデータベースフィールドおよび繰り返し式が含まれています。

- 3 [Enterprise 受信者のマッピング]列の一覧からプロファイルを選択します。

この設定により、レポートフィールドが Enterprise 受信者に定義されたプロファイル値にマップされます。

注

このオプションは、お使いのパブリケーションが Enterprise 受信者向けの場合にのみ表示されます。

このプロファイルが BI プラットフォームで設定されていない場合、パーソナライゼーションは失敗します。BI プラットフォームに追加するプロファイルが必要な場合は、システム管理者に問い合わせてください。

- 4 [動的受信者のマッピング]列の一覧から動的受信者ソースの列を選択します。

この設定により、レポートフィールドが対応する値を持つ動的受信者ソースの列にマップされます。

注

このオプションは、お使いのパブリケーションが動的受信者向けの場合にのみ表示されます。

- 5 フィルタリング対象の各レポートフィールドに対し、手順 2 ～ 4 を繰り返します。

11.1.15.3 Crystal レポートの形式を指定する

- 1 [形式] をクリックします。

- 2 [ドキュメント] 一覧から Crystal レポートを選択します。

[形式オプション]が表示され、選択した Crystal レポートのパブリケーション形式を選択できます。

- 3 [形式オプション] 一覧で、目的の受信者の横にあるチェックボックスを選択します。

形式が選択されます。

- 4 [形式オプション] 一覧で、指定した形式名をクリックします。

注

形式オプションによっては、次の手順が適用されない場合があります。

追加オプションが表示され、形式をカスタマイズできます。

- 5 ソースドキュメントに定義されているデフォルトのエクスポートオプションを使用するには、[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用]が選択された状態にしておきます。それ以外の場合は、[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用]をオフにします。

- 6 追加情報を入力し、選択した形式の表示をカスタマイズします。

- 7 Crystal レポートを公開する各形式に対し、手順 4 ～ 6 を繰り返します。

終了後、パブリケーションの各 Crystal レポートに対し、手順 2 ～ 7 を繰り返す必要があります。

11.1.15.3.1 Crystal レポート形式向けの追加カスタマイズオプション

ここでは、追加カスタマイズオプションを使用できる形式を示します。

Microsoft Excel(97-2003)

次のオプションは、Excel ファイル形式で公開される Crystal レポートに使用できます。

・ ページ範囲

[すべて]をクリックすると、レポート全体を Excel ファイル形式で公開できます。特定のレポートページを公開するには、[ページ]をクリックし、[公開元] および [公開先] フィールドにページ範囲の数字を入力します。

[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用]をオフにすると、次のオプションも使用できます。

・ 列幅の設定

[列幅を次のオブジェクトに合わせる]をクリックし、一覧からオプションを選択すると、レポートのオブジェクトの列幅を定義できます。[列幅を一定にする(ポイント単位)]をクリックし、フィールドに数値を入力すると、すべての列に一定の列幅を定義できます。

・ ページヘッダとページフッタをエクスポートする

一覧からオプションを選択して、Excel ファイルでのヘッダとフッタの表示頻度を設定できます。

・ ページごとにページ区切りを作成

このオプションを選択すると、レポートのページ区切りを反映するページ区切りを作成できます。

・ 日付の値を文字列に変換する

このオプションを選択すると、データ値をテキスト文字列に変換できます。

・ グリッドラインの表示

このオプションを選択すると、Excel ファイルにグリッドラインを表示できます。

Microsoft Excel(97-2003)(データのみ)

[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用]をオフにすると、次のオプションを使用できます。

・ 列幅の設定

[列幅を次のオブジェクトに合わせる]をクリックして、レポートのオブジェクトに相対的な列幅を定義し、隣接する一覧からオプションを選択します。または、[列幅を一定にする(ポイント単位)]をクリックして、すべての列に一定の列幅を定義し、隣接するフィールドに数値を入力します。

・ オブジェクトの書式設定をエクスポートする

オブジェクトの書式設定を維持するには、このオプションを設定します。

・ 画像をエクスポートする

Excel ファイルでレポート画像を公開するには、このオプションを選択します。

・ 集計にワークシートの関数を使用する

レポートの集計を使用して Excel ファイルのワークシート関数を作成するには、このオプションを選択します。

・ オブジェクトの相対位置を維持する

レポートオブジェクトの相対位置を維持するには、このオプションを選択します。

- ・ 列の配置を維持する

レポートの列の配置を維持するには、このオプションを選択します。

- ・ ページヘッダとページフッタをエクスポートする

Excel ファイルにヘッダとフッタを含めるには、このオプションを選択します。

- ・ ページヘッダを簡略化する

ページヘッダを簡略化する場合は、このオプションを選択します。

- ・ グループのアウトラインを表示する

レポートのグループアウトラインを表示するには、このオプションを選択します。

Microsoft Excel ワークブックデータのみ

[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用] をオフにすると、Excel 2007 ファイル形式で公開する Crystal レポートに次のオプションを使用できます。

- ・ 列幅の設定

[列幅を次のオブジェクトに合わせる]をクリックして、レポートのオブジェクトに相対的な列幅を定義し、隣接する一覧からオプションを選択します。または、[列幅を一定にする(ポイント単位)]をクリックして、すべての列に一定の列幅を定義し、隣接するフィールドに数値を入力します。

- ・ オブジェクトの書式設定をエクスポートする

オブジェクトの書式設定を維持するには、このオプションを設定します。

- ・ 画像をエクスポートする

Excel ファイルでレポート画像を公開するには、このオプションを選択します。

- ・ 集計にワークシートの関数を使用する

レポートの集計を使用して Excel ファイルのワークシート関数を作成するには、このオプションを選択します。

- ・ オブジェクトの相対位置を維持する

レポートオブジェクトの相対位置を維持するには、このオプションを選択します。

- ・ 列の配置を維持する

レポートの列の配置を維持するには、このオプションを選択します。

- ・ ページヘッダとページフッタをエクスポートする

Excel ファイルにヘッダとフッタを含めるには、このオプションを選択します。

- ・ ページヘッダを簡略化する

ページヘッダを簡略化する場合は、このオプションを選択します。

- ・ グループのアウトラインを表示する

レポートのグループアウトラインを表示するには、このオプションを選択します。

Microsoft Word(97-2003)

次のオプションは、Word ファイル形式で公開される Crystal レポートに使用できます。

- ・ ページ範囲

[すべて]をクリックすると、レポート全体を Word ファイル形式で公開できます。特定のレポートページを公開するには、[ページ]をクリックし、[公開元] および [公開先] フィールドにページ範囲の数字を入力します。

PDF

次のオプションは、PDF ファイル形式で公開されるソースドキュメントに使用できます。

- ・ ページ範囲

[すべて]をクリックすると、ソースドキュメント全体を PDF ファイル形式で公開できます。特定のページを公開するには、[ページ]をクリックし、[公開先]および[公開元]フィールドにページ範囲の数字を入力します。

[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用]をオフにすると、次のオプションも使用できます。

- ・ グループツリーからブックマークを作成

注

目次が含まれた、マージ済みの PDF 形式で Crystal レポートを公開する場合は、このオプションを選択する必要があります。

リッチテキスト形式(RTF)

次のオプションは、リッチテキストファイル形式で公開される Crystal レポートに使用できます。

- ・ ページ範囲

[すべて]をクリックすると、ソースドキュメント全体を PDF ファイル形式で公開できます。特定のページを公開するには、[ページ]をクリックし、[公開先]および[公開元]フィールドにページ範囲の数字を入力します。

Microsoft Word – 編集可能(RTF)

次のオプションは、編集可能な Word ファイル形式で公開される Crystal レポートに使用できます。

- ・ ページ範囲

[すべて]をクリックすると、レポート全体を Word ファイル形式で公開できます。特定のレポートページを公開するには、[ページ]をクリックし、[公開元] および [公開先] フィールドにページ範囲の数字を入力します。

[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用]をオフにすると、次のオプションも使用できます。

- ・ レポートのページごとに改ページする

このオプションを選択すると、レポートのページ区切りを反映するページ区切りを作成できます。

テキスト

[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用] チェックボックスをオフにすると、テキストファイル形式で公開する Crystal レポートに次のオプションを使用できます。

- ・ インチあたりの文字数

値を入力し、テキストファイルに表示する 1 インチあたりの文字数を定義します。

ページ区切り付きテキスト

[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用] チェックボックスをオフにすると、ページ区切り付きテキストファイル形式で公開する Crystal レポートに次のオプションを使用できます。

- ・ 1 ページあたりの行数

値を入力し、ページ区切り付きテキストファイルの各ページにおける行数を定義します。

- ・ インチあたりの文字数

値を入力し、ページ区切り付きテキストファイルに表示する 1 インチあたりの文字数を定義します。

カンマ区切り値(CSV)

[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用] をオフにすると、カンマ区切り値ファイル形式で公開する Crystal レポートに次のオプションを使用できます。

- ・ 囲み文字

囲み文字として使用する文字を入力します。

- ・ 区切り文字

値を区切るために使用する文字を入力するか、[タブ]を選択します。

- ・ モード

標準モードかレガシーモードを選択します。標準モードでは、CSV 出力におけるレポートページとグループヘッダ およびフッタの表示方法を制御できます。標準モードはデフォルトのオプションです。

- ・ レポートセクションとページセクション

この領域のオプションを使用して、レポートおよびページセクションをエクスポートするかどうか、また、これらのセクションを切り離すかどうかを設定します。

- ・ グループセクション

この領域のオプションを使用して、グループセクションをエクスポートするかどうか、また、切り離すかどうかを設定します。

XML

[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用] をオフにすると、XML 形式で公開する Crystal レポートに次のオプションを使用できます。

- ・ XML エクスポート形式

一覧からオプションを選択して、XML 形式を指定します。

11.1.16 Web Intelligence ドキュメントパブリケーションの設計タスク

11.1.16.1 Web Intelligence ドキュメントの形式を指定する

- 1 [形式] をクリックします。
 - 2 [ドキュメント]一覧でドキュメントを選択します。
 - 3 [出力形式]一覧で、ドキュメントを公開する形式を 1 つまたは複数選択します。
 - 4 [出力形式]一覧の形式オプションが強調表示された状態にし、[出力形式の詳細]領域で、ドキュメント全体またはドキュメント内の 1 つのレポートタブのいずれを公開するかを選択します。
 - ・ ドキュメント全体を公開する場合は、[すべてのレポート]が選択された状態のままにしておきます。
 - ・ 1 つのレポートタブを公開する場合は、[1 つのレポートを選択]をクリックし、一覧からレポートタブを選択します。
 - 5 ドキュメントを公開する形式ごとに、手順 4 を繰り返します。
- 1 つのドキュメントに対してこのタスクを完了したら、パブリケーションのその他の動的コンテンツソースドキュメントに対して手順 2 ～ 5 を繰り返す必要があります。

11.1.16.2 グローバルプロファイルターゲットを使用して Web Intelligence ドキュメントをパーソナライズする

Enterprise 受信者のデータのパーソナライズにプロファイルを使用する前に、BI プラットフォームでプロファイルを設定する必要があります。また、このタスクで選択されたプロファイルには、グローバルプロファイルターゲットが含まれている必要もあります。

[パーソナライゼーション]ダイアログボックスの[グローバルプロファイル]領域を使用して、グローバルプロファイルターゲットをフィルタリングすることで、Web Intelligence ドキュメントを Enterprise 受信者用にパーソナライズできます。

ヒント

[グローバルプロファイル]領域でパーソナライゼーションオプションを使用する場合、[フィルタ]領域でパーソナライゼーションオプションを使用する必要はありません。

- 1 [パーソナライゼーション] をクリックします。
- 2 [パーソナライゼーション]ダイアログボックスの[グローバルプロファイル]領域で、[Enterprise 受信者のマッピング]列の一覧からプロファイルを選択します。

このプロファイルにより、ドキュメントが、Enterprise 受信者でフィルタリングされたユニバースフィールド (グローバルプロファイルターゲット) にマップされます。

注

選択したプロファイルが BI プラットフォームで設定されていない場合、パーソナライゼーションは失敗します。BI プラットフォームに追加するプロファイルが必要な場合は、システム管理者に問い合わせてください。

11.1.16.3 フィールドをフィルタリングして、Web Intelligence ドキュメントをパーソナライズする

Enterprise 受信者のデータのパーソナライズにプロファイルを使用する前に、BI プラットフォームでプロファイルを設定する必要があります。

ドキュメントのフィールドをフィルタリングして Web Intelligence ドキュメントをパーソナライズするには、このタスクを実行します。

注

静的な値のプロファイル値は、ソースドキュメントの文字列フィールドだけをフィルタ処理できます。他の種類のフィールドをフィルタ処理する場合は、式のプロファイル値を使用します。不適切なタイプのフィールドをプロファイルにマップすると、パーソナライゼーションは失敗します。

- 1 ナビゲーション一覧で[パーソナライゼーション]をクリックします。
- 2 [ローカルプロファイル]領域で、[レポートフィールド]列の一覧からフィールドを選択します。
- 3 [Enterprise 受信者のマッピング]列の一覧からプロファイルを選択します。
この設定により、レポートフィールドが Enterprise 受信者に定義されたプロファイル値にマップされます。
このプロファイルが BI プラットフォームで設定されていない場合、パーソナライゼーションは失敗します。BI プラットフォームに追加するプロファイルが必要な場合は、システム管理者に問い合わせてください。
- 4 [動的受信者のマッピング]列の一覧から動的受信者ソースの列を選択します。
この設定により、ソースドキュメントのフィールドは、対応する値を持つ動的受信者ソースの列にマップされます。
- 5 フィルタリング対象の各フィールドに対し、手順 2 ～ 4 を繰り返します。

11.1.17 追加のパブリケーション機能の使用

この節のタスクはオプション (パブリケーションのデザインおよびスケジュールには不要) ですが、パブリケーションのパフォーマンスを向上させることができます。

11.1.17.1 Crystal レポートパブリケーションの追加パブリケーション機能

11.1.17.1.1 パブリケーションの Crystal レポートに印刷オプションを設定する

デフォルトのプリンタを使用する場合は、そのプリンタがインストールされ、正しく設定されていることを確認してください。

注

Crystal Reports Job Server は、指定したプリンタにアクセスする権限を持つアカウントによって実行される必要があります。詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』を参照してください。

Crystal Reports Job Server のデフォルトプリンタまたはその他のプリンタを使用してパブリケーションを実行するたびに、Crystal レポート形式のインスタンスの印刷を選択できます。BI プラットフォームは、パブリケーションがパーソナライズされた後、それが配信される前にインスタンスを印刷します。

- 1 [追加オプション] を展開し、[出力設定] をクリックします。
- 2 [ドキュメント] 一覧で、パブリケーションの実行時に印刷する Crystal レポートを選択します。
- 3 [スケジュール時に Crystal レポートを印刷する] を選択します。
- 4 Job Server のデフォルトプリンタで印刷する場合は、[デフォルトプリンタ] を選択したままにしておきます。それ以外は、[プリンタを指定する] を選択します。
- 5 プリンタのパスと名前を入力します。

- ・ Job Server が Windows で実行されている場合には、[プリンタを指定する] ボックスに「¥¥printserver¥¥printername」と入力します。

printserver には使用しているプリンタサーバの名前を入力し、printername には使用しているプリンタの名前を入力してください。

- ・ Job Server が Unix で実行されている場合は、Unix が表示されている（非表示でない）ことを確認し、通常使用する印刷コマンドを [プリンタを指定] ボックスに入力します。

たとえば、「lp -d printername」と入力します。

- 6 印刷部数と印刷ページ範囲を選択します。
- 7 部単位の印刷およびページの縮小/拡大オプションを設定します。
- 8 レポートのコンテンツをページ中央に配置するには、[ページの中央揃え]を選択します。
- 9 Crystal レポートの幅が広く、印刷時にレポートをページの大きさに合わせるには、[横方向のページを 1 ページに合わせる]を選択します。

11.1.17.1.2 Crystal レポートの受信者配信ルールを設定する

受信者配信ルールでは、処理およびパーソナライゼーションの後、各受信者にパブリケーションを配信するかどうかを決定します。

- 1 [追加オプション] を展開し、[配信ルール] をクリックします。

- 2 [受信者配信ルール]領域で、[条件に一致するときに個々のドキュメントを配信する]または[すべての条件が一致する場合のみすべてのドキュメントを配信する]をクリックします。
- 3 各レポートの横にある一覧で、パブリケーションを配信する場合に一致すべき条件を指定します。

配信ルールのデフォルト設定を次の表に示します。レポートにアラートが含まれる場合は、アラート値に基づくオプションも使用できます。

| 配信ルールオプション | 説明 |
|-----------------------|--|
| 常に配信する | レポートは常に受信者に配信されます。 |
| 配信しない | レポートは受信者に配信されません。このオプションは、パブリケーション全体を再作成せずに、特定のパブリケーション実行から Crysyal レポートを除外する場合に便利です。 |
| レポートにデータが含まれる場合のみ配信する | パーソナライゼーションの後、レポートに受信者向けのデータが含まれる場合にのみ、レポートが受信者に配信されます。このオプションは、高ボリュームのパブリケーションの処理負荷を低減する必要がある場合に便利です。 |

11.1.17.1.3 Crystal レポートのグローバル配信ルールを設定する

注

グローバル配信ルールを設定する Crystal レポートには、アラートが含まれている必要があります。

グローバル配信ルールでは、パブリケーションを処理してすべての受信者に配信するかどうかを決定します。グローバル配信ルールは、BI プラットフォームの任意の Crystal レポートで設定できます。

- 1 [追加オプション] を展開し、[配信ルール] をクリックします。
- 2 [グローバル配信ルール]領域で[参照]をクリックします。
ダイアログボックスが開き、グローバル配信ルールを設定する Crystal レポートを選択できます。
- 3 目的の Crystal レポートを探して選択し、[OK]をクリックします。
ダイアログボックスが閉じます。
- 4 [条件]一覧で、グローバル配信ルールに従ってレポートに含める必要があるアラート値を選択します。

11.1.17.1.4 マージされた PDF を書式設定する

- ・ マージされた PDF に含める Crystal レポートにはタイトルが必要です。レポートのタイトルを設定するには、SAP Crystal Reports でレポートを開き、[ファイル] > [プロパティ] を選択します。[概要] タブの [タイトル] ボックスに、レポートのタイトルを入力します。レポートを保存し、リポジトリに再エクスポートします。
- ・ [ソースドキュメント] 領域で、マージする Crystal レポートおよび PDF ファイルが正しい順序で表示されている必要があります。
- ・ [書式設定] 領域で、マージされた PDF ファイルに含める各 Crystal レポートの形式として PDF が選択されている必要があります。
- ・ [出力先] 領域で、マージされた PDF ファイルを送信する各出力先に対し、[エクスポートされた PDF をマージ] が選択されている必要があります。

[結合 PDF オプション] 領域のオプションを設定すると、Crystal レポートのパブリケーションで生成されたマージ済み PDF をカスタマイズできます。

- 1 [追加オプション] を展開し、[結合 PDF オプション] をクリックします。
- 2 マージされた PDF ファイルの目次を作成し、書式設定します。

注

この書式設定オプションを有効にするには、[形式] 領域の [ドキュメント] 一覧で Crystal レポートを選択します。[レポートで指定されたエクスポートオプションを使用] をオフにし、[グループツリーからブックマークを作成] を選択します。これを、一覧の各 Crystal レポートで実行します。この操作をしなかった場合、マージされた PDF ファイルの目次に Crystal レポートは表示されません。

- a [目次の作成] を選択します。
目次の書式設定オプションが使用可能になります。
 - b [タイトル] ボックスに、目次のタイトルを入力します。
 - c 目次のタイトルおよび項目に使用するフォント、ポイント単位のフォントサイズ、フォントの色を設定します。
- 3 マージされた PDF ファイルのページ番号の書式設定オプションを指定します。
 - a [実行中のページ番号を適用] を選択します。
ページ番号の書式設定オプションが使用可能になります。
 - b [数値の形式] ボックスに、ページ番号の表示形式を入力します。
デフォルトでは、Page &p of &P が設定されています。この形式は変更できます。ただし、現在のページ番号のプレースホルダには &p、ページ総数のプレースホルダには &P を使用する必要があります。
 - c [数値の場所] 一覧で、マージされた PDF ファイルのページ番号の向きを選択します。
 - d ページ番号に使用するフォント、ポイント単位のフォントサイズ、フォントの色を設定します。
 - e 目次にページ番号を含める場合は、[目次ページにページ番号を適用] を選択します。
 - 4 受信者のログオン認証情報と受信者アクションに関する許可を設定します。
 - a [ユーザパスワード] ボックスに、マージされた PDF ファイルを受信者が表示する場合に必要なパスワードを入力します。
 - b [所有者パスワード] ボックスに、マージされた PDF ファイルを受信者が編集する場合に必要なパスワードを入力します。
 - c 以下のチェックボックスをオンまたはオフにして、ユーザアクションに関する許可を設定します。

| オプション | 説明 |
|-------------|---|
| 印刷を許可 | 受信者に PDF ファイルの印刷を許可するには、このオプションを選択します。 |
| コンテンツの変更を許可 | 受信者に PDF ファイルの変更を許可するには、このオプションを選択します。 |
| コピーと貼り付けを許可 | 受信者に PDF ファイル内のコンテンツのコピーと貼り付けを許可するには、このオプションを選択します。 |
| 注釈の変更を許可 | 受信者に PDF ファイルの注釈の変更を許可するには、このオプションを選択します。 |

11.1.17.1.5 Crystal レポートのデータベースログオン情報を設定する

このタスクを開始する前に、Crystal レポートのデータベース設定が適切かどうか確認することをお勧めします。CMC の[フォルダ]領域で Crystal レポートを選択し、[マージ] > [デフォルト設定] > [データベース設定]に移動し、データベース情報を確認するか、新しい情報を入力します。

場合によっては、Crystal レポートが内部的に参照するデータソース情報を修正する必要があります。その場合は、[SAP Crystal Reports] で Crystal レポートを開き、[データベース] > [データソースの保存場所の設定]に移動します。[データソースの保存場所の設定]ダイアログボックスで、接続を選択するか、新しい接続を作成します。

このタスクでは、受信者がデータベースにログオンしたり、Crystal レポートのデータを最新表示したりする場合に必要なデータベースログオン情報を変更できます。

- 1 [追加オプション] を展開し、[データベースログオン] をクリックします。
- 2 [タイトル]一覧から Crystal レポートを選択します。
Crystal レポートのデータベース情報が[タイトル]一覧の下に表示されます。
- 3 [データベースサーバ] および [データベース] ボックスに表示されている情報が正しいことを確認してください。
- 4 [ユーザ] ボックスに、受信者がログオンに使用するユーザ名を入力します。
- 5 [パスワード] ボックスにパスワードを入力します。

11.1.17.2 Web Intelligence ドキュメントパブリケーションの追加パブリケーション機能

11.1.17.2.1 Web Intelligence ドキュメントのプロンプト値を変更する

注

ドキュメントには、すでにプロンプトが含まれている必要があります。

このタスクはオプションです。ユーザは、ドキュメントに含まれる定義済みプロンプト値をそのまま使用したり、プロンプト値の一覧を編集したりすることができます。

- 1 [追加オプション] を展開し、[プロンプト] をクリックします。

注

プロンプトが含まれた Web Intelligence ドキュメントだけが表示されます。

- 2 [変更] をクリックします。
[プロンプト] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 [値の最新表示] をクリックします。
左側に、指定可能なプロンプト値の一覧が表示されます。
- 4 プロンプト値を左側の一覧から右側の一覧に移動します。
- 5 [適用] をクリックします。
[プロンプト] ダイアログボックスが閉じ、プロンプト値の一覧が更新されます。

11.1.17.3 パブリケーション拡張を指定する

パブリケーション拡張を使用する前に、拡張機能が、Adaptive Processing Server が動作するマシンにデプロイされている必要があります。場所は、オペレーティングシステムによって変わります。

| オペレーティングシステム | 場所 |
|--------------|---|
| Windows | INSTALL DIR¥SAP BusinessObjects¥SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0¥java¥lib¥ |
| UNIX | INSTALLDIR/sap_bobj/enterprise_xi40/java/lib/ |

拡張機能が配布されたら、Adaptive Processing Server と、公開サービスをホストするその他のサーバを再起動する必要があります。

パブリケーション拡張の詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム Java SDK 開発者ガイド』を参照してください。

- 1 [追加オプション] を展開し、[パブリケーション拡張] をクリックします。
- 2 [パブリケーション拡張名] フィールドに、拡張の名前を入力します。
- 3 [クラス名] フィールドに、拡張の完全修飾クラス名を入力します。
- 4 必要に応じて、[パラメータ] フィールドにパラメータを入力します。
- 5 処理の後、パブリケーションを配信する前に拡張を使用する場合は、[パブリケーション配信前] の上にある [追加] ボタンをクリックします。
拡張が [パブリケーション配信前] 一覧に追加されます。
- 6 パブリケーションの配信後に拡張を使用する場合は、[パブリケーション配信後] の上にある [追加] ボタンをクリックします。

拡張が[パブリケーション配信後]一覧に追加されます。

- 7 追加するすべての拡張に対し、それぞれ手順 2 ～ 6 を繰り返します。

ヒント

拡張の実行順序を設定するには、各一覧の下にある[上へ移動]または[下へ移動]をクリックします。

11.1.17.4 成功または失敗したパブリケーションジョブに関する電子メール通知を設定する

電子メール通知に Adaptive Job Server のデフォルトを使用する場合は、Adaptive Job Server を正しく設定する必要があります。

パブリケーションジョブの実行後に電子メール通知を受信するには、次のタスクを実行します。

注

この機能は CMC のみで使用できます。

- 1 [追加オプション] を展開し、[通知] をクリックします。
- 2 [電子メール通知: 無効] を展開します。
- 3 成功したパブリケーションジョブに関する電子メール通知を受信するには、[ジョブの実行の成功]を選択し、下に表示されるオプションを設定します。
 - ・ Adaptive Job Server のデフォルトを使用するには、[Job Server のデフォルト値を使用する] をクリックします。
 - ・ ユーザ独自の設定を使用するには、[ここで使用する値を設定する]をクリックし、適切なフィールドに独自の設定を入力します。
 - ・ [差出人]フィールドに、電子メールアドレスまたは名前を入力します。
 - ・ [宛先]フィールドに、電子メールの送信先アドレスを入力します。
 - ・ [CC]フィールドに、電子メール通知を受信するユーザの電子メールアドレスを入力します。
 - ・ [件名]フィールドに、電子メールの件名を入力します。
 - ・ [メッセージ]フィールドに、電子メール通知に添付するメッセージを入力します。
- 4 失敗したパブリケーションジョブに関する電子メール通知を受信するには、[ジョブの実行の失敗]を選択し、下に表示されるオプションを設定します。
 - ・ Adaptive Job Server のデフォルトを使用するには、[Job Server のデフォルト値を使用する] をクリックします。
 - ・ ユーザ独自の設定を使用するには、[ここで使用する値を設定する]をクリックし、適切なフィールドに独自の設定を入力します。
 - ・ [差出人]フィールドに、電子メールアドレスまたは名前を入力します。
 - ・ [宛先]フィールドに、電子メールの送信先アドレスを入力します。
 - ・ [CC]フィールドに、電子メール通知を受信するユーザの電子メールアドレスを入力します。
 - ・ [件名]フィールドに、電子メールの件名を入力します。
 - ・ [メッセージ]フィールドに、電子メール通知に添付するメッセージを入力します。

11.1.17.5 パブリケーションジョブ用の監査通知を有効化する

パブリケーションジョブ用の監査通知を有効にする場合は、このタスクを実行します。監査の詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』を参照してください。

注

この機能は CMC のみで使用できます。

- 1 [追加オプション] を展開し、[通知] をクリックします。
- 2 [監査通知: 無効] を展開します。
- 3 成功したパブリケーションジョブを監査する場合は、[ジョブの実行の成功]を選択します。
- 4 失敗したパブリケーションジョブを監査する場合は、[ジョブの実行の失敗]を選択します。

11.1.17.6 イベントを指定する

イベントベースのスケジュールを使用すると、パブリケーションのスケジュールをより詳細に制御できます。たとえば、指定したイベントが発生した後にのみパブリケーションが処理されるように、イベントを設定できます。

イベントの発生後にパブリケーションジョブを実行する場合、または、パブリケーションジョブの完了時に他のイベントを呼び出す場合には、このタスクを実行します。

- 1 [追加オプション] を展開し、[イベント] をクリックします。
- 2 パブリケーションにファイルベースのカスタムイベントを指定する場合は、それらのイベントを[利用可能なイベント]一覧から[待機するイベント]一覧に移動します。
これらのイベントにより、パブリケーションジョブが起動されます。
- 3 パブリケーションにスケジュールイベントを指定する場合は、それらのイベントを[利用可能なスケジュールイベント]一覧から[完了時に発生させるイベント]一覧に移動します。
パブリケーションジョブの実行後、これらのイベントが発生します。

11.1.17.7 サーバグループオプションを設定する

このタスクは、特定のサーバを使用してパブリケーションを処理する場合に実行します。サーバグループの詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』を参照してください。

注

フェデレーションのサイトをまたいでパブリケーションをスケジュールすることはできません。

- 1 [追加オプション] を展開し、[スケジューリングサーバグループ] をクリックします。
- 2 サーバグループオプションを選択します。

| オプション | 説明 |
|---------------------------|--|
| 最初に見つかった利用可能なサーバを使用する | パブリケーションジョブは、十分な処理能力を持ち、最初に見つかった利用可能なサーバによって処理されます。このオプションは、デフォルトで選択されています。 注 CMC にサーバグループが存在しない場合は、このオプションのみを使用できます。 |
| 選択したグループに所属するサーバを優先して使用する | パブリケーションジョブは、まず指定されたサーバグループのサーバを使用して試行されます。これらのサーバの処理能力が不足している場合、他のサーバグループを使用してジョブが試行されます。このオプションを選択する場合は、利用可能なサーバグループの一覧からもサーバグループを選択する必要があります。 |
| 選択したグループに所属するサーバだけを使用する | パブリケーションジョブには、指定されたサーバグループのサーバだけが使用されます。このオプションを選択する場合は、利用可能なサーバグループの一覧からもサーバグループを選択する必要があります。 |

11.1.17.8 プロファイルの解決方法を指定する

プロファイルの競合が発生した場合、インスタンスを個別のドキュメントとしてマージまたは配信するかどうかは、ユーザが指定したプロファイルの解決方法によって決定されます。

- 1 [追加オプション] を展開し、[詳細設定] をクリックします。
- 2 [プロファイルの解決方法]の下で、[マージする]または[マージしない]をクリックします。

11.1.17.9 レポートバースト方式を指定する

ユーザが指定したレポートバースト方式により、ソースドキュメントのパーソナライゼーション、処理、および配信方法が決定されます。

- 1 [追加オプション] を展開し、[詳細設定] をクリックします。
- 2 [レポートバースト方法] の下にあるオプションのいずれか 1 つを選択します。

注

パブリケーションが動的受信者のみを対象にしている場合、[受信者ごとのデータベースフェッチ] は使用できません。

警告

パブリケーションが以下の基準を満たしている場合は、レポートバーストの方法を慎重に選択します。

- ・ パブリケーションには Enterprise 受信者向けの Web Intelligence ドキュメントが含まれます。
- ・ パーソナライゼーションに使用されるプロファイルには、フィルタ式があります。

レポートバースト方法が異なる場合は、ドキュメントのパーソナライゼーションと処理の際に異なるフィルタタイプが使用されます。[すべての受信者のデータベースフェッチ] はレポートフィルタを使用し、[受信者ごとのデータベースフェッチ] はクエリフィルタを使用します。各フィルタタイプは同様に、異なる演算子のセットをサポートします。レポートバーストの方法でサポートされない演算子をフィルタ式が使用する場合は、パブリケーションに失敗することがあります。

11.2 パブリケーションのデザイン後のタスク

この節で説明するタスクはオプションであり、パブリケーションデザインプロセスの後に実行することができます。

11.2.1 パブリケーションの最終処理

デザインプロセスの途中または後の任意の時点で、[概要] ページを使用してパブリケーションのプロパティの概要を確認できます。プロパティは、パブリケーションのタイトル、場所、説明、ソースドキュメント、受信者の種類 (Enterprise または動的) によってそのパブリケーションを受信する受信者数、パブリケーションのパーソナライズ方法、配布形式および出力先などです。

[要約] ページにアクセスするには、[要約] をクリックします。ナビゲーション一覧の他のオプションを使用して、プロパティの変更や、パブリケーションの保存およびスケジュールを実行できます。

11.2.2 パブリケーションをテストする

テストモードを使用すると、受信者への送信前にパブリケーションを自分自身に送信し、テストすることができます。テストでは、受信者と同じ情報を受信できます。パブリケーションの受信者ではなく、ユーザの BI 受信ボックスまたは電子メールアドレスが使用されるよう、出力先は自動的に更新されます。テストモードでは、元の受信者グループから一部の受信者を除外することもできます。

- 1 [テストモード] をクリックします。
- 2 必要に応じて Enterprise 受信者の一覧を変更します。
 - a [Enterprise 受信者] をクリックします。
 - b [電子メール受信者] の下の [宛先] フィールドに、所有している電子メールアドレスを入力します。
このフィールドは、パブリケーションが電子メール出力先向けである場合にのみ表示されます。BI プラットフォームでは、テストモード中に生成されたすべての電子メールパブリケーションインスタンスを、ここで指定した電子メールアドレスに送信します。

- c ユーザまたはグループを[利用可能]一覧から[選択]または[除外する]一覧に移動します。
- 3 必要に応じて動的受信者の一覧を変更します。
 - a [動的受信者] をクリックします。
 - b [電子メール受信者]の下[宛先]フィールドに、所有している電子メールアドレスを入力します。
このフィールドは、パブリケーションが電子メール出力先向けである場合にのみ表示されます。BI プラットフォームでは、テストモード中に生成されたすべての電子メールパブリケーションインスタンスを、ここで指定した電子メールアドレスに送信します。
 - c 受信者 ID、フルネーム、および電子メールアドレスにマップされる列が正しいことを確認します。
 - d [完全リストの使用]を選択または選択解除します。
 - e [完全リストの使用]をオフにした場合は、[利用可能]一覧に含める、あるいは一覧から除外するユーザまたはグループを、[選択]または[除外する]一覧に移動します。
- 4 [テスト]をクリックします。
パブリケーションがテストモードで実行されます。

11.2.3 パブリケーションを購読または購読解除する

適切な権利を所持する Enterprise 受信者は、パブリケーションを購読または購読解除することができます。パブリケーションインスタンスの購読または購読解除も可能です。たとえば、パブリケーションが週 2 回実行されるようスケジュールされている場合、受信者は最初のパブリケーションインスタンスを購読し、2 回目のインスタンスは購読しないよう指定できます。

注

動的な受信者は、自動的に購読または購読解除を行うことができません。

- 1 パブリケーションを参照し、選択します。
- 2 パブリケーションを購読する、または購読を解除するには、以下の 1 つを実行します。
 - ・ CMC を使用している場合は、[アクション] > [購読] または [アクション] > [購読解除] をクリックします。
 - ・ BI 起動パッドを使用している場合は、[その他のアクション] > [購読] または [その他のアクション] > [購読解除] をクリックします。

ヒント

パブリケーションインスタンスの購読または購読解除を行うには、パブリケーションを選択して、CMC を使用している場合は [アクション] > [履歴] をクリックし、BI 起動パッドを使用している場合は [その他のアクション] > [履歴] をクリックします。[履歴] ウィンドウでインスタンスを選択し、購読または購読解除します。

11.2.4 パブリケーションの実行をスケジュールする

パブリケーションをデザインおよび保存した後、それを実行するスケジュールを設定できます。

パブリケーションをスケジュールする場合は、[定期]セクションで行った設定を使用するか、あるいは新しい設定を入力することができます。パブリケーションをスケジュールするたびに、受信者を変更することもできます。

- 1 パブリケーションデザインページを閉じます。
- 2 パブリケーションを選択します。
- 3 CMC で [アクション] > [スケジュール] を選択するか、BI 起動パッドで [その他のアクション] > [スケジュール] を選択します。
- 4 定期的なスケジュールの情報が正しいことを確認します。
- 5 [スケジュール]をクリックします。
パブリケーションが実行されます。

ヒント

パブリケーションの実行中に進捗を表示するには、CMC で [アクション] > [履歴] を選択するか、BI 起動パッドで [その他のアクション] > [履歴] を選択します。[ステータス] 列で、ステータス ([成功]、[失敗]、[実行中]) をクリックし、[パブリケーションの履歴] ダイアログボックスの下にある [ログファイルの表示] リンクをクリックします。

11.2.5 パブリケーション結果の表示

公開者によるパブリケーション結果の表示

パブリケーションの結果はさまざまな方法で表示できます。パブリケーションを実行すると、パブリケーション履歴が表示されます。パブリケーション履歴には、パブリケーションのインスタンス、実行時間、およびその成否が一覧表示されます。[インスタンスの日時]列でパブリケーションインスタンスのリンクをクリックすると、その日時にパブリケーションが実行されたときに受信者全員に対して生成されたインスタンスを表示できます。

ヒント

任意の時間にパブリケーション履歴にアクセスするには、CMC でパブリケーションを選択し、[アクション] > [履歴] または BI 起動パッドで [その他のアクション] > [履歴] に移動します。

パブリケーションジョブ用のログファイルの表示

ログファイルは、パブリケーションをトラブルシューティングしたり、パブリケーションインスタンスを受信しなかった受信者を特定する場合に便利です。BI プラットフォームでは、パーソナライズされたパブリケーションインスタンスの各バッチが処理されると、パブリケーションジョブの詳細をログに記録し、これらの詳細を1つまたは複数のログファイルにまとめます。ログファイルの最大サイズは10 MBで、この値は変更できません。多数の詳細を含む大容量のパブリケーションを実行している場合、パブリケーションインスタンスのログファイルが複数になる場合があります。

パブリケーションインスタンスのログファイルを表示するには、次の2つの方法があります。

- 一連のログファイルの最後のログファイルを表示するには、[アクション] > [履歴]をクリックします。[ステータス]列で、ステータス([成功]、[失敗]、[実行中])をクリックし、[パブリケーションの履歴]ダイアログボックスの下にある[ログファイルの表示]リンクをクリックします。

ヒント

この操作は、パブリケーションの実行中にも実行できます。

- ・ すべてのログファイルを表示するには、[アクション]>[履歴]をクリックします。[インスタンスの日時]列で、パブリケーションインスタンスのリンクをクリックします。パーソナライズされたインスタンスの後にログファイルがリストされます。

ログファイルは、2 分おきに新しい詳細で更新されます。パブリケーションジョブが 2 分未満しか実行されなかった場合、ログファイルのステータスは“待機”になります。

受信者によるパブリケーション結果の表示

パブリケーションの表示方法を次の表に示します。

| 出力先 | パブリケーション結果の表示方法 |
|-----------------------|--|
| デフォルトの Enterprise の場所 | <p>受信者は、自身のパーソナライズ済みパブリケーションインスタンスのみを BI プラットフォームで表示できます。他の受信者向けにパーソナライズされたパブリケーションインスタンスは表示できません。</p> <p>注 動的受信者が BI プラットフォームにログインしてパブリケーション結果を表示することはできません。</p> <ol style="list-style-type: none"> CMC を起動します。 <ul style="list-style-type: none"> Windows では、[プログラム] > [SAP Business Intelligence] > [SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4] > [SAP BusinessObjects BI プラットフォームセントラル管理コンソール] に移動します。 あるいは、お使いの Web ブラウザを開いて次のように入力します。 <code>http://servername:connectionport/CMC</code> <p>ここで、servername はお使いの CMS 名、connectionport はインストール時に指定された接続ポート番号を表します。デフォルトの接続ポート番号は 8080 です。</p> ログオン認証情報を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> [システム]フィールドで、CMS 名と CMS ポートが正しいことを確認します。 ユーザ名とパスワードを入力します。 [認証]一覧から認証タイプを選択します。 [ログオン]をクリックします。 [フォルダ]領域に移動し、目的のパブリケーションを探して選択します。 [アクション] > [履歴]をクリックします。 [インスタンスの日時]列のリンクをクリックします。 表示するインスタンスをダブルクリックします。 |
| BI 受信ボックス | |

| 出力先 | パブリケーション結果の表示方法 |
|----------|---|
| | <p>注 動的受信者が BI 起動パッドにログオンしてパブリケーション結果を表示することはできません。</p> <ol style="list-style-type: none"> BI 起動パッド を起動します。 <ul style="list-style-type: none"> Windows では、[プログラム] > [SAP Business Intelligence] > [SAP BusinessObjects BI プラットフォーム 4] > [SAP BusinessObjects BI プラットフォーム Java BI 起動パッド] に移動します。 あるいは、お使いの Web ブラウザを開いて次のように入力します。 http://servername:connectionport/BOE/BI ここで、servername はお使いの CMS 名、connectionport はインストール時に指定された接続ポート番号を表します。デフォルトの接続ポート番号は 8080 です。 ログオン認証情報を入力します。 <ul style="list-style-type: none"> [システム]フィールドで、CMS 名が正しいことを確認します。 ユーザ名とパスワードを入力します。 [認証]一覧から認証タイプを選択します。 [ログオン]をクリックします。 [マイ受信ボックス]をクリックします。 表示するインスタンスをダブルクリックします。 |
| 電子メール | 電子メールにログオンし、埋め込まれたパブリケーションコンテンツを表示するか、添付ファイルをダウンロードします。 |
| FTP サーバ | FTP ホストにログオンします。 |
| ローカルディスク | パブリケーションのデザイン時に指定された場所に移動します。 |

11.2.6 パブリケーションインスタンスを再配布する

成功したパブリケーションインスタンスは、最初のパブリケーション実行時に指定された Enterprise 受信者および動的受信者に再配布できます。この機能は、パブリケーション全体を再実行せずに受信者にインスタンスを送信する場合に便利です。

- パブリケーションを参照し、選択します。
- CMC を使用している場合は、[アクション] > [履歴] をクリックします。または、BI 起動パッドを使用している場合は、[その他のアクション] > [履歴] をクリックします。
パブリケーションの履歴が表示されます。
- 成功したパブリケーションインスタンスを選択します。

- 4 CMC を使用している場合は、[アクション] > [再配布] をクリックします。または、BI 起動パッドを使用している場合は、[その他のアクション] > [再配布] をクリックします。
- 5 再配布されたインスタンスを受信する受信者を選択します。

注

再配布されたインスタンスを受信できるのは、パブリケーションが最初に行われたときに指定された受信者だけです。

- ・ Enterprise 受信者にインスタンスを再配布する手順は、次のとおりです。
 - a [Enterprise 受信者]を展開します。
 - b Enterprise 受信者を[利用可能]一覧から[選択]一覧に移動します。
 - ・ 動的受信者にインスタンスを再配布する手順は、次のとおりです。
 - a [動的受信者]を展開します。
 - b 受信者 ID、フルネーム、および電子メールアドレスにマップされる列が正しいことを確認します。
 - c 動的受信者全員にパブリケーションを再配布する場合は、[完全リストの使用]を選択します。それ以外の場合は、[完全リストの使用]をオフにします。
 - d 動的受信者を[利用可能]一覧から[選択]一覧に移動します。
- 6 [再配布]をクリックします。

パブリケーションの履歴が表示され、再配布の対象として選択したインスタンスのステータスが“実行中”になります。[インスタンスの日時]列に表示される日付は、再配布の日時に合わせて更新されます。

11.2.7 失敗したパブリケーションを再試行する

このタスクを開始する前に、失敗したパブリケーションインスタンスのログファイルを確認し、エラーを修正し、パブリケーションを再スケジュールすることをお勧めします。

- 1 失敗したパブリケーションインスタンスが含まれるパブリケーションを選択します。
- 2 CMC を使用している場合は、[アクション] > [履歴] をクリックします。または、BI 起動パッドを使用している場合は、[その他のアクション] > [履歴] をクリックします。

パブリケーションの履歴が表示されます。
- 3 失敗したパブリケーションインスタンスを選択します。
- 4 CMC を使用している場合は、[アクション] > [再試行] をクリックします。または、BI 起動パッドを使用している場合は、[その他のアクション] > [再試行] をクリックします。

インスタンスのステータスが“実行中”になります。

パブリケーションが再び失敗した場合は、新しいログファイルを参照し、発生したエラーを修正してください。

11.3 パブリケーションパフォーマンスの向上

Adaptive Processing Server

パブリケーション中に Adaptive Processing Server の CPU 使用率およびメモリ使用率が高くなる場合は、次を実行します。

- ・ 使用可能な CPU が多く、SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム 4.0 Feature Pack 3 以降がインストールされているより高速なマシンに Adaptive Processing Server を移行します。Adaptive Processing Server は使用できる CPU 数に合わせて自動調整されます。
- ・ 専用の Adaptive Processing Server インスタンス上で公開サービスおよびパブリッシングポスト処理サービスを分離し、サーバにホストされている使用されていないサービスを削除します。各サービスは Adaptive Processing Server 上で多くの共有リソース (リクエストスレッドプール、メモリ、および CPU) を消費するため、公開パフォーマンスが改善される場合があります。

公開サービス

- ・ 多くのパブリケーションインスタンスを同時に実行するデプロイメントでは、基礎をなす CMS、FRS、Adaptive Job Server、レポート処理サーバが適切に調整されている場合、公開サービスを複数の Adaptive Processing Server インスタンス (1 つまたは複数のマシン) に水平的に「拡張」することで、より多くのパブリケーションインスタンスを同時に処理できます。

一方で、単一のパブリケーションジョブ (たとえば、受信者が 100 万名の 1 つのジョブ) は、複数の Adaptive Server でホストされている公開サービス間で共有されません。公開サービスの水平的な拡張では、受信者数にかかわらず、単一のパブリケーションの処理時間は短縮されません。

- ・ 多くの受信者がいるパブリケーションでは、CPU 数が多く、RAM 容量の大きいマシンで Adaptive Processing Server を垂直的に拡張します。これにより、公開サービスでより多くの受信者を処理し、Adaptive Processing Server でより多くのジョブを生成できます。Adaptive Job Server およびレポート処理サーバも、スループット拡大のために適宜調整が必要になる場合があります。

注

CPU コアが 9 個以上あるマシンで Adaptive Processing Server を実行する場合は、Adaptive Processing Server のヒープサイズを拡大 (-Xmx を 2 GB 以上に設定) することが適切です。CPU コア数が増えると、Adaptive Processing Server でより多くのスレッドを生成でき、スループットが増大します。ただし、スレッド数の増加に応じて RAM 容量も増大させる必要があります。

- ・ 公開はディスクに負荷をかけるプロセスであるため、入出力性能の高い、または FRS 用に SAN ディスクを使用するマシンを使用します。
- ・ 公開クリーンアップオプションを使用します。再配信の必要のない大規模なパブリケーションのため、またはレポートでアーティファクトを表示する場合は、デフォルトの出力先を選択しないでください。
- ・ (Crystal レポートパブリケーション) 受信者ごとに一意の最新表示セキュリティを適用する必要のない場合は、[受信者のバッチごとのデータベースフェッチ]を選択します。データベースアクセスが複数の小規模な同時クエリにバッチ化されます。
- ・ (Web Intelligence パブリケーション) [すべての受信者のデータベースフェッチ]または[受信者ごとのデータベースフェッチ]を選択します。大規模なパブリケーションで[すべての受信者のデータベースフェッチ]を選択した場合は、データベースクエリを複数の小規模なアトミッククエリに分割するために、公開サービスをホストする Adaptive Processing Server のコマンドラインで「-Dcom.businessobjects.publisher.scope batch.max.recipients=<integer>」と入力します。
- ・ 大規模なパブリケーションでは、Windows の単一フォルダへのディスクデリバリーが長時間低速になる場合があります。解決策は、短いファイル名の生成を無効にすることです。詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/210638> および <http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc778996%28WS.10%29.aspx> を参照してください。単一のフォルダにあるファイルが 300 KB を超える場合に短いファイル名の生成を無

効にする方法については、[http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc781134\(WS.10\).aspx](http://technet.microsoft.com/en-us/library/cc781134(WS.10).aspx) を参照してください。

パブリッシングポスト処理サービス

[ZIP ファイルとしてパッケージ化する] チェックボックス ([スケジュール] ページ) および/または [エクスポートされた PDF をマージ] チェックボックス ([出力先] ページ) を選択するか、パブリケーションでカスタムポスト処理プラグインを有効化すると、パブリッシングポスト処理サービスが呼び出されます。両方のチェックボックスを選択したパブリケーションでは、追加のパブリッシングポスト処理サービスを作成してパブリケーション処理時間を短縮する必要があります。ただし、パブリッシングポスト処理サービスが受信する量は、公開サービスの調整方法により制限されます。

パブリッシングポスト処理サービスを水平的に拡張した場合は、ZIP および PDF をマージするワークロードは、複数の Adaptive Processing Server にホストされた複数のパブリッシングポスト処理サービス全体に分散されます。

11.3.1 ソースドキュメントの追加に関する推奨事項

この節では、パブリケーションに動的コンテンツドキュメントを追加する際の推奨事項について説明します。

パブリケーションログファイルを使用して、失敗したパブリケーションをトラブルシューティングする。

パブリケーションの実行をスケジュールすると、ログファイルが生成され、パブリケーションの実行時に発生したエラーが記録されます。パブリケーションインスタンスのログファイルをすべて表示するには、[アクション] > [履歴] をクリックします。[履歴] ページで、[インスタンスの日時] 列にあるインスタンスリンクをクリックします。

Crystal レポートでパラメータを使用したパーソナライゼーションを使用する場合は、パラメータをデフォルトに設定する。

パラメータベースのパーソナライゼーションを実行すると、パブリケーションのパフォーマンスが低下する場合があります。Enterprise 受信者のプロファイルまたは動的受信者のパーソナライゼーション値にフィールドをマップして、Crystal レポートのパブリケーションをパーソナライズすることを強くお勧めします。ただし、パラメータを使用して Crystal レポートをパーソナライズする必要がある場合は、[パーソナライゼーション] セクションのパラメータを[デフォルト]に設定します。

注

Enterprise 受信者のプロファイルを使用するには、システム管理者が BI プラットフォームでそのプロファイルを設定する必要があります。

動的コンテンツドキュメントをパブリケーションに追加する前に、それらを表示してスケジュールする。

動的コンテンツドキュメントを正しく表示およびスケジュールできた場合は、データソース接続が正しく機能し、パブリケーションをスケジュールするときにソースドキュメントデータを最新表示できます。動的コンテンツドキュメントを正しく表示およびスケジュールできない場合は、データソース接続の設定が間違っています。設定の確認方法を次の表に示します。

| ドキュメントの種類 | データソース接続の設定の確認方法 |
|-------------------------|--|
| Crystal レポート | CMC で Crystal レポートを選択し、[管理] > [デフォルト設定] に移動します。[デフォルト設定] ダイアログボックスで、ナビゲーションパネルの [データベース設定] をクリックします。 |
| Web Intelligence ドキュメント | CMC で Web Intelligence ドキュメントを選択し、[管理] > [デフォルト設定] に移動します。[デフォルト設定] ダイアログボックスで、ナビゲーションパネルの [レポートユニバース] をクリックします。 |

場合によっては、適切なデザインで動的コンテンツドキュメントを開いてデータベースソース接続を設定し、CMS リポジトリにファイルを再エクスポートして、前のコピーを上書きする必要がある場合があります。動的コンテンツドキュメントのデータソース接続の設定については、デザイナのマニュアルを参照してください。

不必要なデータの最新表示をしない。

動的コンテンツドキュメントのデータを最新表示する必要がない場合は、[ソースドキュメント] セクションで、そのドキュメントの [実行時に最新表示] チェックボックスをオフにします。これにより、パブリケーションの全体的なパフォーマンスが向上します。

11.3.2 動的受信者ソースの使用に関する推奨事項

この節では、動的受信者ソースを使用する際の推奨事項について説明します。

動的受信者ソースは受信者 ID 列 に従って並べ替える。

一般的に、動的受信者ソースは受信者 ID 列 に従って並べ替えることをお勧めします。特に、高ボリュームのパブリケーションを実行している場合、または [受信者のバッチごとのデータベースフェッチ] を有効にしている場合は、複数のパーソナライゼーション値を持つ受信者への配信数を低減できるため、この並べ替えは重要です。

Crystal レポートの動的受信者ソースの場合は、データベースの設定情報が正しいことを確認する。

CMC で動的受信者ソースを選択し、[管理] > [デフォルト設定] に移動し、次のことを確認します。

- ・ [データベース設定] セクションで、データベースログオン情報が正しく設定されており、[レポート実行時と同じデータベースログオン情報を使用する] が選択されている。
- ・ [パラメータ] セクションで、すべてのパラメータに値が指定されており、パラメータのすべての [表示時にプロンプトを表示] チェックボックスがオフになっている。

Crystal レポートの動的受信者ソースを使用する場合は、Report Application Server(RAS)が正しく設定されていることを管理者に確認する。

RAS は、少なくとも動的受信者ソースの受信者と同数のデータベースレコードを読み込むよう設定する必要があります。たとえば、100,000 人の受信者のデータを持つ動的受信者ソースを処理するには、100,000 件以上のデータベースレコードを読み込むよう RAS を設定する必要があります。

11.3.3 電子メールのパブリケーションインスタンスの送受信に関する推奨事項

この節では、電子メールパブリケーションインスタンスに関する推奨事項について説明します。

可能であれば、電子メールパブリケーションインスタンスに埋め込まれたコンテンツを Outlook 2003 で表示する。

電子メールパブリケーションインスタンスに埋め込まれたコンテンツを Outlook 2007 や、Hotmail、Gmail などの Web 電子メールアカウントで表示すると、形式上の問題が発生する場合があります。

Destination Job Server で電子メールが正しく設定されているか管理者に確認する。

電子メールで送信するパブリケーションは、Adaptive Job Server の出力先が正しく設定されていないことが原因で失敗する場合があります。詳細については、『SAP BusinessObjects Business Intelligence プラットフォーム管理者ガイド』を参照してください。

より詳しい情報

| 情報リソース | 場所 |
|--------------------------|---|
| SAP BusinessObjects 製品情報 | http://www.sap.com |
| SAP ヘルプ ポータル | <p>http://help.sap.com/businessobjects/ へアクセスし、[SAP BusinessObjects Overview] サイドパネルから [All Products] をクリックします。</p> <p>SAP ヘルプ ポータルでは、すべての SAP BusinessObjects 製品とそのデプロイメントについて扱った最新のドキュメンテーションにアクセスできます。PDF 版またはインストール可能な HTML ライブラリのダウンロードが可能です。</p> <p>一部のガイドは SAP サービス マーケットプレイスに格納されており、SAP ヘルプ ポータルからは入手できません。ヘルプ ポータルのガイド一覧で、そのようなガイドには SAP サービス マーケットプレイスへのリンクが付いています。保守契約を締結されたお客様には、このサイトにアクセスするための正規ユーザー ID が付与されます。ID の入手方法については、お客様担当のカスタマー サポート担当者までお問い合わせください。</p> |
| SAP サービス マーケットプレイス | <p>http://service.sap.com/bosap-support > ドキュメンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ インストール ガイド: https://service.sap.com/bosap-instguides ・ リリース ノート: http://service.sap.com/releasenotes <p>SAP サービス マーケットプレイスには、一部のインストール ガイド、アップグレードおよび移行ガイド、デプロイメント ガイド、リリース ノート、サポート対象プラットフォームに関するドキュメントが格納されています。保守契約を締結されたお客様には、このサイトにアクセスするための正規ユーザー ID が付与されます。ID の入手方法については、お客様担当のカスタマー サポート担当者までお問い合わせください。SAP ヘルプ ポータルから SAP サービス マーケットプレイスにリダイレクトされた場合は、左側のナビゲーション ペインのメニューを使用して、アクセスするドキュメンテーションが含まれているカテゴリを探します。</p> |
| Docupedia | <p>https://cw.sdn.sap.com/cw/community/docupedia</p> <p>Docupedia は追加のドキュメンテーションリソース、協調的なオーサリング環境、および対話型のフィードバックチャネルを提供します。</p> |

| 情報リソース | 場所 |
|---|--|
| 開発者向けリソース | https://boc.sdn.sap.com/ https://www.sdn.sap.com/irj/sdn/businessobjects-sdklibrary |
| SAP Community Network 上の SAP BusinessObjects に関する記事 | https://www.sdn.sap.com/irj/boc/businessobjects-articles これらの記事は、以前はテクニカル ペーパーという名称でした。 |
| ノート | https://service.sap.com/notes これらのノートは、以前はナレッジ ベース記事という名称でした。 |
| SAP Community Network 上のフォーラム | https://www.sdn.sap.com/irj/scn/forums |
| トレーニング | http://www.sap.com/services/education 弊社では、従来のクラス型の学習から目標を定めた eラーニング セミナーまで、学習ニーズや好みの学習スタイルに合わせたトレーニング パッケージを提供しています。 |
| オンライン カスタマー サポート | http://service.sap.com/bosap-support SAP サポート ポータルには、カスタマー サポート プログラムとサービスに関する情報が含まれています。また、さまざまなテクニカル情報およびダウンロードへのリンクも用意されています。保守契約を締結されたお客様には、このサイトにアクセスするための正規ユーザー ID が付与されます。ID の入手方法については、お客様担当のカスタマー サポート担当者までお問い合わせください。 |
| コンサルティング | http://www.sap.com/services/bysubject/businessobjectsconsulting コンサルタントは、初期の分析段階からデプロイメントプロジェクトの実現まで一貫したサポートを提供します。リレーショナル データベースと多次元データベース、接続、データベース設計ツール、カスタマイズされた埋め込みテクノロジーなどのトピックに関する専門的なサポートを行います。 |

索引

A

Adaptive Job Server 195
出力先の有効化 88

B

BI 起動パッド 56
カテゴリ 29
パブリケーション結果の表示 187
パブリケーションの作成 160
フォルダ 26
BI 受信ボックス
オブジェクトのスケジュール先 81
パブリケーションの送信先 146

C

Cache Server
レポートの表示 42
CMC
管理エリア 16
基本設定の選択 17
ナビゲーション 16
パブリケーション結果の表示 187
パブリケーションの作成 160
ログオン 15
CMC 基本設定のオプション 17
CMC でのオブジェクトプロパティ 20
CMC での基本設定 17
CMS、オブジェクトの保存先 21
CMS へのオブジェクトのエクスポート 21
Crystal Reports
SAP NetWeaver BW 56
SAP NetWeaver BW から追加 56
アラート 127, 128, 129, 130
アラート設定 130
公開形式 151
サムネイル 54
スケジュール形式 92
データベースログオンの設定 180
配信ルール 143, 177, 178
フィルタ 46
プロンプト値の指定 45
Crystal レポート
PDF のマージ 155
PDF ファイルのマージ
書式設定 178
アラート 54
印刷 177

Crystal レポート (続き)
形式
指定 170
追加のオプション 170
最新表示オプション 40
処理拡張機能 50
スケジュールに使用する Job Server
42
データベース設定 43
動的受信者ソースのトラブルシュー
ティング 194
トラブルシューティング 193
パーソナライゼーション
パラメータを使用した 168
ローカルプロファイルターゲット
169
表示オプション 41
既存のハイパーリンクを使用した追加
52

Crystal レポートのフィルタ選択 46
CSV、スケジュール形式 92

D

DLL ファイル 49

E

Enterprise 受信者の追加 162
Enterprise の場所とパブリケーション 146
Excel、スケジュール形式 92

F

FTP(出力先)
スケジュール 86
パブリケーション 146

J

Java プログラム 62
設定 66
他のファイルへのアクセスの設定 67
パラメータの設定 66

M

mHTML 167

N

NULL 値 60

P

PDF
結合 155
スケジュール形式 92
PVL 18

R

Report Application Server 42, 194

S

SAP BusinessObjects Enterprise 58
パーソナライゼーション 58
SAP BusinessObjects Enterprise SDK 49
SAP BusinessObjects Live Office 159
SAP BW
レポートの追加 56
SAP Easy Access 56
SAP NetWeaver BW
システムの移行 56
レポートの追加 55
SAP NetWeaver BW でのレポートコンテ
ンツの移行 56

T

TXT、スケジュール形式 92

W

Web Intelligence ドキュメント
キャッシュオプションの選択 97
形式の指定 175
公開形式 151
スケジュールに使用するサーバ 42
トラブルシューティング 193
パーソナライゼーション 175, 176
プロンプト 45
ユニバースの表示 54
Web Intelligence ドキュメントのキャッシュ
形式 97
Word、スケジュール形式 92

X

XML、スケジュール形式 92

あ

アクセス

イベント 119
カテゴリ 28, 29
カレンダー 114
フォルダ 24, 25
プロファイル 140

アクセス権

アラート 123, 126
イベント 119
カテゴリ 29
カレンダー 114
公開 156, 158
フォルダ 25
フォルダのコピー/移動時 24
プロファイル 140

アラート 126, 127, 128, 129, 130

アラートソース 121, 123

概要 121
権限の不整合 126
購読 127, 128, 129, 130
設定 130
必要な権限 123
表示 54
ほかのユーザの除外 130
有効化 127
ワークフロー 122

アラート通知 89

アンマネージドディスク(出力先) 84

い

イベント

アクセス 119
アラート 127, 128, 129, 130
アラート設定 130
アラート、有効化 127
カスタム 118
管理 114
スケジュール 97
スケジュールベース 116
通知 78
パブリケーション 183
ファイルベース 115

印刷

Crystal レポート 47
Crystal レポートパブリケーション 177
プリンタの割り当て 48

インスタンス 106

一時停止 106
オブジェクト 39

インスタンス (続き)

オブジェクトパッケージ 68
管理 101, 103, 105
検索する 104
再開 106
再配布 190
削除 106
スケジュール 39
送信 34
通知 78
表示 105
フォルダレベルで制限を設定 25
プログラムオブジェクト 62
列 105
レポートオブジェクト 39
インスタンスマネージャ 103
インポート 56
SAP NetWeaver BW コンテンツ 56

え

エリア、管理 16

お

お気に入りフォルダ 26

オブジェクト

CMS へのエクスポート 21
CMS への保存 21
移動 32
管理 31
検索 33
コピー 31
削除 33
失敗の通知 77
書式設定 90
スケジュール 73
成功の通知 77
送信 34
直ちに実行 100
追加
CMC で 19
オブジェクトパッケージへの 69
ショートカットの作成 32
変更
デフォルトの設定 39
プロパティ 37

オブジェクトインスタンス 39

オブジェクトショートカット 32

オブジェクトのアクセス権、カテゴリの移動時 28

オブジェクトのスケジュール実行オプション 76

オブジェクトパッケージ 69

インスタンス 68
オブジェクトの追加 19, 69

オブジェクトパッケージ (続き)

管理 68
コンポーネントのエラー 70
作成 69
スケジュール 100
設定 70
認証 71

か

外部受信者 145

拡張機能、処理 49

カスタムイベント 114, 118

カテゴリ 26

アクセス権 29
移動 28
オブジェクトの除去または削除 29
オブジェクトの追加 28
削除 27
作成 27

カレンダー 108

アクセス権の指定 114
形式オプション 109
削除 113
作成 108
定期実行日 111
日付 109, 110

環境変数 66

関係クエリ 37

関係のクエリ 38

監査通知 183

管理 15

イベント 119
カテゴリ 29
ツール 15
フォルダ 25
プロファイル 140

管理エリア 16

管理のツール 15

き

基本設定

オプション 17
共有ライブラリ、処理拡張機能として 49
行レベルセキュリティ、処理拡張機能 49

<

クエリ、関係 37, 38

区切り値、スケジュール形式 92

グローバル配信ルール 178

グローバルプロファイルターゲット 134, 135, 175

け

形式 175
 Crystal レポート 170
 mHTML 167
 Web Intelligence ドキュメント 175
 パブリケーション 151
 言語
 レポートの表示 56
 検索 33

こ

公開 141
 SAP 統合 159
 アクセス権 156, 158
 役割のプロファイル 133
 購読 155, 186
 高ボリュームのパブリケーション 192
 大容量パブリケーション 142
 個人用カテゴリ 29
 コピー
 オブジェクト 31
 フォルダ 24
 コマンドライン引数の指定 63

さ

サードパーティソースドキュメント
 置換 162
 サーバ
 オブジェクトのスケジュールのデフォルト 42
 トラブルシューティング 192
 レポートの表示と変更の使用 42
 最上位の階層
 新しいフォルダの作成 23
 最新表示
 静的ソースドキュメントデータ 162
 ソースドキュメントデータ 142, 193
 レポート 40
 作成
 フォルダ 23
 サブフォルダの削除 24
 サムネイル、Crystal Reports 54

し

実行可能プログラム 62
 設定 64
 失敗したパブリケーションの再試行 191
 受信者
 インスタンスの再配布 190
 動的 145
 配信ルール 177

受信者 (続き)

 パブリケーションのパersonライゼーション 153
 出力先
 BI 受信ボックス 81
 FTP 86
 アンマネージドディスク 84
 オブジェクトタイプ別の利用可能な 35
 指定 164
 スケジュール 80
 送信 34
 デフォルトの設定 81
 電子メール 82, 167
 パブリケーション 146
 パブリケーション名 149, 165
 有効化/無効化 88
 処理拡張機能 49
 選択 51
 レポートへの適用 50
 処理拡張機能としてのダイナミックリンク
 ライブラリ 49
 処理サーバ 42, 193
 処理の設定 99

す

スクリプトプログラム 62
 スケジュール 73
 イベント 97, 183
 オブジェクト 73
 グループ 74
 実行オプション 76
 定期パターン 75
 バッチ 100
 ユーザ 74
 オブジェクトパッケージ 100
 形式 92
 サーバグループ 183
 サーバグループの設定 99
 使用するサーバの指定 42
 通知 77
 パブリケーション 168, 186
 スケジュールイベント 114, 116
 スケジュールされたインスタンス 39
 スケジュール用サーバグループ 183

せ

制限、フォルダレベルインスタンス 25
 静的ソースドキュメント
 置換 162
 セキュリティ、処理拡張機能 49
 選択
 Enterprise 受信者 162

そ

ソースドキュメント、トラブルシューティング 193

つ

通知
 イベント 78
 監査 78
 警告 89
 スケジュール済みオブジェクト 77
 電子メール 78
 通知の監査 78

て

定期パターンでのオブジェクトのスケジュール 75
 データの最新表示 142, 193
 静的ソースドキュメント 162
 データベース
 設定 43
 ログオン、Crystal レポート 180
 データベースのフェッチ 142, 184
 テストモード 185
 デフォルト値 59
 電子メール
 オブジェクトのスケジュール先 82
 通知 78, 182
 パブリケーションインスタンスのトラブルシューティング 195
 パブリケーションコンテンツの埋め込み 167
 パブリケーションの送信先 146

と

動的受信者 145
 ソース 145
 追加 163
 トラブルシューティング 194
 トラブルシューティング
 失敗したパブリケーション 191
 ソースドキュメント 193
 電子メールパブリケーションインスタンス 195
 動的受信者ソース 194
 パフォーマンス 192

に

認証、オブジェクトパッケージ 71

は

パーソナライズされたプレースホルダ
 151, 166
 パーソナライゼーション 58
 Crystal レポート 168, 169
 Web Intelligence ドキュメント 175, 176
 パブリケーション 153
 配信ルール 143
 グローバル 178
 受信者 177
 パスワード 17
 パフォーマンスの向上 192
 パブリケーション 141, 159
 Enterprise 受信者の追加 162
 SAP BusinessObjects Live Office 159
 一般プロパティ 161
 インスタンスの再配布 190
 形式 151
 結果の表示 187
 購読と購読解除 155, 186
 最終処理 185
 作成
 BI 起動パッド 160
 CMC 160
 出力先 146
 スケジュール 168, 186
 ソースドキュメントの追加 161
 追加のオプション 176
 テスト 185
 電子メールへのコンテンツの埋め込み 167
 動的受信者 145, 163
 名前のパーソナライゼーション 149, 165
 パーソナライゼーション 153
 配信ルール 143
 パブリケーション拡張 154
 開く 160
 プレースホルダ 153
 レポートバースト 142
 パブリケーションインスタンスの再配布 190
 パブリケーション拡張 154, 181
 パブリケーションの電子メール送信
 パーソナライズされたプレースホルダの使用 151, 166
 パブリケーションファイル
 パブリケーションのパーソナライゼーション 149, 165
 パブリケーション名
 パーソナライゼーション 149, 165
 プレースホルダ 149, 165
 パラメータ
 Crystal レポート 168
 Java プログラム 66

パラメータ (続き)

NULL 値 60
 SAP NetWeaver BW クエリの変数 58
 ダイナミックピックリスト 59
 デフォルト値 59
 パーソナライゼーション 61

ひ

ピックリスト 59

ふ

ファイルイベント 114, 115
 フィルタ
 パブリケーションデータ 153
 フォルダ 23
 アクセス権 25
 インスタンスの制限の設定 25
 お気に入りフォルダ 26
 コピー/移動 24
 削除 24
 作成 23
 デフォルトのユーザフォルダ 26, 29
 プレースホルダ 149, 153, 165
 プレースホルダの追加
 パーソナライズ値 151, 166
 ブレーンテキスト、スケジュール形式 92
 プログラムオブジェクト 62
 Java プログラム 66
 環境変数 66
 管理 61
 作業ディレクトリ 63
 実行可能プログラム 64, 65
 認証 68
 プロファイル 133
 アクセス 140
 競合 139
 グローバルプロファイルターゲット 135
 公開の役割 133
 作成 134
 プロファイルターゲット 134
 プロファイル値 134
 競合 139
 種類 136
 変数 138
 プロファイルの解決 184
 プロファイル値の変数 138
 プロンプト 45, 180

ほ

翻訳されたレポート
 表示 56

ま

マージされた PDF ファイル、書式設定 178

ゆ

ユーザフォルダ 26
 優先表示ロケール 18

よ

要約ページ、パブリケーション 185

ら

ライフサイクルマネジメントコンソール 56

り

リッチテキスト、スケジュール形式 92

れ

レポート 28
 SAP NetWeaver BW コンテンツの移行 56
 レポートインスタンス
 管理 38, 105
 制限の設定 107
 表示 105
 履歴 102
 列 105
 レポートオブジェクト
 イベントに連動するスケジュール 97
 インスタンスの制限の設定 107
 管理 38
 サーバの指定 42
 最新表示オプション 40
 出力先 80
 使用する Job Server の指定 42
 処理拡張機能 50
 追加とハイパーリンクの設定 53
 データベース設定の指定 43
 ハイパーリンク 51
 ハイパーリンクの表示 53
 表示オプション 41
 フィルタの指定 46
 プロンプト値 45
 既存のハイパーリンクを使用した追加 52
 レポート間のナビゲーション 51
 レポート間のハイパーリンク 51
 レポートタブの公開 175

レポートバースト 142, 184

サードパーティソースドキュメント 162

静的ソースドキュメント 162

ろ

ローカルディスク 146

ローカルプロファイルターゲット 134

Crystal レポート 169

Web Intelligence ドキュメント 176

ログオン、CMC 15

わ

ワークフロー

アラート 122

プロファイルと公開 133

